

社会学伝来考 : 大正の社会学(1)

著者	宮永 孝
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	53
号	3
ページ	168-63
発行年	2006-12
URL	http://hdl.handle.net/10114/1042

社会学伝来考

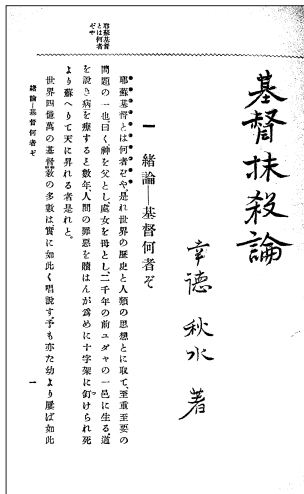
——大正の社会学 [1]

第六章 編年史的にみた日本社会学

大正期の社会科学文献

明治四十四年（一九一）一月十八日、大審院において、幸徳以下二十四名にたいして大逆事件の判決が下った。はじめ全員死刑であったが、“恩赦”により、うち十二名が無期懲役、二名は有期に減刑された。

同年一月二十四日の早朝、幸徳ら十一名は市ヶ谷刑務所において絞首刑に処せられた。この間、幸徳は三疊一間の一点の火気なき獄中で、鉄窓から入る弱き光線をたよりとし、『基督抹殺論』（明治44・2、丙午出版社より刊行）を書きつづけていた。すなわち「是れ予が最後の文章にして生前の遺稿也」といったものがそれである。……



幸徳秋水著『基督抹殺論』（丙午出版社、明治44・2）。
〔法政大学・大原社会問題研究所蔵〕

やがて暗く陰うつな明治という時代は、翌四十五年に終りを告げると、年号は大正となり、わが国ははげしい護憲運動を経て、第一次世界大戦、極右的国家主義の波に巻きこまれてゆく。

明治四十五年（一九一）七月三十日——明治天皇は没し、皇太子・嘉仁が践祚し、年号は「大正」と変わった。

“大正”の出典は、「易経——臨封」の象伝、「大亨以正、天之道也」である。大正天皇（明治天皇第三皇子）は、病弱なうえ、政治的な指導力に欠けており、在位わずか

宮 永 孝

十五年で、裕仁親王（大正天皇の第一皇子、のちの昭和天皇）へと時代は移行してゆく。

明治四十五年（一九一二）
（大正元年）

同年三月、呉の海軍工廠で共済会問題から一万人規模の大ストライキがおこり、翌月鎮圧された。七月、第三回日露秘密協約が調印され、内蒙古を分界線として、相互に特殊利益をみとめた。同月、明治天皇の崩御にともない、「大正」と改元した。

八月、奈良県下の被差別部落民が「大和同志会」を結成し、奈良市において第一回大会をひらいた。

九月、明治天皇の大喪が東京・青山でおこなわれた日、乃木希典夫妻が殉死した。十一月、二箇師団増設案が否決されたことにより、翌月陸軍大臣・上原勇作が辞表を提出した。後継陸相がえられず、西園寺内閣は内閣不統一の責を負い、総辞職した。

後継首相に桂太郎が就任し、第三次桂内閣が成立した。

上原の辞任によって西園寺内閣が倒れたのを機に、藩閥打倒にたちあがったのは「交詢社」（明治十三年に福沢諭吉が設立した、わが国初の社交クラブ、慶応義塾関係者を主会員とする）の面々であった。かれらは「閥族打破憲政擁護」をスローガンに、第一次護憲運動をおこし、政界からは尾崎行雄、犬養毅らが参加した。

〔文化・学問・教育〕

十月、大杉栄・荒畑寒村ら『近代思想』を創刊。これは二ヵ年つづき、二十三号をもって廃刊となった。

大正二年（一九一三）

一月、東京築地の精養軒において、全国記者大会（四百名が出席）が開かれ、「憲政擁護」、閥族掃蕩を決議した。憲政擁護とは、官僚政治や閥族（閥をつくっている一族や党）政治に反対し、立憲政治（憲法をもってする政治、憲法に遵拠してやる政治）⁽³⁾を守るこの意である。

同月さらに憲政擁護第二回国民党大会が東京の新富座で開かれ、大阪中之島公園に三万人の群集があつまり、さかんに気炎を上げた。二月、政友会、国民党が内閣弾劾の決議案を提出した。

護憲運動は、空前の盛りあがりをみせ、激化したために、第三次桂内閣は総辞職した。代わって第一次山本権兵衛内閣が成立した。

六月、東京モスリンで女工四千名が労働条件改善を要求してストライキをおこした。またこの年、東北地方や北海道は凶作であったために、疲弊した農家では娘を売る者が急増した。女衒ぜげん（人身売買を職業とする者）は、ことばたくみに煽おだてあげ、十五、六歳から二十前後の娘を手に入れると、彼女たちを工女や淫売婦として、国内はおろか満州・朝鮮・南洋にまで売り飛ばした。

大正三年（一九一四）

いつの時代においても、大型の建築の受注とか、兵器の売却、軍艦の建造について、請負側から、注文者・購入者にたくさんのお金ヨシッゴン（売買の仲介をした手数料）が贈られるのが、一般の商習慣となっているが、島田三郎（一八五二―一九二三、明治・大正期のジャーナリスト、政治家）は、暴露演説をやって海軍を痛撃した。

一月、シーメンス事件（日本海軍の高官が軍需品買入に際して、ドイツのシーメンス社より収賄をおこない、山本内閣は総辞職した）がおこった。海軍中将・藤井光五郎は、無線電信に関して三十六万九千余円、海軍中将・松本和は、軍艦金剛を注文して四十万九千八百円リベートを取った科で収監された。⁽⁴⁾二月、海軍収賄問題で日比谷において内閣弾劾国民大会がひらかれた。四月、第二次大隈内閣が成立した。

八月、第一次世界大戦が勃発するや、日本は日英同盟を口実に、ドイツが租借している青島チンタオや太平洋の島々を占領し、のち中国にたいして二十一条の要求をつきつけた。

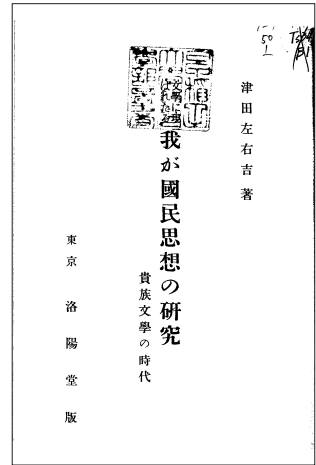
〔文化・学問・教育〕

阿部次郎の『三太郎の日記』刊行。

大正四年（一九一五）

一月、日本は中国政府（袁世凱えんせいがい大總統）に二十一条の要求を提出した。その主なものは——山東省のドイツ権益を受けつぎ、大連・旅順の租借期限を延長し、中国沿岸の港湾と島を他国に譲与もしくは貸与しないことを約束させ、さらに日本人顧問の採用などを求めた——であった。五月、中国側はほぼこれらの要求を承認した。が、排日運動のひきがねとなった。

第一次世界大戦がおこったことで、日本経済は交戦諸国の戦時需要により、好況こうきやうを現出させ、飛躍的な発展をとげ、軽工業部門では、紡績・製



津田左右吉著『『文学に現はれたる』我が国民思想の研究 貴族文学の時代』
〔早稲田大学中央図書館蔵〕

糸・綿布などの生産と輸出がのびた。⁽⁵⁾

十一月、京都御所柴宸殿において、大正天皇の即位式がおこなわれた。

〔文化・学問・教育〕

大杉栄の『社会的個人主義』刊行。

大正五年（一九一六）

一月、大陸浪人の福田和五郎は、袁世凱排撃を要求して、大隈首相に手製爆弾（かん詰）を投げつけたが、不発におわった。七月、第四回日露協約に調印し、中国における特権を互いに認めあった。

十月、大隈首相は辞任し、後継の内閣首班に寺内正毅（まさたけ長州藩士出身の陸軍軍人）が就任した。寺内は明治四十三年（一九一〇）初代朝鮮総督となったとき、武力弾圧政治をおこなったことで名をなし、こんどは山県らの政治力を背景とし、藩閥内閣を組織した。

〔文化・学問・教育〕

河上肇『貧乏物語』（『大阪朝日新聞』）の連載がはじまった。また津田左右吉の『『文学に現はれたる』我が国民思想の研究』（東京・洛陽堂）の刊行がはじまった。さらに論壇においては、同年一月一日から十九日まで佐々木惣一（明治から昭和期の法学者、京大教授、滝川事件のとき辞任した）の「立憲非立憲」（『大阪朝日新聞』）が掲載され、また吉野作造（明治から昭和期の政治学者）は『中央公論』一月号に、「憲政の本義を説いて其の有終の美を済すの途を論ず」を発表し、大正デモクラシーに理論的基礎をあたえた。

大正六年（一九一七）

三月、ロシアのペトログラードで革命がおこった結果、労働者や兵士の代表からなる臨時政府が成立し、のちニコライ二世は退位宣言に署名し、名実ともにここにロマノフ王朝は滅亡した。

同月、日本政府はロシアの仮政府を承認した。五月、堺利彦・山川均ひとしら在京の社会主義者三十四名は、メーデー記念の集りをひらいたとき、ロシア革命支持を決議した。

この年の三月と六月に、室蘭日本製鋼所や長崎三菱造船所の職工らは、賃あげを求めて、大規模なストライキをおこした。十一月、外相石井菊次郎とアメリカの國務長官ランシングとの間で、いわゆる石井Ⅱランシング協定（中国における日本の特殊權益をみとめる。中国の独立と領土不可侵、門戸開放と機会均等を承認）がむすばれた。同月、政府は二十五個師団、八八艦隊の新国防案を発表した。

大正七年（一九一八）

第一次世界大戦はまだつづいており、一月日本政府は、居留民保護を名目に軍艦二隻をウラジオストックに派遣した。七月末、米価が大暴落したために市場は大混乱をきたし、翌八月富山県中新川郡西水橋町で米騒動がおこった。白米一升は、五〇錢以上もした。この米騒動は、京都や名古屋に波及し、さらに全国にまで及んだ。検挙者数万、起訴された者は約七千七百名⁽⁶⁾であった。

九月、寺内首相は辞任し、代わって政友会総裁の原敬^{たかし}（南部藩士出身の明治・大正期の政治家）が組閣した。

十一月、ドイツのヴィルヘルム二世が退位し、オランダに亡命。ドイツは連合国と休戦条約に調印し、第一次世界大戦は終結した。

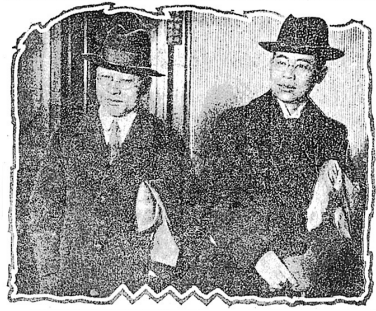
大正八年（一九一九）

一月中旬、第一次世界大戦の講話會議がパリで開かれ、首席全権には西園寺公望がなり、それに牧野伸顕がつきそった。日本側は中国山東半島の利権と旧ドイツ領の南洋諸島の譲渡を表明すると、中国側の全権代表より山東半島の返還をもとめられた。

四月、講和會議で山東省のドイツ利権について日本の要求がみとめられ、また五月には赤道以北南洋諸島の委任統治国を日本領とする旨の決定がなされた。

二月、大阪において大原社会問題研究所の創立總會がひらかれた。三月、京城をはじめ朝鮮各地で、“朝鮮の独立と朝鮮人民の自由民たるところ”を求める学生や一般民衆によるデモがおこなわれ、全国に波及した。デモ隊は日本官憲との正面衝突をさけ、夜中に山上で“万歳”をとこなえるもので、警官や憲兵がやってくると別の山に集まる戦術をとった。

この抗日運動は、四月末までにはほぼ鎮圧された。が、総督府の記録によると、参加人員は約六十万、騒擾箇所は六百余であった（「万歳事件^{ばんざい}」）。



むかって右が森戸辰男助教授、左は大内兵衛助教授。『東京朝日新聞』（大正9・1・29付）より。

五月、北京の学生三千余名が、山東半島問題に抗議してデモをおこない（五・四運動）、東京でも中国人留学生約二千名が国恥記念デモをおこなった。

衆議院議員選挙法を改正し、三円以上の納税者に選挙権をあたえることに決した。

十一月、一年志願兵条例・一年現役兵条例を公布。

「文化・学問・教育」

雑誌『改造』『解放』の創刊。

大正九年（一九二〇）

万人の民衆が普通選挙をもとめ、大会と示威行進をおこなった。

三月、ソビエトのバルチザンと日本軍がニコラエフスク（現・プガチョー黒龍江下流の町）で交戦し、日本軍は敗北した結果、生き残った将兵と居留民一二二名は投獄ののち虐殺された。このとき居留民のひとり、殺される寸前に獄中の壁に「大正九年五月二十四日午後十二時 忘ルナ」と遺書をかいた（尼港事件）。

株価が暴落し、第一次大戦の戦後恐慌がはじまった。五月、日本最初のメーデーが上野公園でおこなわれ、一万余人が参加した。

十月、第一回国勢調査を実施——日本の人口は約七七九六万人。呉海軍工廠で戦艦「長門」（三三八〇トン）の建造がはじまった。

十二月、大杉栄・堺利彦・山崎今朝弥（大正・昭和期の弁護士、社会主義の宣伝や教育にあたる）ら、「日本社会主義同盟」を結成したが、即日解散を命じられた。

「文化・学問・教育」

同年一月、東京帝大経済学部助教授・森戸辰男（一八八八—一九八四、大正・昭和期の社会学者、のち大原社会問題研究所研究員、大阪労働学校講師、衆院議員、広島大学長を歴任）は、経済学部の紀要『経済学研究』（第一巻・第一号、大正9・1）に発表した論文「クロポトキンの社会思想の研究」（五七頁—一二三頁）を危険思想とみなされ、休職処分をうけ、さらに発行人・大内兵衛助教授とともに新聞紙法違反の科で起訴

された。森戸は禁錮三カ月の判決をうけ、収監された。

マルクス著、高たか島がしま素之（一八八六）一九二八、同志社中退、大正期の社会思想家）訳『資本論』の刊行がはじまった。

慶応、早稲田が大学令により初めて私立大学として設立の認可をうけ、ついで明治・法政・中央・日本・国学院・同志社も設立認可をうけた。この年あたりから、各大学に社、会、学、科、設置の機運が盛りあがってきた。

大正十年（一九二一）

三月、皇太子裕仁は、反対を押し切ってヨーロッパに外遊し、九月帰国した。四月、足尾銅山争議おこる。七月、神戸三菱、川崎両造船所で職工三万人がストライキをおこし、軍隊が出動して鎮圧した。

九月、安田善次郎（明治・大正期の実業家、安田財閥の創始者）は、大磯の別邸で暴漢に刺殺され、ついで十一月、原首相が東京駅頭で中岡良一によって刺殺された。原の暗殺により、高橋是清の内閣が成立した。

十二月、ワシントン軍縮会議は暮れに終らず、軍縮案の決定は翌年にもちこされた。

〔文化・学問・教育〕

羽仁もと子（一八七三―一九五七、大正・昭和期の女子教育者）は、夫の羽仁吉一とともに自由主義の立場から自由学園を創設した。また西村伊作（一八八四―一九六三、大正・昭和期の教育家、山林地主・西村モンの養子、平民社の運動にかかわり、大逆事件に連座したり、不敬罪でたびたび起訴留置された）は、与謝野寛夫妻や石井柏亭（一八八二―一九五八、明治から昭和期にかけての洋画家）の協力をえて、文化学院を創設したが、文部省の方針にそわない独特の教育課程のために、正式に認可されなかった。

大正十一年（一九二二）

二月、前年から続いていたワシントン軍縮会議の結果、英・米・日の主力艦保有比率は五・五・三となり、建造中の戦艦九隻が廃棄された。三月、京都岡崎公会堂に約二千名の水平運動家（被差別部落の撤廃・解放をめざす活動家）の代表があつまり、全国水平社創立大会がひらかれた。このとき南梅吉（一八七八―一九四七、大正・昭和期の水平運動家）が委員長にえらばれた。

古来、穢多・非人は賤民とみられ、封建時代を経て明治・大正の時代になっても、新平民とか部落民と呼ばれ、小学校・職場・軍隊において非人間的な蔑視と差別をうけた。かれらは依然として、伝統的の賤視と屈辱から脱がれることができなかった。⁽⁷⁾

全国三百万部落民のために水平社（部落民の連合組織）は、このとき綱領（主義、主張）と宣言を発表した。

綱 領

- 一 特殊部落民は 部落民自身の行動によって絶対の解放を期す
- 一 吾々特殊部落民は 絶対に経済の自由と職業の自由を 社会に要求し 以て獲得を期す
- 一 吾等^{われら}は人間性の原理に覚醒^{かくせい}し 人類最高の完成に向って突進す

宣 言

全国に散在する吾が特殊部落民よ団結せよ^{だんけつせよ}

長い間虐められて来た兄弟よ、過去半世紀間に種々なる方法と、多くの人々によってなされた 吾等の為めの運動が、何等の有難い効果をもたらさなかった事実は、夫等のすべてが吾々によって、又他の人々によって 毎に人間を冒瀆^{ぼうとく}されていた罰であったのだ。そして これ等の人間を勦^{はうむ}るかの如き運動は、かへって多くの兄弟を墮落^{だらく}させた事を想へば、此際吾等の中より 人間を尊敬する事によって自ら解放せんとする者の集団運動を起せるは、寧ろ必然である。

兄弟よ、吾々の祖先は自由、平等の渴望者であり、実行者であった。陋劣なる階級政策の犠牲者であり 男らしき産業的殉教者であったのだ。ケモノの皮剥ぐ報酬として、生々した人間の皮を剥取られ、ケモノの心臓を裂く代価として、暖い人間の心臓を引裂かれ、そこへ下らない嘲笑の唾^{つば}まで吐きかけられた 呪はれの夜の悪魔のうちにも、なほ誇り得る人間の血は、涸れずにあった。

そうだ、そして吾々は、この血を享けて 人間が神にかわらうとする時代にあふたのだ。犠牲者がその烙印^{らくいん}を投げ返す時が来たのだ。殉教者が、その荊冠^{けいかん}を祝福される時が来たのだ。



全国水平社大阪府連合会第一回大会
(1930・7・6) のポスター。

[法政大学・大原社会問題研究所蔵]

吾々がエタである事を誇り得る時が来たのだ。
吾々は、かならず卑屈なる言葉と怯懦なる（おくびょうでいくじがない）行為によって、祖先を辱しめ、人間を冒瀆してはならぬ。
そうして人の世の冷たさが、何んなに冷たいか、人間を勉はる事が何のであるかを よく知っている吾々は、心から人生の熱と光を願求礼讃するものである。

水平社は、かくして生れた。

人の世に熱あれ、人間に光あれ。

大正十一年三月

水平社⁽⁸⁾

同月、高橋内閣は、過激社会運動取締法案を提出していたが、貴族院で修正可決した。

六月、高橋内閣は改造に失敗すると総辞職し、代わって加藤友三郎内閣が成立した。

七月、日本共産党はコミンテルン（モスクワで結成された国際的な共産党組織）の日本支部として承認され、非合法下で結成された。

十月、シベリアの日本軍（沿海州派遣軍）は、撤退を完了した。

大正十二年（一九二三）

三月、中国側が二十一カ条の廃棄と旅順・大連の回収を要求したが、日本政府は拒絶した。
四月、石井＝ランシング協定を廃棄。

六月、第一次共産党の大検挙がおこなわれた。一説によると、『早稲田大学百年史 第三巻』所収。同年六月四日、夜八時ごろ、警視庁内に特高課長、係長らが極秘密裡にあつまり、何やら協議をかさねた。それは共産主義者、社会主義者ら

猪俣教授は けふ召喚の模様

赤嶺と山の様な押収品
警視廳昨夜の緊張

【東京二十一日電】猪俣誠教授の召喚の模様は、警視廳の捜査官の間で、昨夜から今日にかけて、大いに注目を集めている。猪俣教授は、昨夜午後十時、警視廳に召喚された。猪俣教授は、昨夜午後十時、警視廳に召喚された。猪俣教授は、昨夜午後十時、警視廳に召喚された。

前例ない大事件 家宅搜索十六箇所

本道警廳と有力事務所

管内宣傳は 大演習當時から

運動の中心は大阪

【東京二十一日電】管内宣傳は、大演習當時から、運動の中心は大阪。管内宣傳は、大演習當時から、運動の中心は大阪。管内宣傳は、大演習當時から、運動の中心は大阪。



大学の望月学生 監（無帽）の案内で、恩賜館の研究室へ臨検にむかう、検事と予審判事たち。『東京朝日新聞』（大正12・6・6付）

早大臨検の光景

二時間半に及び、重要書押収

【東京二十一日電】早大臨検の光景は、二時間半に及び、重要書押収。早大臨検の光景は、二時間半に及び、重要書押収。早大臨検の光景は、二時間半に及び、重要書押収。

を一挙に検束する相談であった。

六月五日正午までに、「治安警察法」「二十八条」違反（秘密に結社を組織し、又は秘密結社に加入したる者）の科により、警視庁に引致されたものは八十名、家宅搜索をうけた所は十六箇所であった。

逮捕のうえ起訴された者は、

- | | | |
|------|------|------|
| 堺利彦 | 山川均 | 高津正道 |
| 近藤栄蔵 | 上田茂樹 | 橋浦時雄 |
| 浦田武雄 | 渡辺万蔵 | 杉田修一 |
| 田所輝明 | 市川正一 | |

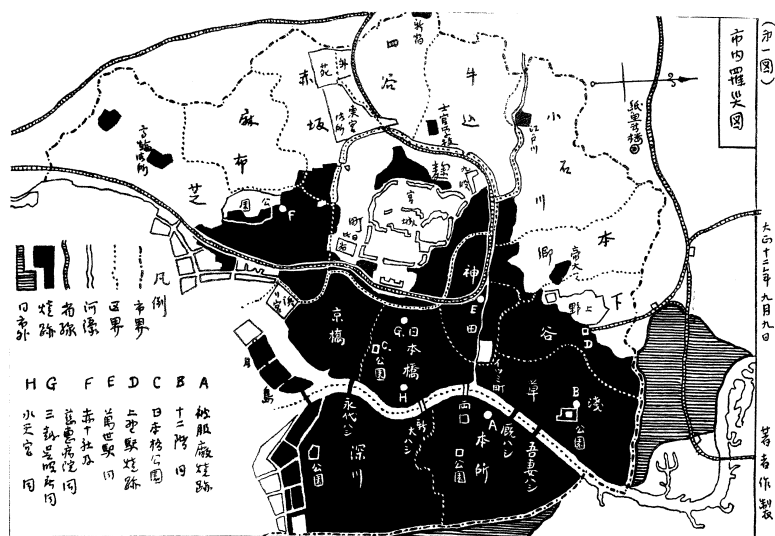
らであり、かれらは東京刑務所に収監された。

かれらは社会主義者ちゅうの中心人物であったが、このほかに大学教授らも検挙された。

早稲田大学恩賜館樓上にある佐野学と猪俣津南雄両講師の共同研究室

も搜索をうけた。滝川検事・沼審判事・裁判所書記・学生監・警視庁警察官・刑事からなる一行は、室内を二時間ばかり搜索し、証拠書類を押収してひきあげた。佐野学（一八九二〜一九五三、大正・昭和期の代表的な社会運動家）は、数日前から家（牛込区早稲田南町三〇番地）を留守にしていたが、自宅の搜索をうけた。かれは治安警察法違反の嫌疑をうけており、危険を察知し、事件発生の前日から地下にもぐり、以後二カ年間海外で逃亡生活をおくるのである。

政経学部の同僚の猪俣津南雄（一八八九〜一九四二、大正・昭和期の経済学者、ウィスコンシン・シカゴ・コロンビア各大学にまなび、帰国後早大講師、日本共産党結成とともに入党）も、自宅（笹塚一一五二）の搜索をうけた。



東京市内の罹災図。黒い部分は焼跡をしめす。

猪俣は、六月五日午後四時から慶応義塾大学でひらかれたアダム・スミス生誕記念講演会にのぞみ、アダム・スミスの経済学について約一時間ほど話したのち、控室で新聞記者に昂奮してつぎのように語った。

——じつは四日午前八時四十分、谷予審判事が見えて、治安警察法に抵触した堺、近藤はか十数名を検挙した。参考のため搜索したいといふことでした。押収されたものは、学校（大学）で教授材料の小作争議についてのノート、コール（ジョージ・ダグラス・ハワード、一八八九―一九五九、イギリスの社会学者・経済学者）の『国家論』を抜書したノート、電報二通、書信数通でして、講義材料を押収するなどは、甚だ怪しからんと思ひます。

殊に学校の私の研究室をも搜索したといふことですが、もし事実であれば、学園の神聖、研究の自由を蹂躪したものでして、こんなことがもし許されるものでしたなら、研究室へは重要な研究資料は持ち込まれず、したがって深い研究を妨げられることになると思ひます。

社会主義者の人たちは、何んな関係で検挙されたか知りませんが、私は一学究であるので、実行運動には関係していません。

神田で発会式を挙げたと伝へられる極東共産党には、もちろん連名もしておらないのですが、いま露国に入っている片山潜氏とは知己でした。それは米国のウィスコンシン大学に在学中、いろんな研究資料をあたえられまして、研究を助けられただけでして、その後露国に入られてからも片山氏から、二、三度手紙はいただきました。

しかも、何んでもない音信なので、それは全部破棄して終わりました。こうして片山氏から学究上の援助を受けていたことを大袈裟に内地（日本）へ宣伝し、内報した人もあるやうですから、誤解があったとしたら、その誤られた通報の結果ではないかと考へています（『東京朝日新聞』大正12・6・6付）。

このように猪俣は、共産党の日本支部結成とは関わりをもたず、日本共産党の結成を指導した大物の社会運動家・片山潜との結びつきを単に学究上のこととしている。

なお、猪俣講師の夫人は、新聞報道によると、カルサといい、ロシア系のユダヤ人であった。笹塚の借家に老母と従妹の四人ぐらしであった。

復も社會主義者九名

軍隊の手に刺殺さる

龜戸署管内に於ける怪事件

死體は石油を注いで直ちに焼却す

九月一日震災當時の帝都は、殆んど無警察の大混亂裡に陥り、機に乗じて不逞の徒黨が横行し流血の慘事は到る所に行はれた、秩序漸く回復する儘に意外なる事實は續々として暴露し、熾火の中になつたよふ當時の帝都は眞に殺氣漲り渡るものがあつた殊に龜戸方面に於て社會主義的勞働者九名を一束にし刺殺された如き一大異變事案へ起つたのであ

『東京朝日新聞』が報じる労働運動家刺殺事件。



龜戸警察署の古森繁高署長。

ともあれ、司直による大学の研究室の臨検そのものは、大したことでないにせよ、それがもつ意味はひじょうに重大であつた。大学側からみれば、大学の神聖と独立、威厳、学問の自由をふみにじられたことであり、新聞・雑誌は当局を批判するとともに、学校当局を論難した。吉野作造などは、「学校自らを侮辱した早大当局の態度——早大に有力な思想家なし」といい、もし大学が教師の人格を信じるのであれば、官憲の了解をえたうえで、教師の立ちあいのうえで、学校当局の手で研究室を取調べるのが、このさい当をえた処置である、とのべている(『帝国大学新聞』大正12・6・12付)。同年十月、佐野と猪俣は大学を解職になった。

八月、加藤首相の死により、内閣は総辞職し、代わって山本権兵衛が組閣し、ここに第二次山本内閣が発足した。

九月一日——午前十一時五十八分、関東地方にマグニチュード八の大激震が起り、死者九万一二三四四人、全壊焼失四六万四九〇九戸といった大惨事となった。相模湾伊豆大島付近の海底を震源地とするこの空前絶後の大地震により、横浜や東京は焼土と化した。惜しいことに、古い江戸や明治のなごりといったものは、この大震災により灰じん^{かいじん}に帰した。

震災の混乱のさなか、不逞^{ふてい}の社会主義者や朝鮮人、博徒、無頼の徒が放火掠奪のかぎりをつくし、随所に蜂起する、といった流言が飛び、自警団が組織されたり、内務省警保局より各所へ無電でもって警戒するよう令達され、東京・神奈川・埼玉・千葉県に戒厳令がしかれた。

九月二日——朝鮮人暴動のデマがとび、関東一円で六千名以上の何の罪もない朝鮮人や中国人などが虐殺された。殺りくをほしいままにしたこの大事件は、震災後、被害者側の朝鮮人によって調査されたが、日本政府はなぶり殺^{ごろう}しの事実を知りながら、こん

にちに至るまで何の調査をおこなうことなくほおかぶりし、あまつさえこの大虐殺をうやむやのうちに葬むってしまった。加害者であるわれわれ日本人は、この大殺りくの事実を忘れてはならぬ。

九月四日——亀戸署において、南葛労働組合の組合員九名が、軍隊によって殺害された。かれらはいずれも労働運動家であった。南葛労働組合は、その当時革命的労働運動の拠点として知られ、かねて当局からマークされていた。

震災の大混乱に乗り、不逞の輩^{やから}が亀戸町方面において、掠奪・放火・暴行しているとうわさを耳にした所轄亀戸警察署⁽⁹⁾は、同方面の警戒の任にあった近衛騎兵第十三連隊（『関東大震災全史』によると、習志野騎兵連隊）に応援をもとめ、震災当日から三日までの間に、一千三百余名の市民・労働者・朝鮮人を検束し、署内の留置場はもとより、事務室・小使室・演武場に押しこめ、軍隊がその看守役となった。

これらの検束者の中には、組合の幹部九名のほか、警官を“偽者”呼ばわりして逮捕された自警団員が四名ふくまれていた。

九月四日の夜十時ごろ——警官を偽者あつかいをし検束された自警団員は、依然反抗的態度が目につき、看守役の兵士に暴行を加え、武器まで奪おうとしたので、隊長の田村春吉少尉は、部下十数名に銃剣の使用を命じ、かれら四名を死に至らしめた（警視庁木下刑事部長談）。刺殺された自警団員の氏名は、

木村条四郎	(24)	府下砂町大字久左衛門二十番地	理髪業	当時・中央大学生
岩本久米雄	(29)	同右	高等工業学校出身	鋳物業
鈴木金之助	(33)	同二十二番地	三井物産社員	
秋山藤次郎	(?)	同二百十九番地		

である（『東京朝日新聞』大正12・10・11付）。

ついで同日の深夜十二時ごろ、——官憲の不当をなじり、悪罵^{あくば}を署員にあびせ、足踏みをする主義者の一団があった。それが終わると、かれらは一斉に革命歌を高唱しだした。

ともあれ、あまりにもうるさく騒ぎ立てるので、署長はふたたび軍隊の出動をあおいだ。兵士五、六名をともなった将校一名がやってきて、さ

わが立っている十名を留置場の外に連れだし、演武場の右側の広場までくると、「殺すのか。殺すなら殺せ！」といった、どなり声がした。そのあとすぐ恐ろしい悲鳴が闇の中でしばらく聞えたかと思ったら、ふたたび静かになった。……

しかし、「亀戸事件」(『関東大震災全史』所収、大正13・3、帝都罹災児童救援会)にみられる検束された者の談話によると、亀戸署に検束された者は、「ただ恐怖に慄^{ふる}へあがってヒソリとしていて、なんら喧騒^{けんそう}をきわめたやうなことはない。労働歌など唱^{とな}へたことは絶対でない。署内はいったいに静かであった⁽¹⁾」と語っている。右の主義者らは戸外に両手をしばられ、整列させられ、刺し殺されようとしたとき、平沢計七だけは「待ってくれい」と悲痛の一語を発し、さいごに「労働者万歳!」を叫んだ。他の者は一語も発しなかった、という。

このとき刺殺されたのは、つぎの十名であった。

【氏名】	【年齢】	【殺害されたときの住所ならびに出生地】	【職業または所属機関】
平沢計七	(34)	府下大島町三丁目二二番地 (新潟県北魚沼郡小千谷町)	労働者相談所主
河合義虎	(21)	府下亀戸町三五一九番地 (長野県小県郡西塩田村)	南葛労働組合幹事
鈴木直一	(23)	(出生地不詳)	同組合員
北島吉蔵	(19)	(秋田県鹿角郡小坂町小坂鉱山)	〃
山岸実司	(20)	(長野県小県郡大屋町)	〃
近藤弘造	(19)	(群馬県群馬郡元総社村石倉)	〃
加藤高壽	(26)	(栃木県塩谷郡矢板町川崎反町)	同組合支部
吉村光治	(23)	府下吾妻町小村井一一六三 (石川県石川郡三馬村上有松)	〃
佐藤欣治	(21)	(岩手県江刺郡田原村石山)	〃
中筋宇八	(24)	府下亀戸町四〇〇番地、 武田甲次郎方(出生地不詳)	職工



殺された主義者、右から
 【上段】平沢計七(34) 河合義虎(21) 鈴木直一(23)
 【中斷】北島吉蔵(19) 山岸実司(20) 近藤弘造(19)
 【下段】加藤高壽(26) 吉村光治(23) 佐藤欣治(21)



『種蒔き雑記』（種蒔き社、1924、XXV－94号）にある亀戸事件の犠牲者のカット。



「亀戸事件犠牲者之碑」
(亀戸・浄心寺の墓地の入口あたりにある)
〔筆者撮影〕

以上の記事は、おもに亀戸警察署長・古森繁高が各紙に伝えたものによって記したものである。が、署長の談話をうのみにはできないのである。なぜなら、警察当局は、じぶんたちにとって、つごうのよいことしか発表していないからである。唯一事件の真相を知るものは、殺害命令を出し

11付）。

古森署長（労働運動の実情に精通した、元警視庁の労働係長）の命をうけた高木警部は、突き殺した死体を人夫をやとい搬出すると、大島町四つ木橋附近——荒川放水路附近で、震災火災で横死した多数の無名の死体とともに、石油をかけて全部焼却した（『東京朝日新聞』大正12・10・

11付）。
抜刀した警官らに踏み込まれ、文句なしに検束されると、亀戸署に連行された者たちであった。
刺殺された河合義虎、北島吉蔵、加藤高壽、山岸実司、鈴木直一、近藤弘三ら六名は、三日午後十時すぎ、南葛組合本部で炊出しの相談ちゅう、

合員ではなかったが、亀戸町香取神社境内のちかくで暴行容疑で逮捕され、この災禍にあった。
河合義虎は、南葛労働組合の幹部であった。同人は茨城の日立の出身であり、同地の小学校を卒業したのち、機械工となった。北島吉蔵は、秋田県の小坂銅山で生まれ、のち父とともに日立鉱山で働き、上京後は労働のかたわら、正則英語学校に通学した。加藤高壽は栃木県の小学校を卒業後、セルロイド工となり、のち南葛労働組合に入会した。事件後、妻多美子（二十七歳）は、郷里栃木県に幼児を連れ帰った。中筋宇八は、組合員ではなかったが、亀戸町香取神社境内のちかくで暴行容疑で逮捕され、この災禍にあった。

注・年齢および出生地に関しては、加藤文三著『亀戸事件』（大月書店）によった。

た者と同じい手をくだしたその実行者である。真相はいまも闇のなかにある。……

殺された十名の革命的労働者のなかの中心的人物であったのは、河合義虎（二十一歳）である。かれは共産黨員であり、共産青年同盟委員長であった。美談が伝えられている。大地震がおこったとき、わが身の危険をまかえりみず、倒壊家屋の下から、三人の子供を救いだしたり、迫害される朝鮮人をかばって保護したり、献身的に地域住民の困難を助けたりして、隣人たちから感謝されていたという（関東大震災・亀戸事件四十周年犠牲者追悼実行委員会編『関東大震災と亀戸事件』刀江書院、昭和38・9）。

河合義虎は、病気を患ってまで先頭にたち、治安に努力し、また吉村光治（二十三歳）は、病気の母を背おって避難し、しもの世話までした孝行むすこであった。けれど不幸にして、夜警中ひっぱられ、そのまま帰らぬ人となった。

警察は、かねてねらいをつけていた共産黨員を震災のどさくさにまぎれ、軍隊の力をかりて殺したもののようだ。殺害者はだれであったのか。当初、田村春吉少尉のひきいる習志野騎兵第十三連隊の兵士とされていたが、あとからやってきた宇都宮の兵隊（歩兵隊）であったという説もある。殺された場所や方法についても、いろいろな説がある。

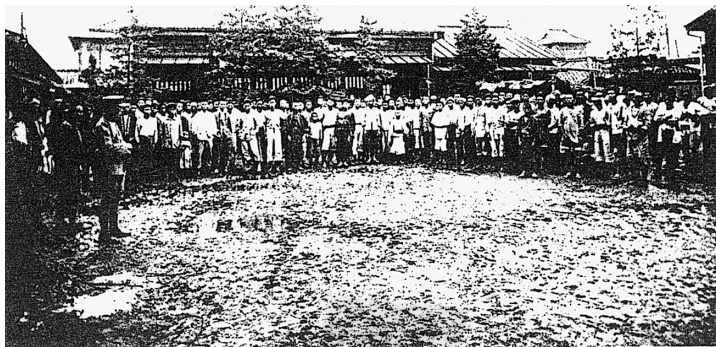
労働運動者——十名全員を、署内の中庭で一度に殺したのではなく、何組かに分けて殺害したとも考えられる。亀戸町水神森の自転車商・諸岡の証言によると、九月三日の午後十二時ごろ——亀戸署から二丁ほどはなれた第四小学校の南——ごみの埋立地あたりで銃声がしたので、現場にかけつけたところ、四人の銃殺死体があったという。

そのそばにいた亀戸署の伊藤巡查部長がいった。「これは社会主義者だ。まだあと二人殺さなければならぬ」と。

署内で殺しきれなかった者は、その他大勢の拘留者とともに、荒川放水路に連れてゆかれ、そこで軽機関銃の標的にされて殺されたとも考えられる。（二村一夫「亀戸事件小論」法政大学大原社会問題研究所『資料室報 No.138、一九六八年三月』所収を参考にした）。

警察側の発表を新聞記者がそのまま記事にしたのが、先に述べたものであるが、これをそのままうのみにはできない。大震災後の混乱のどさくさにまぎれて、意図的に殺害したとも考えられるからである。

九月十六日——無政府主義者・大杉栄とその妻伊藤野枝のえおよび同人の甥・橋宗一（当時七歳）は、大手町の憲兵隊本部に連行されると、司令部室で扼殺された。かれらは東京憲兵隊渋谷分隊長兼麹町分隊長・甘粕正彦（憲兵大尉）とその部下らの手にかかって殺されたのであるが、ことは大物の社会主義者の死であっただけに、世間を大いに騒がせた。



千住署内に収容された朝鮮人。
『東京震災録^{地図及写真帖}』(大正15・3)より。

今日朝開院式に行啓の途上
攝政宮殿下を狙撃す
突如怪漢數名虎の門に現はれ
殿下は御無事
午後一時宮内省公表

今朝攝政殿下議會開院式に行啓の御途中午前十四時十分虎之門跡に御差しかかり遊ばれたる所一兇漢數名の右方よりお召車に對して發砲し窓ガラスを破損せるも殿下には些の御障りもあらせられずそのまゝ開院式に臨ませられ開院式の勅語を賜はり終了後御機嫌麗はしく午後零時十分還啓遊はされたり兇漢は直ちに逮捕せられたり

些の御亢奮の
状も示され給はず
玉音朗々勅語御朗讀

肅然たりし開院式
態度御悠然の攝政宮

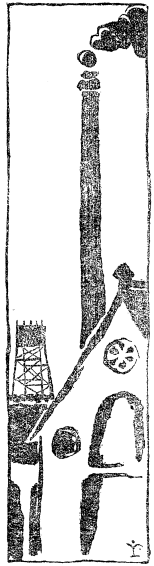
東京朝日新聞
日七十三
二會
市内版
天氣豫報
明日十八日は北東の風吹く

皇太子狙撃を伝える『東京朝日新聞』
(大正12・12・28付)の記事。



扼殺されたときの三人の服装は、大杉が白麻^{しろあさ}の背広服、野枝は薄色の羽^は二重^{ふたへち}地の洋服、宗一は大ガラのしぼりの浴衣^{ゆかた}を着ていた。が、三人の死体は裸にされ、古井戸に投げ込まれたとき、衣類は鋭利なハサミですた／＼に切りきざみ、遺留品とともに通信省^{ていしん}のやけ跡に焼きすてられた⁽¹²⁾。山本内閣は、帝都の復興事業と普通選挙に力を注いでいたが、どちらも思うようにゆかず、十二月虎の門事件(皇太子狙撃)がおこり、総辞職した。

十二月二十七日午前十四時十分ごろ——皇太子裕仁は帝國議會の開院式に出席する途上、車が虎の門付近を通過しようとしたとき、何者かによって銃撃をうけた。弾丸は窓ガラスを打ち抜いて天蓋に達しただけで、車中の皇太子には怪我はなかった。犯人はその場で逮捕された。名は難波大助^{なんばだいすけ}(一八九九—一九二四)といい、山口県人であった。山口県會議員・難波作之進の四男であることが



断片

河上肇

Kが死んでから約一月目の或日に、彼れの親友であつたSとBとが落ち合つて、彼れの遺稿を扱へた。もし出版の出来さうなものがあつたら、彼等兩人で協議の上、相當の補訂をして印刷に附しようと思つてゐたのだ。遺稿の中には、Kが生前學校で講義をしてゐたノートが大分あつた。それは相當に手を入れたら、出版できさうなものが大部分を占めてゐたが、何れも大部なもので、後に題はされたノートの外には、書籍や机の抽出しに、原稿紙に書いたばらばらの草稿が若干あつた。それは一應稿を廻して、皆途中でやめたものであつた。何か纏まれば直ぐに發表する癖

難波が感化をうけた河上肇の「断片」
(『改造』大正10・4、所収)。



清浦奎吾

判明した。大助は学校秀才の兄たちとはちがつて中学を何度も変え、高等学校の受験にもことごとく失敗したが、大正十一年ようやく早稲田高等学院文科に入学した。けれどもかれは志望校に入学できなかった人間のつねとして、大いにくさり、勉学に精を出さなかった。かれの関心はやがて別なものにむかつていった。

難波は大道事件の公判記事とか、河上肇がロシア革命について叙述した「断片」(『改造』三周年記念)大正10・4、二頁(二八頁)などを讀んだことにより社会主義——ことに直接行動主義——に興味をおぼえた。また亀戸事件や大杉栄殺害事件などの新聞記事をよんで、官憲に対して激しい憤りを覚えるようになっていた。

早稲田ではおそらく感銘をうけるような講義を何一つ聴かなかったと想像されるが、佐野学のマルクスの『共産党宣言』に関する講義だけは、かれの魂に喰い入り、かれの関心⁽¹³⁾をひいてやまなかった。

難波はこの年の二月、早稲田高等学院を退学すると、木賃宿に移り、日雇人夫となり、労働者の仲間入りをした。そしてかれらの辛苦を身をもつて知った。難波は搾取者と非搾取者の存在を知り、肉体労働者とは「人間の家畜⁽¹⁴⁾」であることを知った。

難波によると、マルクスの理論といったものは、微温^{びおん}なものである。難波は理論よりもむしろ実践家をもつて任じた。かれにとっての実践的活動とはテロ行為そのものであり、その対象は天皇または皇太子であった。

難波は十二月中旬、家にあった杖^{つえ}(ステッキ)⁽¹⁴⁾銃を持ちだし、散弾を求めると郷里をあとにした。上京の途中京都で下車すると、友人の医学生

と会ったりした。二十五日の朝、かれは新聞によって、皇太子が帝国議会の開院式に行啓することを知り、その襲撃を決意した。

翌大正十三年（一九二四）十一月十三日——大審院刑事第一法廷において判決が下された。「主文 被告人大助ヲ死刑ニ処ス」。難波は刑法第七十三条にもとずき、このような判決をうけたのであるが、判決が下されたあと、大声で「日本無産労働者、日本共産党万歳！ ロシア社会主義ソビエト共和国万歳！ 共産党インターナショナル万歳！」と三唱した。⁽¹⁵⁾

そして刑の執行は、大方の予想に反して早く、判決二日後の十一月十五日、市ヶ谷刑務所においておこなわれた。

山本内閣は、虎の門事件の責任をとり、十二月末総辞職した。

大正十三年（一九二四）

一月、枢密院議長・清浦奎吾（一八五〇—一九四二、熊本出身の官僚政治家）に組閣の大命が下った。これに対して、政友会・憲政会・革新倶楽部など、三派の有志があつまると、清浦内閣打倒の第二次護憲運動を開始した。

三月、第一次日本共産党は解党を決議したが、再建の部局をのこした。五月、アメリカで排日移民法が通過。六月、清浦内閣は総辞職し、代わって第一次加藤高明内閣が成立した。これは護憲三派の連立内閣であった。

「文化・学問・教育」

安部磯雄ら『社会主義研究』を創刊。『マルクス主義』の創刊。吉野作造らによる「明治文化研究会」が発足。東大セツルメント（貧しい地域に住む住民の生活や文化の向上をはかるための施設）を本所柳橋に開設。

大正十四年（一九二五）

一月、佐野学ら上海において運動方針を作成し、日本共産党の再建を決定。三月、「治安維持法」が衆議院・貴族院で可決された。この法律は明治三十三年（一九〇〇）に公布された「治安警察法」（集会、結社、労働・大衆運動を取りしめるための法律）を補完するために作られたもので、——国体（国家の在り方）の変革、私有財産制の否認を目的とする個人的または社会的活動をおこなう者は処罰の対象とされ、のち無政府主義、共産主義、反政府、反国策的な言動、思想をも抑圧する手段として利用された。終戦の年の十月廃止された。

治安当局の最大の対象は、なんといっても社会運動である。天下一の悪法——治安維持法（第一条〜第七条までである）は、議会の審議を経て、四月天皇の名において公布された。

朕^{ちん}帝國議會ノ協賛ヲ經タル治安維持法ヲ裁可シ（許可する）茲^{こゝ}ニ之ヲ公布セシム

御名御璽（天皇の名と印鑑）

摂政名

治安維持法

第一条 国体ヲ変革スルコトヲ目的トシテ 結社（多数の人間が、共通の目的のために組織する団体）ヲ組織シタル者又ハ 結社ノ役員其ノ他 指導者タル任務ニ従事シタル者ハ 死刑又ハ無期（期限を定めない）若^もハ五年以上ノ懲役（獄に入れ作業を科す）若^もハ禁錮（幽閉）ニ処シ 情（事情）ヲ知リテ 結社ニ加入シタル者又ハ結社ノ目的遂行ノ為ニスル行為ヲ為シタル者ハ 一年以上ノ有期ノ懲役又ハ禁錮ニ処ス

私有財産制度ヲ否認スルコトヲ目的トシテ 結社ヲ組織シタル者、結社ニ加入シタル者又ハ結社ノ目的遂行ノ為ニスル行為ヲ為シタル者ハ 十年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ処ス

前二項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第二条 前条第一項又ハ第二項ノ目的ヲ以テ 其ノ目的タル事項ノ実行ニ関シ 協議ヲ為シタル者ハ 七年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ処ス（以下、省略する）。

（大正十四年四月二十二日
法律第四十六号¹⁶）

四月、高橋是清は政友会総裁を引退し、代わって田中義一が後任総裁となる。五月、普通選挙法（納税額にかかわらず、二十五歳以上の男子に選挙権をあたえる）が成立した。同月、上海の日本紡績工場の争議弾圧に抗議して、労働者や学生らが排日デモをおこない、三ヵ月にわたってゼネストがつづいた。のち闘争の激化にともない、日英米仏の陸戦隊が上陸し、争議を弾圧した（五^ご三^{さん}〇事件^{じゅう}）。

七月、加藤内閣は閣内不統一により総辞職し、八月憲政会単独の第二次内閣を組織した。十二月、農民労働党が結成されたが、即日解散を命じられた。

「文化・学問・教育」

荻田^{みのだむねき}胸喜ら「原理日本社」を結成。のち雑誌『原理日本』を創刊。『無産者新聞』の創刊。細井^{わきざう}和喜蔵著『女工^{あいにし}哀史』の刊行。

大正十五年（一九二六）

一月から五月ごろまでの間に、京都帝国大学など、全国の学生社会科学学連合会（大正13・9・14創立）の学生らは、治安維持法・出版維持法・不敬罪等の科で検挙された。のち岡田良平文相より、全国の高等学校、高等専門学校に通達が出され、学生の『社会科学研究』を厳禁させた。

一月、加藤首相の病死にともない、若槻礼次郎に組閣命令がくだり、ここに第一次若槻内閣が発足した。三月、政友会総裁・田中義一の軍の機密費流用疑惑がおこり、ついで大阪の松島遊廓事件（土地斡旋にからむ贈収賄——前通信大臣・箕浦勝人、政友会の前幹事長・岩崎勲らが起訴拘引され、若槻首相までが取調べを受けた）、朝鮮人のアナキスト朴烈怪写真事件（妻の金子文子と「不逞社」を結成し、雑誌『不逞鮮人』のち『太い鮮人』と改題）を発行。震災後、摂政暗殺を企てた容疑「じつは当局によるでっちあげ」で逮捕され、予審判事が誘導訊問のため、朴と妻を会わせ、二人がよりそったがたを写真に撮ってあたえた）、石田検事変死事件（田中義一の疑惑、松島遊廓事件、朴烈怪写真事件などにかかわりをもつ）などがつづいておこった。

四月、浜松の日本楽器で待遇改善をもとめる大争議がおこり、五月には新潟県木崎町で小作争議が激化し、警官隊と衝突し、二十八名が逮捕された。七月、全日本農民組合同盟が結成された。

十一月、松本治一郎ら水平社幹部は、福岡連隊爆破陰謀容疑で検挙された。これは当局によるデッチあげ事件であった。

十二月、日本共産党が再建され、山県五色温泉で第三回大会をひらいた。

同日二十五日——大正天皇崩御（48歳）。摂政裕仁が践祚^{せんそ}し、「昭和」と改元した。

*

大正時代の概況

陸軍の首脳が、第二次西園寺内閣にたいして二個師団の増設を強硬にもとめているころ、明治天皇の崩御がつたえられ、嘉仁親王（一八七九〜

一九二六）が即位し、「大正」という新しい時代をむかえた。

大正時代は、元老と藩閥（同じ藩の出身者が団結し、他藩の出身者を排斥する集まり）打倒を叫ぶ立憲政治擁護運動をもって開幕した。政友会の尾崎行雄（一八五九～一九五四）や国民党の大養毅（一八五五～一九三二）らは、軍閥や官僚の専制政治を批判し、資本家、民衆らもそれに呼応して、毎日のように大規模なデモをおこない、議會を包囲したりした。

ことに民衆の運動は暴動化し、ついにその憤懣のはけ口を御用新聞社、警察署、交番などの襲撃にむけ、焼き打ちさえ辞さぬ形勢であった。⁽¹⁷⁾やがて世論におされ、第三次桂内閣は総辞職した（大正の政変）。

長州閥の桂太郎（一八四七～一九一三、明治期の陸軍軍人）にかわって組閣したのは、薩摩閥の山本権兵衛^{しんのひょうえ}（一八五二～一九三三、明治・大正期の海軍軍人）である。この内閣は、行政・財政の整理や文官の任用など、諸改革に手をつけたが、翌大正三年一月、海軍部内の収賄事件（「シメンス事件」）がおこったために、三月に総辞職した。

山本内閣を受け継いだのは大隈重信（一八三八～一九二二）であるが、第一次世界大戦が勃発すると、中国大陆に進出する千載一遭の好機とばかり、参戦を決意し、ドイツに宣戦布告をおこなった。

大正三年（一九一四）から同七年（一九一七）ごろまで、日本経済は異常な発展をとげ、好況を呈した。とくにヨーロッパ諸国から日本に軍需品——武器・機械類・化学工業品・メリヤス製品・毛織物・靴・洋服・銅・澱粉⁽¹⁸⁾・豆類などの注文が殺到した。また造船・製鉄・海運業も大いに進展した。

が、世界大戦が終結すると、軍需品の注文は皆無となり、わが国の経済は一転して、戦後恐慌にみまわれた。物価はじわじわと高騰をつづけ、給料生活者の実質賃金はいちじるしく低下していった。米価が高騰しはじめたのは、大正六年（一九一七）中ごろからであり、同年三月、一石^{いっこく}（二斗の十倍）十五円だったものが、六月には二十円になった。⁽¹⁹⁾

米価騰貴の主なる原因は、供給に不足をきたしたことにあった。⁽²⁰⁾また物価が高くなったのは米ばかりではなく、日常生活の消耗品まで高騰した⁽²¹⁾。その結果、米騒動がおこり、労働者・農民・漁民・部落民・兵士・学生・婦人・朝鮮人らも加わって、全国的な運動となって、打毀^{うちこわし}や焼打ちに発展し、武装した在郷軍人や軍隊が出動して鎮圧した。この騒動に参加した民衆は全国で七十万人を超えた。

明治以来、藩閥・官僚政治がつづいたが、やがてそれを打破し、憲政を擁護する運動がはじまった（「大正デモクラシー」）。当時、デモクラシ

「は、人民主権を意味する『民主主義』と區別して、『民本主義』と訳されたが、それを提唱したのは吉野作造（一八七八―一九三三、明治から昭和期の政治学者）であった。

日々高まりゆくデモクラシーの思潮に警鐘を打ちならしたのは、井上哲次郎（一八五五―一九四四、明治・大正期の哲学者）であった。井上によると、多くの人はデモクラシーを『民衆政治』と解しているとしている。この民衆政治を徹底しておこなうとすれば、いきおい共和政体となる。民衆の選挙によって政治をおこなうと、わがまま勝手な気風がおこり、不学無識の徒が共同して国家の主権を有することになる。わが日本は、君主政体と人民のための民本主義とがよく調和している。わが日本人は、デモクラシーの風潮に捲き込まれて、千秋の恨事となるようなことをしでかけてはならぬ、と。

大正五年（一九一六）一月、当時東京帝国大学教授であった吉野作造は、雑誌『中央公論』に「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」と題する長編論文（二段組み、一七頁―一四四頁）を発表し、民本主義の思想について説いた。

吉野はこの論文の中で、『立憲思想の養成』を刻下の急務とし、政治の目的は一般民衆の利福（利益と幸福）にあるとし、政策の決定は民意（人民の意志）によるべきと説いた。そして民本主義的政権運用の究極の目的は、一般大衆の福利にあることを力説し、具体的には政党政治を確立し、普通選挙を実施することを強調した。

また当時、京都帝国大学助教であった河上肇は、大正五年九月から『大阪朝日新聞』に「貧乏物語」（のち単行本となる）を連載し、貧困・貧富の問題を大きな社会問題として考究し、当時の知識人に大きな影響をあたえた。

大正七年（一九一八）十二月、デモクラシー思潮の寵児――民本主義を主張する吉野作造らは、頑迷思想撲滅をスローガンとする「黎明会」を結成し、普通選挙運動の理論的指導部となり、またその指導をうけた赤松克麿、宮崎竜介ら東大学生は「新人会」（社会主義思想運動団体、人類の解放、日本の合理的改造を綱領とする。昭和四年解散）を結成し、普通選挙運動（すべての成人に選挙権、被選挙権をあたえる制度）に取り組んでいった。やがて民衆は、政治運動は国民が結集し、組織をつくらないと勝利できないことを知ると、それぞれじぶんたちの組織づくりに乗りだした。労働者は労働組合、農民は農民組合、学生は学生団体、婦人は婦人団体（新婦人協会など）、部落民は水平社などを結成した。⁽²⁴⁾

大正八年（一九一九）、朝鮮や中国で抗日運動がさかんとなり、それは日本官憲の弾圧にもかかわらず、年を追ってはげしくなっていた。第一次大戦後、世界的に不景気であったが、わが国は年々、その度を増していった。

日本の労働争議は、およそ大正六年（一九一七）ごろから著しくなってきた。大正三年（一九一四）は五十件、同四年は六十四件だったものが、大正六年になると一挙に三九八件⁽²⁵⁾にまで激増した。そして、七年は四一七件、八年は四九七件と、ますます増加の一途をたどった。

その原因は、不況による賃金の引き下げ、大量解雇、工場閉鎖などによる生活難であった。金がなくてはパン一きれすら買えないのである。富の分配の不均衡は、世界の共患であった。

そういった生活苦は、社会主義運動とむすびついて、社会運動を激化させた。大正九年（一九二〇）株式が暴落するや、諸物価はいっせいに値くずれし、農産物価もすべて暴落した。⁽²⁶⁾

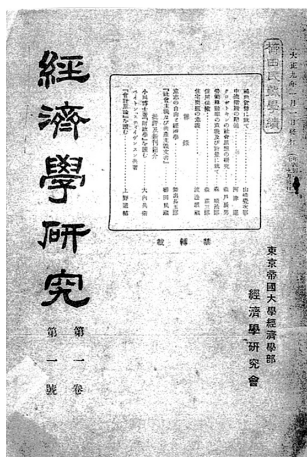
第一次世界大戦後、労働者・農民・学生・婦人・被差別部落民らの「社会運動」は、政府や官僚、資本家に大きな危機感をあたえていた。政府は、既成の諸制度を批判し、それに抵抗するいっさいの反国家的行為——労働運動・社会主義運動・部落解放運動・民族独立運動——にたいして、はげしい弾圧をもってのぞんだ。

ことに大正十四年（一九二五）三月に成立した「普通選挙法」（納税資格は撤廃され、二十五歳以上の男子は選挙権をもった）により、有権者数は三百万からいっきよに千二百万となった。この選挙によって、当然労働者や農民、主義者らが国会に進出してくるものと、考えられた。⁽²⁷⁾

もし革命的な傾向をもつ無産政党が、議会で大きな勢力をもつようになると、国体護持はむずかしくなる危惧さえあったので、政府は普選下の新たな治安対策を計画せざるえなくなった。そこで政府は普選法案に先だって、革命の安全弁の役割をはたす「治安維持法」なるものを議会に提出し、大正十四年四月天皇の名のもとに公布した。それ以後、この法律のせいで、国家（社会）にたいして直接の障害となる、いっさいの主張や行動は圧殺された。

この治安維持法を案出した者はだれであったのか、いまも明らかでない。政府が「普選案」を枢密院（天皇の諮問にこたえることを任務とした合議組織）枢密顧問官のあいだから、普選がじっしされた場合、かならず無産政党（労働党、社会党など）ができる。かれらは国体や社会にたいして累を及ぼすかもしれない。それをどう取り締まるつもりか、と質問された、加藤高明内閣の内相・若槻礼次郎（一八六六―一九四九）は、「相当の法律をもって取り締まる」といったのが、この法律の由来とされている。⁽²⁸⁾

政府による弾圧の魔の手は、一般社会だけにかぎらず象牙の塔（大学）のうちそにも迫っていた。大正九年（一九二〇）一月におこった森戸事件、大正十二年（一九二三）六月におこった社会主義者大検査のさいの早稲田大学恩賜館内の研究室を搜索した事件など、枚挙にいとまがない。



森戸辰男の「クロポトキンの社会思想の研究」が載った『経済学研究』の創刊号（大正9・1）。
〔法政大学・大原社会問題研究所蔵〕



大原社研の研究員時代の森戸辰男。
〔法政大学・大原社会問題研究所蔵〕

これらの事件は、第一次世界大戦後、民本主義の高揚期におこったものであるが、とりわけ森戸辰男の筆禍事件は、世間を震がいさせてあまりあるものであった。

東京帝国大学経済学部機関雑誌『経済学研究』（大正9・1、創刊号）に、森戸辰男助教授が発表した「クロポトキンの社会思想の研究」（クロポトキン「一八四二—一九二一」は、ロシアの革命家、無政府主義者）と題する論文が当局の忌にふれた。たとえば、つぎに引く文章ひとつとっても、アナキズム（国家権力の否定と個人の自由を絶対化する思想）を唱道しており、当局からみれば、これは国体や国憲を無視したものであった。

現代の社会状態の下に於ては、大多数の民衆は『自由なる人格』となることから妨げられて居る。と言ふのは 社会生活に於て最も基礎的な自由が、政治的自由と経済的自由とであるにも拘らず、現代の社会制度の下に於て、大多数の民衆は此等兩種の自由を獲得して居らないから（五八頁）。

政治的自由の実現のためには、国家主義が改廃（廃止すること——引用者）されなければならず、経済的自由の実現のためには 資本主義が改廃されなければならぬ。国家主義の改廃は権力の改廃を意味し、資本主義の改廃は私有財産制度の改廃を意味する。

然るに権力改廃の傾向の帰着する所は、私有財産なき社会即ち共產制社会である（五九頁）。

若し諸君が個人の完全なる自由と その結果として個人の生命を尊重することを望むならば、諸君は必然に、如何なる形態を採るにせよ、人間による人間の支配を排撃（追ひ払おうとして攻撃する——引用者）しなければならなくなり、諸君が長い間に否認し来った無政府主義の原理を容認しなければならなくなるであらう（八二頁）。

内務省警保局は、森戸論文が無政府主義を宣伝するきらいがある点に注目し、その処置に困惑したが、大学当局との交渉のうえ、とりあえず未発売の『経済学研究』を回収することにした。

しかし、ことはそれだけで治まらず、論文内容が「朝憲紊乱」（政府の転覆をはかる）にあたるとして問題にされ、発行人・大内兵衛助教授（二八八八—一九八〇、大正・昭和期の経済学者）とともに起訴された。森戸は禁固二ヵ月、罰金七十円、大内は禁固一ヵ月、罰金二十円（ただし執行猶予一年）の判決をうけ、森戸だけが大量の友人や知人に見送られて下獄した。

大審院による判決理由は、つぎのようなものであった。

（森戸論文は）我國民をして 建国の皇謨（天子のはかりごと——引用者）と光輝ある歴史とを無視し 茲に国憲の変更と国法の廃滅とを企画し 我国体に違背し（そむく） 全然統治の關係を離脱し 放縱自恣（わがまま）の生活を遂行せしめんことを宣伝鼓吹するものにして、止だ学理上 外国の政体を批評論難（非難し攻撃する）したるものに非ざるや 行文（つくった文章）上 寔に明かなり。

森戸の専門とするところは、経済学であり、とくに「社会政策」（労働問題を中心に、社会問題を解決しようとして採る政策）であった。問題のクロポトキンの社会思想の研究は、活字となる前年——大正八年（一九一九）の夏休みに執筆をはじめ、その年の暮れに脱稿し、みずから出版社の有斐閣へ持参したものである。

ところで森戸がこの論文を書いた動機は何んであったのか、またいったいだれがそれを問題とし訴追したのであろうか。

第一の問題に関して、森戸は第二回公判における裁判長の問いにたいして、

——社会政策を学問的に成立せしむるには、一定の明確なる理想の社会を考える必要があること、この論文を執筆することによって、社会の理

142 (27)

安維持法”は有力な武器として、その後の反国家的な批判、運動のすべてを圧殺した。民衆は一時的にせよ、大正デモクラシーの自由の空気を享受しえたが、時代の潮流は漸次ファッショ化へとむかっており、不安な暗い気分が国民の心をおおっていた。

大正時代は、日本の資本主義がいちばん飛躍的に発展したときであった。が、他方、一般大衆のすべての社会運動は抑圧され、人権はいっさい顧慮されず、強権だけが発動される、光のささない暗黒時代であった。

*

大正時代は明治期とは異なり、社会科学に関する文献が多量に生みだされた時期である。大正期にどれほどの量の文献が刊行されたのか、いま『国立国会図書館 蔵書目録 大正期 第2編 社会科学』（国立国会図書館発行、平成11）をみると、この中に収録された社会科学文献（社会学、政治、法律、経済、財政、統計、社会、教育、風俗・習慣、国防・軍事）の総件数は、一万九、二九九件である。さらに同目録によって、目ばしい社会科学文献を仕分（しわけ分類）すると、つぎのようになる。

「社会」の項目の中にくくられている文献（明治40～大正15）……………三五冊。

「社会学」の項目の中にくくられている文献（大正元～大正15、この中には訳書も含まれる）……………一三三冊。

「社会思想・社会主義」の項目の中にくくられている文献（大正元～大正15、この中には訳書も含まれる）……………二七九冊。

「社会政策、社会保障、社会保険」の項目の中にくくられている文献（大正元～大正15）……………七〇冊。

社会科学とは、人間社会の諸現象を研究する科学の総称である。それは社会学をいうに及ばず、政治・経済・法律・歴史・宗教・教育・文化人類学などをも含む分野の意である。が、いまそれらすべてについて論じることが、とうてい不可能であるから、人間の社会生活や社会関係に付随して発生する問題——要するに、社会学と最もかわりが深いと考えられる書物を中心に、適宜文献をえらび、その内容を解説したり、手短に批評することによって、大正という社会の全体像のイメージづくり、さらには大正時代の社会現象を再構築するよすがとしたい。

わたしは、はじめに社会一般、社会思想、社会主義などの諸文献について語り、さいごに本題である、純然たる社会学書にふれるつもりである。

*

大正年間（一九二一～一九二六）に刊行された目ぼしい社会科学文献を一覧表にすると、つぎのようになる。

小倉徳太郎著	『廿世紀の大問題』 雙文館	大正元・10
浮田和民著	『社会と人生』 北文館	大正元・12
樋口龍峽著	『近代思想の解剖』 広文堂書店	大正2・1
下田歌子著	『日本の女性』 実業之日本社	大正2・1
ヘクター・マクファーンソン著 訳者不詳	『近代思想界の変遷』 全『大日本文明協会事務所 『現代思潮十講』 弘道館	大正2・3
桑木厳翼著	『現代の欠陥と教済』 画断社	大正2・6
神木猶之助著	『日本憲政提要』 有斐閣	大正2・9
稲田周之助著	『国史の研究 総説の部』 文会堂書店	大正2・9
黒板勝美著	『分業論』 全『京都法学会	大正2・11
高田保馬著	『生活及社会観』 東京宝文館	大正2・12
湯原元一著	『人間生活史』 弘学館書店	大正3・9
茅原華山著	『革命の心理』 大日本文明協会事務所	大正3・10
ギュスターヴ・ル・ボン著	『家族制度の将来』 東京宝文館	大正3・12
前田長太訳	『現代の政治』 実業之日本社	大正4・5
吉田静致 橋本文壽 共著	『社会と道徳』 弘道館	大正4・11
吉野作造著	『欧米の社会と日本の社会』 日本学術普及会	大正4・12
井上哲次郎著	『日本民権発達史』 政教社	大正5・11
小林照朗著	『不良少年の研究』 日本警察新聞社	大正5・11
植原悦二郎著	『相互扶助論（進化の一要素）』 春陽堂	大正6・9
坂口鎮雄著	『ドン底生活』 文雅堂出版	大正6・10
クロボトキン著	『労働問題十論』 東京宝文館	大正7・1
大杉栄訳		
村島婦之著		
堀江婦一著		

- 呉文炳著 『法制を中
心とする江戸時代の史論』 弘文堂書房
大正7・5
- リギヨール著 『実践哲学 全』 三才社
大正7・8
- 河上肇著 『社会問題管見』 弘文堂書房
大正7・9
- エレンカローナ・ソフィア・ケイ著 『婦人運動』 大日本文明協会事務所
大正7・9
- 原田実訳 『日本に
於ける社会政策の基礎』 実生活社出版部
大正8・2
- 鈴木梅四郎著 『精神運動と社会運動』 警醒社書店
大正8・6
- 賀川豊彦著 『西洋 社会運動者―評伝―』 売文社出版部
大正8・6
- 尾崎士郎共著 『社会問題及社会運動』 岩波書店
大正8・6
- 茂木久平共著 『特殊部落研究』
大正8・7
- 河田嗣郎著 『労働者問題』 岩波書店
大正8・10
- 日本学術普及会 『社会改造の原理』 文志堂
大正8・11
- ルコ・ブレンターノ著 『社会改造思想史』 文化学会
大正8・11
- 森戸辰男訳 『家族制度研究』 弘文堂書房
大正8・11
- ベルドフント・ラッセル著 『マルクス学研究』 公文書院
大正8・12
- 高橋五郎訳 『現代の社会的進歩 全』 文明書院
大正8・12
- 岡悌治著 『国体精華乃発揚』 洛陽堂
大正8・12
- 河田嗣郎著 『社会主義論』 文明書院
大正9・1
- 高畠素之著 『現代社会の諸研究』 岩波書店
大正9・2
- フレデリック・オースチン・オグ著 『社会問題総覧』 公文書院
大正9・2
- 柳田泉・宮沢末男共訳 『下層社会研究』 文雅堂
大正9・3
- 上杉慎吉著 『社会改造の諸問題』 日本評論社出版部
大正9・3
- リチャード・セオドル・イリー著 『社会問題と財政』 帝国地方行政学会
大正9・3
- 訳者不詳 『恐怖・闘争・歓喜』 聚英閣
大正9・4
- 高田保馬著 『国家社会主義の本質と其運用』 日本評論社
大正9・4
- 高畠素之編 『社会問題と財政』 帝国地方行政学会
大正9・3
- 八浜徳三郎著 『社会問題と財政』 帝国地方行政学会
大正9・3
- 佐野袈裟美著 『恐怖・闘争・歓喜』 聚英閣
大正9・4
- 小川郷太郎著 『国家社会主義の本質と其運用』 日本評論社
大正9・4
- 堺利彦著 『国家社会主義の本質と其運用』 日本評論社
大正9・4
- タマス・ヒューズ著 『国家社会主義の本質と其運用』 日本評論社
大正9・4
- 高橋潜淵訳 『国家社会主義の本質と其運用』 日本評論社
大正9・4

原書名不詳 中目尚義訳	『過激派の本領』 大鑑閣	大正 9 ・ 5
アイ・エス・マッケンジー著 納武津訳	『社会哲学原論』 日本評論社出版部	大正 9 ・ 6
モリス・ヒルクイット著 高橋正熊訳	『社会主義大系』 一名 社会主義の理論と実際』 日本評論社出版部	大正 9 ・ 6
小泉信三著	『社会問題研究』 岩波書店	大正 9 ・ 6
ジェイ・ミソン・B・ハリー著 松野健二訳	『無産階級の研究』 佐藤出版部	大正 9 ・ 7
ポール・ルロア・ポーリユー著 宮地武夫訳	『非共産主義』 佐藤出版部	大正 9 ・ 8
フレデリック・シーホー著 宮地武夫訳	『物価と生活問題』 佐藤出版部	大正 9 ・ 9
ジュリアス・エフ・ヘッカー著 波多野鼎訳	『ロシア社会学』 聚英閣	大正 9 ・ 10
窪田文三著	『現代日本と社会問題』 同文館	大正 9 ・ 10
中沢臨川著	『新社会の基礎』 改造社	大正 9 ・ 10
ウィリアム・ティ・グッド著 来原慶助訳	『レーニンの天下―ボルシェヴィズムの正体』 広文館	大正 9 ・ 10
チャールズ・A・エルウッド著 帰一協会訳	『社会問題の改造的解釈』 博文館	大正 9 ・ 10
生田長江共著 本間久雄共著	『思想 社会改造の八大思想家』 東京堂書店	大正 9 ・ 11
笠田愚禿著	『家族と社会との関係』 慶文堂書店	大正 9 ・ 11
吉野作造著	『社会改造運動 新人の使命』 文化生活研究会出版部	大正 9 ・ 11
バートランド・ラッセル著 浜田和民・宮島新二郎共訳	『社会改造の理想と実際』 全 大日本文明協会事務所	大正 9 ・ 12
三浦周行著	『国史上の社会問題』 大銀閣	大正 9 ・ 12
西宮藤朝著	『思想問題大観』 天佑社	大正 9 ・ 12
帆足理一郎著	『文化生活と人間改造』 博文館	大正 10 ・ 1
シー・エチ・クレーン著 納武津訳	『社会と我 人間性と社会秩序』 日本評論社出版部	大正 10 ・ 1
オイゲネ・リヒテル著 荒川賢訳	『社会主義審判』 財閥 法人協調会事務所	大正 10 ・ 2
アントン・メンガー著 森戸辰男訳	『近世社会主義思想史』 我等社	大正 10 ・ 2
杉森孝次郎著	『新社会の原則』 天佑社	大正 10 ・ 2
安部磯雄著	『社会問題概論』 早稲田大学出版部	大正 10 ・ 3

ビエル・ジョゼフ・ブルドン著 新明正道訳 『マルクス思想と現代文化』 佐藤出版株式会社	大正 10・4
土田杏村（解説）	大正 10・5
大谷光端著	大正 10・5
エルツバツヘル著 若山健二訳	大正 10・5
ブレハーノフ著 恒藤 恭訳	大正 10・6
ブーック著	大正 10・6
高橋正熊（解説）	大正 10・7
湯原元一著	大正 10・7
河上肇著	大正 10・7
大杉栄著	大正 10・8
『正義を求める心』アルス	大正 10・8
一条忠衛著	大正 10・8
『男女の性より観たる社会問題』 大同館書店	大正 10・9
新居格著	大正 10・9
『左傾思潮』 文泉堂書店	大正 10・9
トーマス・カーカップ著 町野並樹訳	大正 10・9
ポール・ラファギュ著	大正 10・9
高畠素之訳	大正 10・9
『財産進化論』 大鑑閣	大正 10・9
岡本弥著	大正 10・10
『特殊部落の解放』 警醒社書店	大正 10・10
野村兼太郎著	大正 10・10
『社会生活と理想哲学』 下出書店	大正 10・10
佐野学著	大正 10・11
『社会制度の諸研究』 同人社書店	大正 10・11
ルイス・ブティン著	大正 10・11
『マルクス学説大系』 アルス	大正 10・11
山川均訳	大正 10・11
『社会極致論』 博文館	大正 10・12
白井新一郎著	大正 10・12
『社会問題十二講』 新潮社	大正 10・12
生田長江共著	大正 10・12
本間久雄共著	大正 10・12
『現代社会問題研究 第四卷』 冬夏社	大正 10・12
『国体より見たる 社会問題と現代思想』 文泉社出版部	大正 10・12
青年教育調査部会	大正 10・12
『現代社会問題研究 第廿三卷』 冬夏社	大正 10・12
日本社会学院調査部編	大正 10・12
『社会改造と企業』 下出書店	大正 10・12
上田貞次郎著	大正 10・12
『社会主義社会観』 大鑑閣	大正 11・1
ポール・ラファルグ著	大正 11・1
千葉雄次郎訳	大正 11・1

長谷川如是閑著	『現代社会批判』 弘文堂書房	大正11・1
福田徳三著	『社会政策と階級闘争』 改造社	大正11・1
チャールズ・キングズリー著 高谷実太郎訳	『愛の社会主義』 早稲田大学出版部	大正11・2
モンタグウ・フォード著 村上林蔵訳	『英国農村社会史』 帝国地方行政学会	大正11・2
福田徳三著	『社会運動と労銀制度』 改造社	大正11・6
処女会中央部編	『これからの処女の為に』 全『日比書院	大正11・6
井沢新次郎著	『社会思想と其人々』 稲門堂書店	大正11・6
杉森孝次郎著	『社会人の誕生』 隆文館	大正11・6
平栗要三著	『社会の話』 日本評論社出版部	大正11・6
佐野学著	『日本社会史序論』 同人社書店	大正11・7
ウィリアム・ハレル・マロック著 尾原亮太郎訳	『社会主義批判』 大日本文明協会事務所	大正11・9
上石保教著	『現代思想革命』 同文館	大正11・9
平林初之輔著	『近世社会思潮』 春秋社	大正11・9
福田徳三著	『ボルシェヴィズム研究』 改造社	大正11・9
稲葉君山著	『支那社会史研究』 大鑑閣	大正11・9
ジ・サルウィン・シャピロ著 渡辺幾治郎訳	『現代 欧州』 政治及社会史』 早稲田大学出版部	大正11・10
田所昭明編	『革命ロシア研究十講』 酒井書店	大正11・10
サー・フレデリック・ポロック著 小寺謙吉訳	『政治学史大綱』 政治学普及会	大正11・10
近藤栄蔵著	『自由か独裁か』 全『酒井書店	大正11・10
田中貢著	『社会政策』 明治大学出版部	大正11・10
今井政吉著	『社会講座 露西亞の社会』 日本学術普及会	大正11・10
杉山栄著	『社会苦の研究』 春秋社	大正11・10
藤田浪人・水谷憲風編	『社会問題大観』 共有出版協会	大正11・11
吉田只次著	『貧乏人根絶論』 凡人社	大正11・11

永井享著	『労働問題と労働運動』 叢松堂書店	大正 11・12
河田嗣郎著	『農業社会主義と組合社会主義』 弘文堂書房	大正 12・2
カルル・ヨハン・カウツキー著 三浦壽壯訳	『社会民主党綱領―エルフルト綱領』 大鑑閣	大正 12・2
元田作之進著	『社会病理の研究』 警醒社書店	大正 12・2
マックス・ベーア著 西雅雄訳	『マルクスの生涯と学説』 三徳社書房	大正 12・3
丸山岩吉著	『社会連帯主義』 早稲田泰文社	大正 12・3
鈴木宗忠著	『社会哲学の諸問題』 天地書房	大正 12・3
鈴木賀一著	『不良少年の研究』 大鑑閣	大正 12・4
ウィリアム・ゴドウィン著 岩城忠一訳	『ゴドキン財産論』 大村書店	大正 12・5
高田保馬著	『階級者』 聚英閣	大正 12・5
桑田熊蔵著	『欧州戦後の社会運動』 有斐閣	大正 12・6
佐野学著	『闘争によりて解放へ―新興社会群と新社会秩序』 早稲田泰文社	大正 12・6
松本寛著	『行脚 小作問題の真相』 米本書店	大正 12・7
中沢弁次郎著	『小作制度論』 叡松堂書店	大正 12・7
ツガン・バラノウスキー著 安部浩訳	『近世社会主義』 而立社	大正 12・8
大杉栄・伊藤野枝共著	『乞食の名誉』 聚英閣	大正 12・9
波多野鼎著	『近世社会思想史』 表現社	大正 12・9
永井享著	『社会政策綱領』 叡松堂書店	大正 12・11
河合栄治郎著	『社会思想史研究 第一巻』 岩波書店	大正 12・12
ヘルマン・ゴテル著 堺 利彦訳	『唯物史観解説』 白揚社	大正 13・1
ヨージ・プリハノフ著 河野密・新明正道・松浜兼年共訳	『社会主義及無政府主義論』 吉田書店	大正 13・1
恒藤恭著	『社会と意志』 内外出版株式会社	大正 13・2
元田作之進著	『社会病理の研究』 警醒社書店	大正 12・2
本庄栄治郎著	『日本社会史』 改造社	大正 13・2

G・D・H・コール著 竹内泰訳	『社会理想学』大日本文明協会事務所	大正13・3
フィリップ・ラッパポート著 山川菊栄訳	『社会進化と婦人の地位』吉田書店	大正13・3
高橋貞樹著	『特殊部落史』更生閣	大正13・5
カール・マルクス著 安部浩訳	『巴里コムミュン』文化会出版部	大正13・6
高橋清吾著	『欧州社会制度発達史』早稲田大学出版部	大正13・6
石川三四郎著	『西洋社会運動史』大鑑閣	大正13・7
フリードッヒ・ムックル著 高橋正男訳	『サン・シモンの生涯と其思想大系』モナス	大正13・9
松本悟朗著	『近代社会思想ハ講』新报社	大正13・9
荒畑寒村著	『赤露行』希望閣	大正13・9
町田辰次郎編著	『日本社会変動史観』十日会出版部	大正13・11
ルロワ・ボーリユ著 訳者不詳	『新社会主義の批判』春陽堂	大正13・11
グスター・ラッセンホーファー著 高橋市八訳	『社会学的認識論』新潮社	大正13・12
石森勲夫著	『家庭と警察』警眼社	大正13・12
広江源三郎著	『軍隊社会の研究』聚英閣	大正14・1
クロボトキン著 中山啓訳	『田園・工場・仕事場』新潮社	大正14・3
ウキリヤム・マクドーガル著 宮崎市八訳	『社会心理学概論』アテネ書院	大正14・5
ウキリヤム・マクドーガル著 宮崎末男訳	『聚团心理』大日本文明協会事務所	大正14・5
土田杏村著	『社会哲学原論』内外出版株式会社	大正14・5
森戸辰男著	『思想と闘争』改造社	大正14・5
国史講習会編	『御家騒動の研究』雄山閣	対象14・5
林癸未夫著	『社会と宗教と芸術』文省社	大正14・6
カアル・カウツキイ他著 河西太一郎訳	『農業の社会化』同人社書店	大正14・6
高島素之編	『社会問題辞典』新潮社	大正14・6

戸田海市著	『社会政策論』弘文堂書房	大正14・7
細井和喜蔵著	『女工哀史』改造社	大正14・7
ヴキルブランド著	『カール・マルクス研究』大鑑閣	大正14・7
赤松要訳	『社会学思想の人生的価値』新潮社	大正14・9
アルビオン・ウッドベリ―スモール著	『社会思想史』更生閣	大正14・9
高畠素之訳	『皇室と社会問題』文泉社	大正14・10
波多野鼎著	『これからの女子生活』全『日比書店	大正14・10
渡辺幾治郎編著	『人類学 ^{上より見} たる我が上代の文化(1)』叢文閣	大正14・10
処女会中央部編	『中世の社会思想』白楊社	大正14・10
鳥井龍蔵著	『社会主義思想の史的解説』広文堂書店	大正14・10
マックス・ベーア著	『社会学徒の描く世界』文修堂書店	大正14・10
西雅雄訳	『日本建国神話之研究』全『緑星社	大正14・10
久保田明光著	『インタナショナル発達史』文化学会出版部	大正14・11
円谷弘著	『農村社会問題の超嚮』日本評論社	大正14・12
辻春緒著	『近代ロシア社会史研究』同人社書店	大正14・12
浅野研真著	『社会伝統論』大日本文明協会事務所	大正14・12
太田利一著	『近古の農民戦争』白楊社	大正15・1
嘉治隆一著	『社会の構成Ⅱ並に变革の過程』白楊社	大正15・2
グレアム・ワラス著	『マルクス十二講』新潮社	大正15・3
岡島亀次郎訳	『ルボンの群衆心理説』事業之日本社出版部	大正15・4
マックス・ベーア著	『共産主義批判』批評社	大正15・5
西雅雄訳	『マルクスズム批判―原題『社会主義の前提と社会民主党の任務』	大正15・5
福本和夫著	『日本村落史考』刀江書院	大正15・5
高畠素之著	『社会主義批評』批評社	大正15・6
矢部周著		
(へじっさいは翻訳)		
室伏高信著		
エドワード・ベルンシュタイン著		
金原賢之助訳		
小野武夫著		
室伏高信著		



小倉徳太郎著『20世紀の大問題』。

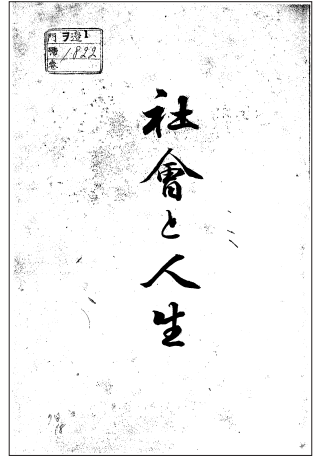
小倉徳太郎の『20世紀の大問題』（大正元・10）は、人種の統一とその改良、社会問題とをもって二十世紀の大問題であると説いた書である。著者は明治大学を卒業後、『静岡公報』の新聞記者を経て、東京市会事務局に職をえた。本書は、神田の青年会館でおこなった演説を骨子として

なった書物である。

内容の概略は——人類の使命 文明社会と歴史 文明の大精神 十九世紀の文明 20世紀文化の潮勢 人種問題と社会問題 世界的思潮と日本——である。

著者によると、日本は世界の一等国だそうである。しかし、表面の偉大な進歩とはうらはらに、大矛盾・大不合理をかかえている。たとえば、政治を例にとると、憲法の定めるところによれば、国務大臣は天皇を輔弼し（たすける）、内外の政治をおこなわねばならぬのに、日本の政治の実

四谷弘著	『現代社会政策』 文精社	大正 15 ・ 6
佐喜真興英著	『女人政治考』 岡書院	大正 15 ・ 6
ハインリッヒ・クノー著	『マルクスの民族、社会並に国家観』 同人社書店	大正 15 ・ 7
東大法制研究会訳	『日本労働運動小史』 進め社	大正 15 ・ 8
浅野研真著	『マルキシズム駁論』 教育研究会	大正 15 ・ 9
鈴木鷲山著	『マルキシズムの崩壊』 新潮社	大正 15 ・ 9
ウラヂミール・シンコヴィッチ著	『小作争議の実際』 農村問題叢書刊行会	大正 15 ・ 9
神永文三訳	『社会に関する新見解』 同人社書店	大正 15 ・ 10
杉山元治郎著	『マルクスの唯物史観』 事業之日本社出版部	大正 15 ・ 10
ロバート・オーエン著	『農業共産制論』 岩波書店	大正 15 ・ 11
大林宗嗣訳	『日本奴隸史』 聚芳閣	大正 15 ・ 11
ベネデット・クロッチェ著	『支那の社会相』 雄山閣	大正 15 ・ 11
井原紇著（じっさいは翻訳）	『実証派犯罪学』 文精社	大正 15 ・ 12
黒正蔵著		
安部弘蔵著		
後藤朝太郎著		
エンリコ・フェリー著		
浅野研真訳		



浮田和民著『社会と人生』。

権を握っているのは、憲法上なんの責任もない元老（年功を積んだ伊藤・山県・黒田・井上・松方・西園寺などを指す）である。

日本は憲法国ではなく、元老国である。議会（衆議院）は、国民の代表機関であり、立法権限をもち、政府を監督して国務進行を計るところなのに、じっさいの政治は多数党の何人かの領袖と、一、二名の政府当局者との私語によって問題を決している。

議会は憲法上の効用をうしない、官僚政治の妥協機関となっている。そして議員の多くは、私利私欲に狂奔（きやうほん）している。

われわれ国民が、元老政治をゆるし、妥協議会を目にするのはなぜか。それは国民が政治思想に乏しく、政治道徳に欠けているからである。立憲政治の根底（基礎）は、一票の投票にある。

国家社会の病弊は、数えればきりが無い。特権階級の専恣（せんし）、労働階級の無智、官尊民卑の風をはじめとし、経世済民（けいせいさいみん）の事業も進んでいない。

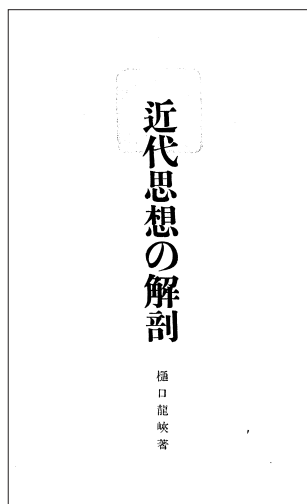
浮田和民の『社会と人生』（大正元・12）は、早稲田大学や女子大学の講義録にのせたもの、あるいは諸雑誌に発表した記事に手をくわえ、版元の希望に応じて本にしたものである。

著者は、明治の御世がおわり、大正の初年を送るにあたり、いささか感慨なき能はず、という。維新以来、四十有五年の歳月が経ったが、「鎖国専制（せんとくせんせい）の遺風いまだ去らず、世論動（よろんどう）もすれば消極に偏して、一時の恬安（あんのん）をこととし、ために世界の大勢、文明の気運（なりゆき）に背馳（はいち）（そむく）することなきに非ず」（二頁）と述べている。

大正期の国民は、活動進取を旨として、立憲政治の実をあげ、わが国をして世界の日本たらしめねばならぬといっている。

内容の概略は——社会篇 第一章 社会及倫理問題 第二章 宗教時論 第三章 宗教問題 人生論 第四章 人生問題 第五章 青年問題 第六章 家庭及婦人問題 第七章 教育問題——である。

浮田が本書を著したのは、国民の修養に資するためであった。いま多くの章の中から、「社会問題」（第一章 社会及倫理問題）所収）を取りあげ、これについての著者の考えを聞いてみよう。



樋口龍峽著『近代思想の解剖』。

経済革命、産業革命の結果、貧富の二階級が生じた。富者は多く勞せずとも富をくわえ、貧者（労働者）は多く勞し、辛うじて命をつながねばならぬ矛盾が生じた。社会主義というのは、このような問題を解釈するために生れた、理論と運動である。

社会主義と無政府主義とは、まったく別物であるから、これを混同するのはよろしくない。社会主義は一種の理想である。それは容易に実現しはしない。欧米においては、資本家と労働者との貧富の差は大きく、労働者は悲惨な状態にあるので、社会主義の理想を抑圧することができない。

近年わが国においても、社会主義を主張するものがある。しかし、わが国はまだ社会主義を内部から発声する時期に達してはいない。従来わが国においてこの主義を唱ふるものは、理論としてこれに賛成し、理想としてこれに心酔し、直ちにわが国において実行しようとしたものである。幸徳一派は、社会主義の真理を没却し、無政府主義となったものである。要するに、わが国の社会主義は、外国思想の翻訳というべきである。

刻下の急務は、社会問題を研究し、社会改善の方法を講じ、有害なる破壊思想を未然にふせぐことである。政府みずからが、積極的に社会改良の方法を考えることである。

樋口龍峽の『近代思想の解剖』（大正2・1）は、四六八頁もある大著である。著者によると、日本は対外関係や財政上の危険のほかに、もっと重大な危機に瀕しているという。それは何かというと、思想問題である。この思想問題は、書物や雑誌を発売禁止にしたり、あるいはサーベルや刑罰の力で解決できるものではない。

最近、若者の思潮に浸潤してきたのは自然主義の傾向であり、その根底をなす近代思想の唯物的、功利的、個人主義的思想が人心を支配するようになってきた。著者はこの大勢を思想上危険とみなした。本書を草した目的は、近代思想の諸傾向および由来を民衆のまえに示し、その長短を批判し、取捨の便を提供するためであった。

内容の概略は——第一章 思潮変遷の概観 第二章 ルーソーと近代思想 第三章 自由平等の思想 第四章 科学的精神の支配 第五章 近代生活と近代思想 第六章 唯物観の傾向 第七章 近代の個人主義 第八章 社会本位の思想 第九章 婦人解放の思想 第十章 自然主義の思潮 第十一章 世紀末の懷疑と悲哀 第十二章 新思想の曙光——である。

わたしがじっさい手にとって見た同書は、故柳田泉（一八九四～一九六九、明治文化研究

家、早大教授）の蔵本であり、氏はこの本を精読したようであり、赤インキの書き込みが随所にみられる。この本はよく売れ、かつよく読まれ、刊行した年暮れには十版に達した。

下田歌子（一八五四～一九三六、明治から昭和期の女子教育者）は、岩村藩士の子に生まれ、のち昭憲皇太后（明治天皇の皇后）から、“歌子”の名を賜わった。華族女学校の創立に参画し、のち同学校長に就任した。また上流社交界や宮中において隠然たる勢力をもったことで知られ、“明治の紫式部”の異名をとった。

その歌人が、若い日本女性が古今の同性について調べる階梯（かいい）（手引）として執筆したのが『日本の女性』（大正2・1）と題する書である。

内容の概略は——第一章 序論 一 何故に日本女性の研究を要するか 二 何を材料として婦人性を知るべきか 第二章 古代文学に現れたる女性 第三章 活動せる上古の婦人 第四章 中古の社会状態 第五章 平安朝時代の婦人

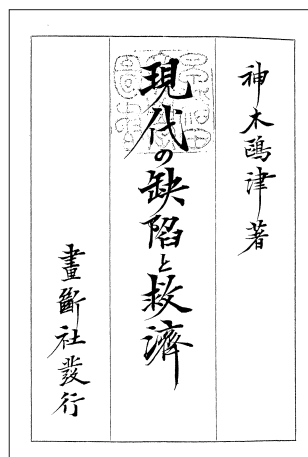
第六章 鎌倉時代の婦人界 第七章 鎌倉時代の婦人 第八章 南北朝足利幕府及び戦国時代の婦人界 第九章 南北朝、足利、戦国時代の婦人 第十章 徳川幕府時代の婦人界 第十一章 徳川幕府時代の婦人 第十二章 結論——である。

同書は、五七六頁もある大著である。なぜ下田は日本の女性についての研究に手をつけたのか。明治維新から日清戦争あたりまで、日本人は二にも西洋の文物に心酔したが、人心の浮動といったものは、一時の雲影にすぎないという。日本の国民性は、少なからず外国の影響を受けて成長発展してきたが、日本人として日本の国民性を調べる必要があると同様、いかなる時代、いつの世にもけっして変化しない、また日本婦人の特質、永久に輝くところの婦人性を、いまこそ研究するときである、と考えたという。

下田が理想としたこれからの日本女性とは、和魂漢洋的にどこまでも進歩し、強固な意志をもち、それが純潔真美の感情と融和した、常識ある婦人であった。しかも義（ぎ）（人道）により道にあたっては、いささかも犠牲や献身をもちとわれない女性であった。

ヘクター・マクファースンの『近代思想界の変遷 全』（大正2・3）の原名は、*A Century of Intellectual Development, 1907*（直訳すれば「知的発展の一世紀」）である。著者は『エディンバラタ刊新聞』の主筆として、また雑誌の寄稿家、評論家として令名が高く、著名な人物であった。同書は、フランス革命よりこんにちに至るまで、世界人類の思想に一大変化をあたえたヨーロッパ思想界の変遷を叙し、これを評論したものという。

わたしが見たものは、高田早苗の寄贈本である。内容の概略は——第一章 出発点——仏蘭西革命 第二章 革命思想家と其事業 第三章 機



神木猶之助（鷗津）著
『現代の欠陥と救済』。

械的宇宙観 第四章 物体の組織 第五章 進化論 第六章 功利学派 第七章 ジョン・ステュアート・ミルの哲学 第八章 哲学者としてのハミルトン及びカーライル 第九章 スペンサーと進化哲学 第十章 獨逸の哲学的運動 以下第二十一章までであるが、省略する——である。

桑木嚴翼の『現代思潮十講』（大正2・6）は、著者によると、大正元年十一月から同二年二月にいたるまで、京都帝国大学の特別講演として語ったものの大要である。現代に勢力ある諸思想の多くは、みな実証主義（科学的哲学）にもとづくものといひ、実証主義から新たな理想主義にむかうべきことを示さんとした、と語っている。

内容の概略は——第一講 序説 第二講 近世思想 第三講 実証主義 第四講 不可知論 第五講 自然主義 第六講 歴史主義 第七講 印象主義 第八講 実用主義^附 相对主義 第九講 実用主義^附 反主知主義 第十講 新实在論^附 新理想主義——である。

神木猶之助（鷗津）の『現代の欠陥と救済』（大正2・9）は、人生・文明・幸福について叙述したもので、本書において述べているところのものは、学生時代から秘かに懷抱せる意見であるという。この本はいわば修養の書のような印象をあたえる。

内容の概略は——第一章 人生と幸福 第二章 文明發達の経路 第三章 人生の幸福と西洋文明（上） 第四章 同（下） 第五章 人生の幸福と東西文明（上） 第六章 同（下） 第七章 文明の弊害救治策 第八章 要結——である。

人間とは何か。人生とは何か。そしてその目的とは何か。著者によると、人はつねに問題を有しているという。世間には問題を有していない者はいない。社会へ巣立つてゆく者には就職問題があり、政治家や官僚には、政治・外交・財政問題があり、家には家庭の問題がある。人間は大小の差こそあれ、つねに何らかの問題に苦しめられている。

著者はいう。「人は問題の中に生れ、問題の中に活^{うま}き、問題の中に死するのである」（第一章 人生と幸福）と。しかし、どんな問題にせよ、時間の経過はこれを解決してくれる。

人間にとって最大の問題は何か。それはこんにちに至るも唯ひとつ残された未解決の問題——人生の目的とは何かということである。人は自己の幸福のために働くのであるが、著者によると、「人生の目的は、人間の幸福を謀^{はか}る」にあるという。もちろん、このことは社会生活を営みながら、多様な幸せを追求する意である。



黑板勝美著

『国史の研究 総説の部』

〔法政大学・大原社会問題研究所蔵〕

稲田周之助の『日本憲政提要』（大正2・9）は、日本の立憲政治の由来を説いたもので、いわば幕末からこんにちに至るまでの政治発達史である。

内容の概略は——第一章 総説 第二章 政体変遷ノ概要 第三章 徳川幕府ノ政治的体形 第四章 幕末政情 第五章 皇政維新 第六章 明治初年ノ政局 第七章 中央政權ノ確立 第八章 憲政準備 上 第九章 同 中 第十章 同 下 第十一章 皇室典範及憲法 第十二章 最初ノ帝國主義ノ情形 第十三章 憲法問題 第十四章 内閣制度 第十五章 貴族院制度 第十六章 政党ノ発達 第十七章 結論——である。

著者によると、政治上の変遷なるものは、政治的勢力の異動にほかならないのである。もともと人間社会には、專制の思潮と民衆主義の思潮とが併存していた。民衆主義は、大事変とか大革命に逢うと、たちまちその本義から離れ、險悪なる変調を來たす。世の政治学者の多くは、民衆政治ほど專横压制なる政治はないという。

立憲政治のかなめ（要點）は、国内のあらゆる勢力、あらゆる思潮、あらゆる利害を総合し、調和し、統一して、その妙用（ふしぎな作用）を尽させることである。

黑板勝美（一八七四—一九四六、明治から昭和期にかけての歴史学者、のち東大教授）の『国史の研究 総説の部』（大正2・11）は、日本史に幾分興味をもち、その研究の道に入ろうとする人に手引をあたえるものとして執筆されたもので、よく読まれ、よく売れた書物である。

『歴史』とは、人間社会が経てきた変遷のあとやその記録の意である。が、ずばり輪切りにして、これこそ歴史だ、と断言できるものではない。歴史はじつに百般のことにわたっており、政治経済や文学や風俗などの事柄だけに限ったことではない。

著者によると、歴史の研究には、入口や道順があるという。三冊か五冊の本をよんだからといって、すぐ一かどの研究ができるものではない。専門的にやるには、その準備に数年を費やさねばならない。歴史の材料を料理しうる手腕や頭脳がなければ、明快な議論を立て、その結論に到達することができない。

まず研究に入るまえに、日本以外の国々の歴史——すくなくとも世界史の大体や東洋諸国の歴史に通じておく必要があるという。学問というものは、単独にそのものを調べて満足すべきものではけっしてない。必ずこれと密接な関係を有する他の諸学科の補助によって、

いろいろな方面から考察せねばならない。極言すれば、すべての学問はみな史学の補助学科であるという。

ここで思い出されるのは、津田左右吉（一八七三―一九六一、大正・昭和期の歴史学者）のことである。津田によると、日本の歴史を知るには、中国と朝鮮の史籍を用いねばならず、とくに上代史の研究には、中国および朝鮮半島の歴史の研究によって知られたこと——文献だけでは知ることのできない学問上の知識——たとえば、日本およびその周辺の民族についての考古学・民俗学・言語学などの研究成果が重要な役割をもっているという。

津田がいう考古学・民俗学・言語学などは、いいかえると、黒板がいう史学の補助学科に他ならない。

高田保馬（やすま）（一八八三―一九七二、社会学者、京都帝国大学経済学部教授）の『分業論 全』（大正2・12）は、大学院在学中の研究成果のひとつである。全一九七頁の小著である。内容の概略は——緒言 第一章 分業の意義 第二章 分業の統合 第三章 分業成立の過程 第四章 分業の原因 第五章 分業の結果 結語——である。ところで著者がいうところの「分業」とは何か。かれは「社会ノ成員ガ異ナル業（しごと）ニ従ヘル状態ヲ分業ト云フ」（六頁）と定義している。「社会ノ成員」とは、合成社会を組み立てているひとりひとりの人間を意味する。分業は、人がその力の欲望に駆られたる結果として生まれたもので、人間社会はただこの力のための競争であるという。

湯原元一の『生活及社会観』（大正3・9）は、著者が講演草稿や諸雑誌に発表した原稿などを整理し、さらに論文を二、三つけ加えて一書としたものである。著者によると、日本における、個人および社会の日常生活を西洋のそれに比べると、いかにも不便、不経済、不合理であり、君臣ともにその弊害に苦しんでいるという。

同書は、日常生活を通して、日本人と欧米人とを比較考察した研究のように思える。前篇、後篇の二部構成になっている。内容の概略は——（前篇） 実際の生活の主張 実際生活と市場との関係 文明の生活と文明の知識 家族主義の国柄に不似合なる社会現象 家族の為に 平凡社会道德論 公民の第一義 首都の対外的関係（外人に対する国民の心得） 都市の修飾（此都市の不体裁を如何にせん） 素人の建築観 娯楽の真意義（公園設備の改善） 共楽生活 看護婦と社会的事業

（後篇） 第一篇 ヨーロッパ 欧羅巴人の日本及び日本国民に対する位置 第一章 日出づる国 第二章 日本に於ける欧羅巴人の暮らし方 第三章 黄禍 第二篇 日本の土地及び人民——である。

著者はこのように多岐にわたって意見を述べているのだが、いくつか事例を挙げてみよう。物質的生活について、西洋人と日本人とを比較して

茅原華山著

人間生活史

東京 弘學館發行

茅原華山著『人間生活史』。

みると、西洋人の生活には、生活の最少限度というもの判然と定まっている。たとえば、衣服なら一年に何着、住居も家族何人なら何程の家賃の家、食物なら、すくなくとも朝はコーヒート牛乳、昼と晩には、肉に野菜を食べねばならない。

もし食物をつめて、肉と野菜の代りに、鰯やジャガイモを用いるとすれば、これは貧民の生活であって、一般国民の生活とはみとめられない。この点は日本とは事情を異にしている。日本人の生活には、貧民生活と否との間に、一見して明瞭なる区別はない。金があればぜいたくな暮らしをし、金がなければどんな質素な生活もできる。たとえば飯が食べられぬばあい、かゆをすする。かゆもすすれなければ、雑炊で間にあわせるといったぐあいに、いかなる程度にまでも生計を引き上げてゆくことができる。

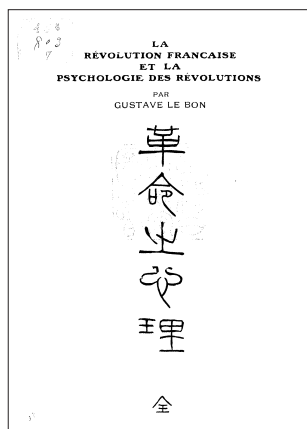
そしてたとえ生活水準を引き上げても、世の中から輕蔑されることはない。日本人は肉食中心の西洋人とはちがって労働においても、戦闘に従事しても、粗食に堪えられるのである。

著者がここで述べている意見は、いわゆる「貧困線」についての、日本人と西洋人の根本思想のちがいであろう。日本の国民性として、よくいわれるのは「集団志向」ということである。が、著者は日本人の「家族主義」（組織における主従関係を、家長への奉仕の関係とみなす考え方）にふれ、つぎのように述べている。

——日本人はけっして個人的に独立独行することはなく、かならず家族といっしょに事をする。かれらは家族の一人であり、またそのうしろには最も大きな家族（国家）が控えている。

西洋人は、人間として、すなわち個人として立つて行くことが、生活上の根本要件になっている。すなわち「個人主義」が発達している。が、日本人は個人主義ということを知らないし、意見を述べる場合も、外部の圧迫に反抗してまでも、それを貫くようなことをしない。ひとりひとりの日本人は、ある家族、ある氏族、ある党派、ある団体の一員であり、個人として独立していないのである。

日本人はむかしから家族や氏族の関係を重んじるから、貴賤上下、主従のあいだに大きなへだたりはない。何ごととも家族的关系をもって律してゆこうとする。実業界においても、なるべく親族同志、仲間同志でなかよくやってゆこうとする。西洋では企業における主従関係は、単なる雇用関係にすぎないのである。



ル・ボン著『革命の心理』。

茅原華山（一八七〇～一九五二、明治から昭和期の評論家、『東北日報』『山形自由新聞』『万朝報』などの記者をつとめた）の『人間生活史』（大正3・10）は、五三五頁もある大著である。著者はいう。人間の生活は絶間のない流転と不断の持続をつづけて来た、と。著者は考えた——人間とはなにか。人間相互の関係とは。人間をいなく自然とはなにか。人間対自然の関係とは。いろいろ考えた結果、得た答は、“一個の謎”であった。

著者は、その謎の意義を歴史的に解明したいとおもい、できあがったのがこの一巻という。そこに描かれているのは、人間苦の告白、人間観の表現という。

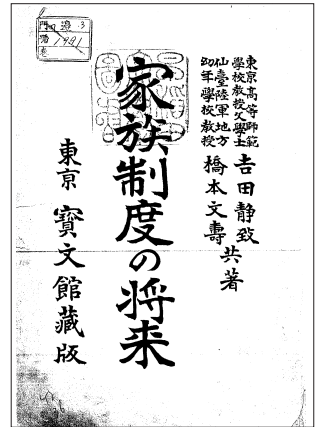
内容の概略は——序論 第一章 人間生活史の意義及び価値 第二章 人間生活の二分派 本論 北道（方）生活論 第一章 北道の自然及び人間 第二章 民族大移動以前 第三章 民族大移動 第四章 民族大移動後 南道（方）生活論 第一章 南道生活 第三章 西部南道附論 第四章 中部南道論 第五章 東部南道論 結論 第一章 南北両道の合流 第三章 南北両道の合致 附録 新第三帝国論——である。

著者は同書の執筆にあたって、欧米の十数名の史家の著述を参考にし、自由な思索と個性ある批判をおこなったと語り、本書の生命はわたしの独創にある、といっている。が、立論の多くは外国の書物に依拠しているような印象をうける。由来、大部な書、というものの大半は、他人が書いたものからの借用なり、引用から成っているのである。

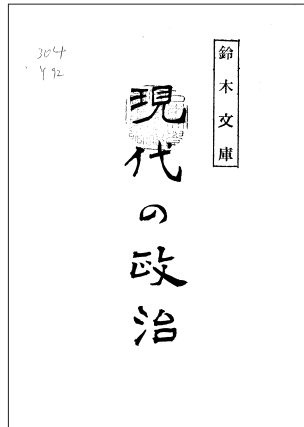
前田長太（越嶺）訳『革命の心理』（大正3・12）は、社会心理学者ギュスターヴ・ル・ボンの『フランス革命及び革命の心理』（*La Révolution Française et la Psychologie des Révolutions*, 1913）を反訳したものである。

著者によれば、フランス革命はじつにふしぎな偶然に支配せられた、幾多の渾沌なる事績とみなすことができるという。フランスにおける従来の歴史的解釈は、理論に偏したもののだが、歴史は法則性や道理（すじみち）に反対して展開することもあるから、必ずしもそれらを以ってして到底説明できるものではないという。

著者はフランス革命の研究に際して、心理学を研究に応用し、心理的解釈により新しい結論に達した。——革命運動における民衆の勢力は、微々たるものであったこと。議員の個人的意志と集合的意志との絶対的矛盾や、革命の指導者をみちびいた神秘的要素や、かれらが道理の支配をうけた



吉田・橋本著『家族制度の将来』。
〔早稲田大学中央図書館蔵〕



吉野作造著『現代の政治』。
〔日本大学文理学部附属図書館蔵〕

ことが、いかに少なかった等を論証した。

内容の概略は——緒論 歴史の再査 第一篇 革命運動の心理的要素 第二篇 仏蘭西革命 第三篇 現代革命主義の発展 附録 仏蘭西革命の主要人物略伝——である。

吉田静致と橋本文壽との共著『家族制度の将来』（大正4・5）は、将来の理想的な家族制度のあり方を研究したものである。吉田は東京師範学校教授、橋本は仙台陸軍地方幼年学校教授である。「はしがき」によると、わが国の家族制度は、日本の国家組織、我が国体と緊密な関係があるといい、その家族制度の変化する与否とは、国民思想や国体にも関係するので、国民の教育にとっても重大な問題であるという。

そして日本国民は、尊卑・貴賤のべつなく、みなこれを研究して、一つの見識をもつべきであるという。家族制度は、個人が家族生活をする間に生じる儀式であり、家族の活動と大きな関係がある。

内容の概略は——緒論 第一篇 総論 第一章 家の意義 第二章 家族の意義及び要素 第三章 家族の種類 第四章 家長権 第五章 家族制度の意義 第二篇 家族制度の変遷 第一

章 西洋に於ける家族制度の変遷 第二章 支那に於ける家族制度の変遷 第三章 日本に於ける家族制度の変遷（明治維新以前） 第四章 明治維新後の家族制度

第三篇 新家族制度論 第一章 家族制度の諸関係 第二章 新家族制度観 第三章 我が国家家族制度破壊の原因 第四章 家族制度の長所・短所及び存続すべき理由 第五章 新家族制度 総収結——である。

吉野作造の『現代の政治』（大正4・11）は、三五九頁もある大部な書であるが、談話を記者が筆写して成ったものである。本書は「前篇」と「後篇」の二部構成となっている。内容の概略は——前篇 海の内 民衆的示威運動を論ず 山本内閣の倒壊と大隈内閣の成立 現下の政局と憲政の将来 議員選挙の道德的意義 立憲の本義より観たる今次の政争 婦人の政治運動 議会の言論 大正政界の新傾向 日本に政党政治が行は

れ得るか

後篇 海の外^{そと}

対支外交の批判 支那帝政論 日米問題 羅馬^{ローマ}法皇の更替^{こうたい}——である。

日本において、民衆の『示威運動（デモ）』はいつごろからはじまったのであろうか。

吉野によれば、明治三十八年（一九〇五）九月——ポーツマス条約に反対して、民衆が日比谷で大集会を催したのが初まりだろうという（日比谷焼打ち事件）。もっとも一部の労働者が、上野公園や芝公園に集まったことはあったが、のちに何んら影響を残さなかった。

民衆が政治上において、一つの勢力として動くという傾向が、流行したはじめは明治三十八年九月からである。このような示威運動がおこったのは、民衆の自覚の結果である。が、世の中には民衆の勢力が伸張するのをよろこばない連中がいる。

そこから社会主義的な危険思想のまん延やフランス革命当時の暴民の騒擾などを連想し、ひじょうにこれを恐れ、忌むのである。元老や官僚らは、御上^{おかみ}にたいしては反抗せぬ、封建の精神に毒されていたはずだから、なおさらのことと思われる。

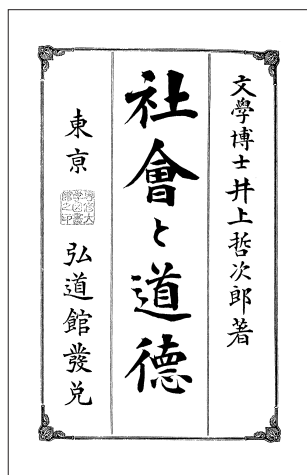
吉野は、「大正と改元してから、急に政界に新しい傾向が起ったとも思へない」（「大正政界の新傾向」といい、元老はこんにちでもなかなか勢力はあるという。けれどその勢力は、もはや政府を組織する積極的なものでないと述べている。

井上哲次郎の『社会と道徳』（大正4・12）は、ここ四、五年の間に書きためた社会と道徳に関係ある論文をまとめ、一書としたものである。同書は九六頁もある大著である。著者によると、日本は明治維新以来、鋭意西洋の学術や技術の輸入につとめ、従来の陋習^{ろうしゅう}（悪いならわし）

を打破し、新文明の開拓を企図し、社会の各方面にさまざまな改造刷新を加えてきた。

また世界各国は、進歩の途につき、その相互の關係は変化移動の過程にある。わが日本は、明治年間において国家を強力にすることに努力し、幾多の悪戦苦闘をへて、ついに一等国になった。しかし、日本はその地位に甘んじるべきではない。世界の文明に何か貢献し、その趨勢^{すうせき}を支配し、かつ世界各国の運命を左右する地位に立たなければならない。これこそ今後の国民的理想であるが、国民発展の基礎は、国民道徳の振興にあるという。

内容の概略は——第一 日本文明の将来 第二 日本文明の過去及び将来 第三 日本文



井上哲次郎著『社会と道徳』。
〔専修大学附属図書館蔵〕

明研究の必要 第四 日本民族の特性 第五 神道と国体 第六 学者の観たる現代社会 第七 文明の統一とは何ぞや 第八 国民の自覚と理性の指導 第九 国体と政体との関係 第十 国家の大変に対する感想 以下、第四七まであるが——省略する——である。

著者は大正の社会状態をつぎのように分析している。——いまでは維新以前に存在した、士農工商といった階級は、ことごとく消滅してしまった。いまでは商工業が社会の最下等に位しているというようなことはない。が、いまでも華族・士族・平民といった階級の観念は残っている。しかし、社交上からいえば、これはだんだん無意に帰しつつある。

さらに井上は、当時の社会組織を九つに分類している。

- 一 貴族官吏の社会……………重要な地位を占めているのは、華族であり、官吏の中にも貴族がいるためにこれを一緒にした。
 - 二 軍人社会……………国防のために、戦闘を目的として成り立っている。
 - 三 政治社会……………政党を組織している人々、またそれに関係している人々。
 - 四 學術教育社会……………専門の學術研究者、初等・中等教員。
 - 五 美術文芸の社会……………芸術家や文学者。
 - 六 宗教社会……………宗教に身をゆだねている人々。
 - 七 商業社会……………
 - 八 工業社会……………
 - 九 農業社会……………
- } 実業社会を組織している。

『労働者社会』を、一部類としなかったのは、それぞれの社会に労働者のないところはないからである、としている。

このような分類は、厳密なものではないが、これによって大正社会の構成がわかるという。著者の井上は、一貫して天皇制国家観に必酔し、反国体的なものを排撃したナショナリストであった。

かれによると、いま述べた九つの社会の各部類を統一してゆくものがあれば、それは何かというと、『皇室（皇室）であるという。日本の長い歴史を貫いてきたものは帝室であり、「これを家屋に喩ふれば、真に大黒柱の如く、此日本国家を永久に統率して行く所の根本的努力でありま

す」といい、国体というものは、つまるところ、この百二十二代を重ねて、ますます隆盛をきわめてゆく、皇位を基礎としてしていると述べている（『学者の観たる現代社会』一二二頁）。

『欧米の社会と日本の社会』（大正5・11）は、東京女子高等師範学校教授・小林照朗が彼^{ひが}の社会の長短を比較、考察したものである。

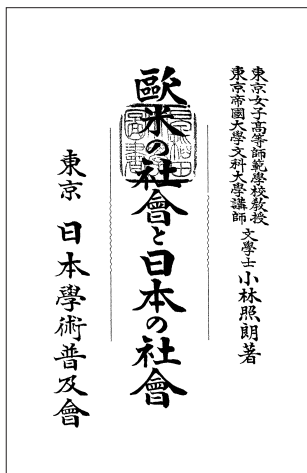
著者によると、日本社会は、西洋社会を観察したあとにこそ、その特質たる所以もよくわかるという。内容の概略は——序 第一章 東西文明の比較 第二章 社会の地理的研究と其^{その}歴史的研究 第三章 日本民族の生成及び発達 第四章 人口論の上より見たる欧米の社会と日本 第五章 欧米の社会雑観 第六章 欧米の国民性と日本民族の性情 第七章 欧米の婦人と日本の婦人 第八章 欧米に於ける二種の社会組織 第九章 欧米社会と日本社会の異同 第十章 近世社会の三大傾向 第十一章 欧米民族、印度^{インド}民族、支那民族の信仰と日本民族の信仰 第十二章 日本社会の将来——である。

人間社会を研究する方法は、いろいろあるが、ひとつは民族の性情（性質や心情）を究めるやり方である。ライプチヒ大学のヴィント教授が『民族心理学』という著述を著して、この方面の先^{せん}蹤^{しよう}になっている。個人の心理を研究するものが心理学であるとすれば、“団体の心理”（個人のあつまりの心理）を研究するのが、社会学の一分野に属する“民族心理学”（民族社会学）であるという。

人間の性情は、遺伝（祖先および両親より受けた精神的、肉体的感化）・教育・境遇の影響をうけて変化し、それが積りあつまってきたものが“民族性情”である。そして国民性とか民族性といったものは、“社会の潮流”とか“社会の意識”を言い換えたものである。けれど国民性というものを、ひとまとめに述べることはむずかしいという。

著者の観るところ、イギリスの国民性はきわめて保守的である。しかし、ひじょうに進歩的なところもある。ドイツは官僚組織の社会である。ドイツ人は貯蓄心が旺盛であり、労働をいとわず、節約勤勉の国民である。ところで日本の国民性とは何か。それはつぎのように要約される。

——日本人は善良にして鋭敏、勤勉である。傲慢にして復^{しゅう}讐^{しゅう}の念が強い。礼儀を重んじる。欠点として、体質から来るものと考えられるが、“根気が弱い”ことである。また、日本人は西洋人に比べて、愛嬌がなく、表情に乏しい。怒っているのか、喜んでいるのか



小林照朗著

『欧米の社会と日本の社会』。
〔早稲田大学中央図書館蔵〕

よくわからないときがある。表情が乏しいと西洋人から嫌われ、陰うつな国民であるとの印象をあたえかねない。

植原悦二郎（一八七七～一九六二、大正・昭和期の政党政治家、ワシントン州立大学、ロンドン大学に学ぶ。のち明治大学教授、吉田内閣の内相）の『日本民権発達史』（大正5・11）は、六五三頁もある大著である。表題から察せられるように、これは日本の立憲政体建設の起源とその発達について叙したものである。

同書の「序」にいう。——およそ一個人の生活状態を支配するものは、その人の生活するところの社会制度である。そしていったん社会制度なるものが造られると、一個人はこれに支配されることが多い。

およそ国家においては、“政治組織”ほど重要なものはないという。各人の生活状態がそれにより定まるからである。古来、多くの賢者が、いかなる“政体”あるいは“政治組織”が国家にもっとも適応するか思索をこらした。ギリシャのプラトンは、才能によって区画する厳密なる階級制度を基礎とする“貴族政治”を最前の政治組織とした。

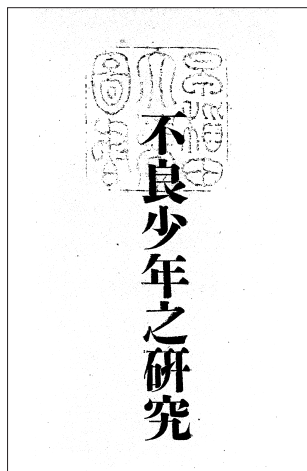
アリストテレスは、賢者による貴族政治を理想とした。キケロは、独裁政治や専制政治に反対し、“民衆の声”を神の声と考え、“群衆政治”を礼賛した。

著者によると、日本に立憲政体または民権思想がおこったのは、日本国民が欧米諸国の圧迫からのがれ、かれらと平等なる地位を保ち、独立を保ちたいとの欲求にもとづくものであった。

明治二十三年（一八九〇）議会が開催されてから、特権階級者はつねにその地位と権勢の継続につとめ、一方国民はその自由と権利の範囲を広げようとしたために、両者の軋轢は絶えることはない。

とりわけ立憲政体建設のために、数多の志士、論客、憂国の士は、家産を傾け、身を滅し、家をうしない、妻子眷族（みうち）を路頭に迷はし、あるいは獄舎に呻吟し、あるいは鮮血を流している。

内容の概略は——第一章 明治維新の政変 第二章 明治新政府 第三章 民権運動 第四章 政党の勃興 第五章 政府と政党 第六章 政府高圧政策の反動 第七章 藩閥政府の全盛期 第八章 憲法の制定 第九章 議会開設前後 第十章 政府及政党の推移 第十一章 藩閥政治家と政党の接近 第十二章 憲政史上の革命的政変 第十三章 藩閥政府の再興 第十四章 伊藤博文の政党組織と其失敗 第十五章 妥協政治の時代 第十六章 桂、西内閣時代 第十七章 桂、西妥協政治の破綻 附録——である。



阪口鎮雄著『不良少年之研究』。
〔早稲田大学中央図書館蔵〕

坂口鎮雄の『不良少年の研究』（大正6・9、非売品）は、表題タイトルといい、中味といい、まことにユニークな書である。著者の坂口は、警察機関に職を奉ずるものであるが、明治三十六年東京の学校に入るため、笈きゅうを負うて上京したとき、異様の感をもって迎えたものが多々あった、と「自序」の中でのべている。

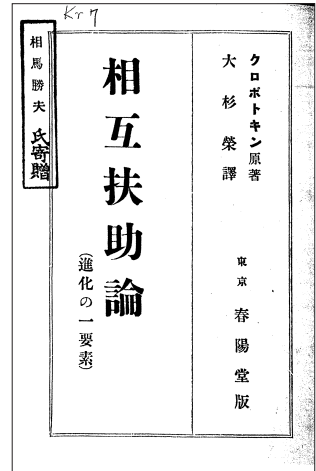
そのうち一つは、無頼の書生（学生）が横行していたことである。学友の中にも、その厄やぐに遭うものがおり、著者はそのときから、心ひそかにこれらの専横をくだき、これを撲滅する決心をしたという。

“不良”とは、状態や品質や品行がよくなかったりする意であるが、“不良少年”にたいする見解には、一定の標準がなく、いろいろな説がある。著者は不良少年を説明するとき、それを二つに分けている。一つの分け方は、狭義に解したときで、十四歳未満の犯罪者をそのように呼び、広義に解したときは、独立自営することのできない青少年で、刑法上の罪を犯したものの、人がみて芳かんばしからぬ行為をするものを不良少年と呼んでいる。

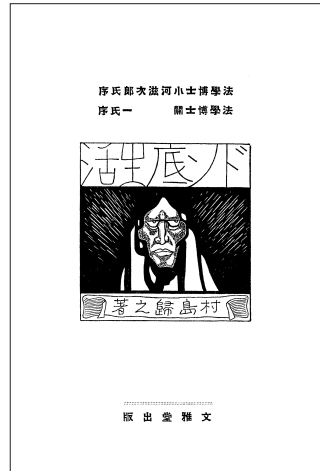
具体的には何をもって“不良”と呼ぶのか。その決め手は、行為の程度いかんによる。著者は不良行為とみなされるものを四十五項目あげているが、そのうちの大要を示すとつぎのようになる。

——けんか口論を好み、粗暴の行為あるもの。女子を追いかけて、その袂たもとに、名刺とか手紙（恋文）を投入するもの。面識なき女性にことばをかけ、口説いたり、同行を求めたり、なかったりするもの。男女交際の仲介をなし、謝礼として金銭を要求するもの。知人や父母兄弟の物品を搬出して、典物てんぶつ（しちぐさ）とするもの。

過激なる言論をなし、あるいは危険なる思想をいだくもの。学校を休み、仲間と遊行したり、集まったりするもの。無断で家出をしたり、ところどころに宿泊するもの。遊廓、酒店、待合などに入りするもの。賭ごとをなすもの。「……組」「……隊」「……会」といった意義なき団体を組織したり、それに加入するもの。つねに短刀、ピストル、仕込杖、ナイフなどを所持しているもの。過激、強迫、脅喝の文章を他人に送ったり、または掲示したりするもの。刑法上の罪にあたる行為をなすもの。



クロボトキン著『相互扶助論』。



村島帰之著『ドン底生活』。

そして不良少年が発生する原因であるが、著者はそれを二つに大別し、第一は因襲的性行、第二は文明の進歩によっておこったものとしている。

「感化法」が実施されて以来、保護事業として、各府県に「感化院」（非行少年や少女を収容して、感化善導をはかる施設、いまは救護院という）が設けてある。保護事業としては、「東京市立職業紹介所」や原胤昭の「出獄人保護所」や、養育院の分院である「井之頭学校」「小笠原修斉学園」「家庭学校」などがあるが、いずれも規模が小さく、希望者の多くを収容できないという。

問題は、日本の社会では、感化院なるものを誤解し、それをあたかも「監獄」の別名のように考えていることである。しかもこの施設の意義が国民に徹底していないという。世間では子供を感化院に入れることをひじょうに不名誉なことと考え、子供の罪悪感を知っていても放任するのである。こういった施設に入るものは、中流以上の家庭の子供は少なく、ものごいの子供、他府県から流浪してきた少年が多いという。

本書は二十一章から成っているが、いま内容の概略をしめすと、——第一章 不良少年に就いての見解 第二章 不良少年の意義 第三章 狭義の不良少年と広義の不良少年 第四章 不良少年発生の原因 第五章 児童期に於ける不良少年の素因を作らしむべき行為、以下省略する——などである。

大杉栄訳『相互扶助論（進化の一要素）』（大正6・10）は、クロボトキンの著述を反訳したものであり、自然界における動物間の互助的傾向から、近代社会における人間の相互扶助について語られている。自然界には、相互闘争の法則以外に相互扶助の法則があるという。

内容の概略は——序論 第一章 動物の相互扶助 第二章 動物の相互扶助（続） 第三章 蒙昧人の相互扶助 第四章 野蛮人の相互扶助 第五章 中世都市の相互扶助 第六章 中世都市の相互扶助（続） 第七章 近代社会の相互扶助 第八章 近代社会の相互扶助（続） 結論——である。

『ドン底生活』（大正7・1）の著者・村島帰之は、早稲田の学生るとき、社会政策を研究し、卒業後、大阪毎日新聞社に入社し、おもに労働者

問題を担当した。本書は、大正六年二月二十日より一ヵ月にわたって『大阪毎日新聞』に連載した記事ならびにその後、二、三の雑誌に発表した文章が母体になっている。

学理的方面から貧民問題に迫ったものに、河上肇の「貧乏物語」（大正五年『大阪毎日新聞』に連載）があるが、著者は理論をさけて、あるがままの貧民を紹介することにしたという。新聞に「ドン底生活」の連載をはじめて以来、著者の村島は友人から「どん底」とあだ名で呼ばれるようになった。

内容の概略は——大阪の貧民窟 東京の貧民窟 神戸の貧民窟 貧民窟の住民 貧家の経済 貧民の衣食住 貧民の病氣 貧民の性情 貧民の宗教 貧民の教育 貧民の娯楽 浮浪労働者 衛生人夫 貧の原因 貧乏退治策 倫落の女 貧民腰弁生活 紡績女工の生活——である。

大阪は天下の工業中心地であるという。

大正二年（一九一三）の調べによると、九七七六の工場があり、そこに六万五千名の職工、一万の徒弟がはたらいていた。貧民窟は、木津・今宮界限といい、大阪の貧民は約十四万人である。大阪よりもさらに細眠（さいみん）（貧民）が多いのは東京であり、その数は十九万五千人である。東京でもっとも貧民が密集していたのは、

下谷万年町……………万年町の一丁目から二丁目にいたる、戸数約千。人口およそ四千名。住民のおもなる稼業は、人足・車夫・くずひろいなど。
四谷鮫河橋……………谷町一丁目から二丁目、元鮫河橋、鮫河橋南町の四ヶ町をふくむ、戸数約千五百。人口およそ六千名。大道芸人の類が多く住む。
芝新網……………戸数約五百。人口およそ三千名。ほとんどが特殊民であり、大道芸人（ちよぼくれ）「卑俗な文句を踊りながら歌う」、かっぱれ「俗謡に合わせて踊るおどり」、辻三味線らが住むところ。

である。

この三つを三大貧民窟といい、これ以外に、東京十五区のうちでいちばん細民が多かったのは、数年前の調査では、

浅草区……………七万人



キリスト教社会運動家 賀川豊彦。
〔法政大学・大原社会問題研究所蔵〕

下谷区……………三万六千人
本所区……………三万五千人
深川区……………三万人

の計十九万人であった。本所とか深川界わいは、旧幕のころから武士階級のものはいま住まわず、職人・人足・日雇いといった下層労働者の本場であった。

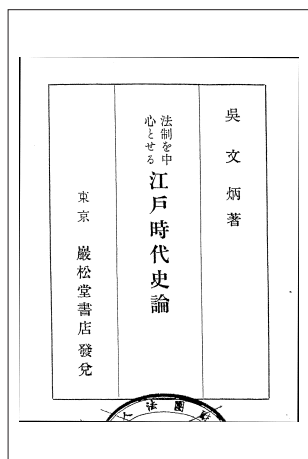
著者はある日のこと、貧民伝道家で有名な賀川豊彦（一八八八―一九六〇、大正・昭和期の伝道師、キリスト教社会運動家、神戸神学校、プリンストン大学に学ぶ。労働組合運動、農民運動を指導）に案内されて、神戸の貧民窟を訪れた。賀川は実行的篤志家である。みずから盗人・博徒・娼妓・不良少年などが群がる中に住み、終日かれらの友人となり、ときに医者・葬儀屋・貧民の救済人ともなって伝道をおこなっていた。

村島が案内されたのは、新生田川の橋を東にわたり、前には海を、背後に再度山を負う新川部落の一画であった。そこに平家建ての長屋が縦横に立ちならんでいた。賀川はいった。「これらは全部、特殊部落です。はじめからこんな大部落があった訳ではないのです。永年のあいだに類をもって集ってしまったのです」（七三頁）。

堀江帰一（一八七六―一九二七、明治・大正期の経済学者。慶応義塾に学ぶ。『時事新報』記者をへて、同塾教員となる）の『労働問題十論』（大正七・一）は、著者が明治四十三年（一九一〇）休暇をえて一年間外国を見学したときの成果といえるものである。堀江はとくに八ヵ月にわたるイギリス滞在中、当時この国で物議をかもしていた「労働問題」の研究に力をつくしたという。

著者はイギリスにおいて、救貧制度や救貧法に関する文書を閲読したり、二、三の都市の救貧院を訪問したり、さらにロンドンに設けられた労働取引所を視察し、職工組合連合会本部に出入りして、この国の労働問題を研究した、といっている。そして帰国後、労働問題に関する論文を逐次発表してゆくのだが、そのうちから十篇えらび、各論に脈らくをつけて刊行したのが、本書である。

著者によると、イギリスの労働者は、みずから団結し、自助の方針（他人の助けをあてにしない）を重くみる。一方、政府は自治的能力のない労働者にたいしては、保護をあたえ、自治と干渉をたのみとし、万全の効果をあげているという。



吳文炳著『法制を中 心とせる江戸時代史論』。
〔法政大学・大原社会問題研究所蔵〕

内容の概略は——第一論 英国救貧制度 第二論 失業と労働取引所 第三論 職工組合の職分を論じて英国職工組合の法制的地位に及ぶ 第四論 賃金国定制度 第五論 同盟罷業問題 第六論 労働不安とは何ぞや 第七論 職工組合の組織 第八論 社会保険 第九論 豪州の労働立法 第十論 欧州戦争と英国労働問題——である。

吳文炳の『法制を中 心とせる江戸時代の史論』（大正7・5）は、書名のしめすとおり、法制を中心として見た、江戸時代の史的研究である。

内容の概略は——概論 一 二 三 社会組織 一 階級制度の起源と其性質 二 旗本与力同心仲間 三 浪人問題 四 商人生活 五 工 人生活 六 農民生活 一般世態論 新家族制度の発達（相続問題） 幕府の経済政策 幕府の貨幣制度 水陸の交通 外国貿易 都市の発展 都市村落の特殊機関 座に関する研究 社会問題 一 奴隷（雇人）問題附無職業者 二 私法的規定 江戸幕府の刑事政策 此時代の学芸・芸 術・宗教——である。

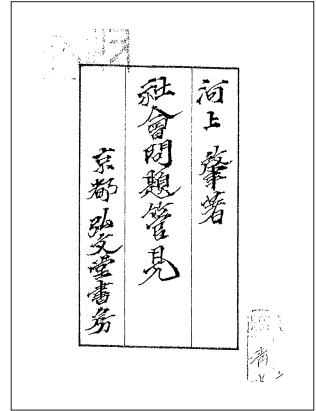
著者によれば、大正という時代は、日本史的開展（てんかい）のうえから見て、空前の時代であるという。江戸時代の実生活というものは、し だいにわれわれの理解から遠ざかり、空想化、美化せられている。江戸時代とは、閥族（ぼつぞく）（閥をつくっている一族）の黄金時代にすぎなかった。

天下を統一し、江戸時代の開祖となった家康は、国家統治の実効をあげるために考えたことは、法の編成であった。そのために頼朝以来の武家 の法令をできるだけ集め、武家法制の完成につとめた。家康は諸法に通じた細川幽斎（一五三四～一六一〇）、武将、歌学や有職故実（ゆうしやくじつ）にすぐれてい た）を発見した。

細川家は代々足利將軍家の管領（かんれい）（執事）として、旧規を蔵していたうえ、故実に精通していた。

家康は日本古来の法律書をほとんど網羅し、立法の参考としたが、家康の法律は、「武家 諸法度十三ヶ条」と「諸公家法度」を除くと、法典の形式を具備したものではなかったとい う。

幕府は“雇人”（労働者）にたいして厳重なる規定をたびたび出し、取りしまった。江戸 が繁栄するにともない、土農工商以外に労働者階級が生まれた。かれらは諸雇会所、傭座と いったものに属し、給金の中から鑑札料（税）をおさめた。こういったいわば職安から離れ、 無職者や無頼の徒となったのが町奴や博打うちである。



河上肇著『社会問題管見』。

また江戸時代には、士農工商の下におかれた賤民の階級があったことはよく知られているが、著者によると、「乞^{きつ}丐^{かい}」（物ごい）が、特殊な団体として現われたのは江戸時代ではなかつた。当時、乞^{きつ}丐^{かい}にも「長」がいて、仲間を取りしまった。明暦三年（一六五七）に町奉行所が江戸市中のその数を調べたところでは、千三、四百人、元禄五年（一六九二）五月に施米をしたときには、四千三百二十九人があつたという。

リギョールの『実践哲学 全』（大正7・8）は、この表題がしめすごとく、日常生活上の指導を与えるような倫理哲学（人間関係や秩序を保持する道徳）を指し、倫理・道徳・法律・社会・政治など、あらゆる分野についての著者の省察をふくんでいる。

内容の概略は——第一篇 道徳の基礎 第二篇 個人道徳 第三篇 家庭道徳 第四篇 社会道徳 第五篇 国民道徳 第六篇 国際道徳——である。

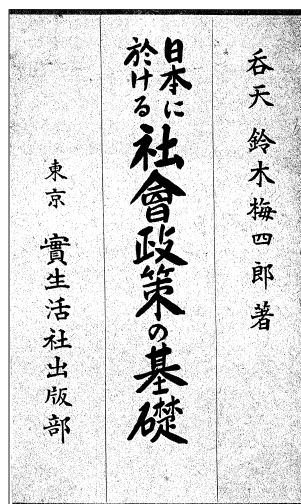
著者は、近年において、社会に関する問題ほどたびたび論議されるものはない、と語っている（第四篇 社会道徳、二五三頁）。人は森の中でひとりで暮らしているよりも、社会で生活している方がやはり便利であるばかりか、ゆかいであるという。人には社会が必要であり、人は社会から離れることができない。社会における人々には、相互の義務がある。それは人間の道徳に属する義務である。

この著者の「社会主義」観はおもしろい。社会主義者のことによると、すべての所有物は「資本」と称し、すべての所有主は「資本主」という。他方、無一物のものは、これを「労働者」と称している。かれらの運命は、資本をもつ代わりに、労働することにある。

社会主義者の目的は、いまの社会を改革し、必要なあいにはこれを破壊することである。「わたしは社会主義者である」という人間のほとんどは、社会主義の本当の意味をよく知っていない。真の社会主義者というのは、いまの資本社会を破壊して、共産社会を建設しようとするものである。

河上肇の『社会問題管見』（大正7・9）は、一般読者を相手とする新聞雑誌に発表した記事をまとめて一書としたもので、「片々たる小冊子」と「題言」において述べてはいるが、四五二頁もある大著である。

内容の概略は——題言 マルクスの『資本論』 スマートの『一経済学者の第二思想』 ラスキンの『此最後の者にも』 共同生活と寄生生活



鈴木梅四郎著
『日本に於ける社会政策の基礎』

教育と遺伝 奢侈と貧困 未決監 生産政策か分配政策 早急と持久 婦人問題雑話 以下省略する——である。著者は「奢侈（ぜいたく）と貧困」において、社会の富裕層がぜいたくな消費をなすことによって、大勢の貧しい人々は、貧困状態から脱することができないという。

こんにちの経済社会では、生産される物品を求めるものが、資力があるかぎりにおいて、それは生産される。なぜなら、それを生産すれば、高く売れて、もうかるからである。どここの店頭にも、無数のぜいたく品が美々しく陳列されている所以である。

一方、日々の糧にも困窮している貧民がこんなに大勢いるのに、需要に限りがあるもの、売値が下落するようなもの、生産者の利益が減じるものは、生産を制限されている。そのため貧民は、ますます不足を訴える。富の分配が不平等であるかぎり、このふしぎな現象は跡をたたない。

エレン・カロリーナ・ソフィア・ケイ（一八四九—一九二六、スウェーデンの婦人思想家）は、進化論的な立場、従来のキリスト教的結婚観・女性観を批判したことで知られている。その熱々なる恋愛中心の結婚説、大胆な自由離婚説、その母権復興説をもって一種の革命児となった。

『婦人運動 全』（大正七・九）は、ケー女子の名著のひとつ『婦人運動』（二九〇九年）を反訳したものである。訳者は原田実である。

欧米では、婦人運動や婦人問題の提起や実行は、いまでは痛切な社会問題、思想問題の一つとなっているのに、日本では婦人運動とか婦人問題はまだ必須の問題となっていないという。つまりまだ自覚的発声をしていないということである。

内容の概略は——緒論 第一章 婦人運動の外的成果 第二章 婦人運動の内的成果 第三章 独身婦人に及ぼせる婦人問題の影響 第四章 少女に及ぼせる婦人運動の影響 第五章 男女一般に及ぼせる婦人運動の影響 第六章 結婚に及ぼせる婦人運動の影響 第七章 母性に及ぼせる婦人運動の影響——である。

鈴木梅四郎の『日本に於ける社会政策の基礎』（大正八・二）は、著者は何も語っていないが、

新聞や雑誌などに発表した記事をまとめて一書としたもののようだ。

内容の概略は——第一章 社会各階級の生活と食費との関係 第二章 人間生活と動物生活との差異 第三章 米価の暴騰暴落と各階級の利害 第四章 工業の発展を妨ぐる米価の暴騰 第五章 米価の変動がもたらす国家存立の脅迫

第六章 無限の需要に対する有限の生産 第七章 世界各国の食料政策 第八章 米穀官営の利害 第九章 米穀官営の目的及方法 統計及一覽表 附録 庶民階級の利福

のために——である。

これを見てもある程度想像できるように、著者は国民にとっての最重要問題——食生活や生命の油ともいふべき米にかかわる諸問題について論究している。

本書が刊行された大正八年当時、あるいはその前後の年——日本国民の八割を占める庶民階級は、米価や一般物価の騰貴に悩まされ、日常生活において苦悶と不安におののいていた。しかし、国民の福利を第一要義として考えねばならぬはずの政治家は、国民の困苦欠乏に目を閉じ、耳をおおい、国民の約二割を占める地主や富豪のために米価を高く保とうとしていた。

米は営利の目的物として、あるいは投機や賭博の対象となり、豪商から一農民にいたるまで、きょうはいくら上った、きのうといくら下った、とその高下に一喜一憂していた。著者によると、官僚政治家が大多数の国民の利益や幸福を犠牲にし、少数の資本家に阿諛追従し、金権政治をもってその本領としてしているのは、じぶんの地位をたもち、長く政権を把握するために便利であり、かつ有効であるからである。

米は日本国民にとっての主食である。貧困層は、収入の大部分を食物に割いている。貧者は、ほとんどすべての金を食費に投じ、その他に使う余裕をもてはいない。さらにもっと貧しい漂泊者の場合は、生、き、ん、が、た、め、に、食、う、の、で、は、な、く、食、は、ん、が、た、め、に、生、き、て、い、る、よ、う、な、も、の、で、あ、る。極貧者には、希望も、よろこびも、考えもない。ただかれらの頭の中を占めているものは、食、物、の、こ、と、だ、け、で、あ、る。

平成の日本でも、経済格差、生活格差のことがときどき話題になる。富める者とそうでない者との「差」が顕著になりつつあるというのだ。いわゆる上流（富裕）階級の人々が、下層（貧民）階級にたいして理、解、や、同、情、を、欠、い、て、い、る、の、は、い、つ、の、世、で、も、変、わ、ら、な、い。

大正のこの時代——食、べ、る、と、い、う、こ、と、は、富、裕、層、に、と、つ、て、単、なる、生、活、の、一、部、分、に、す、ぎ、な、か、つ、た。が、貧、困、層、に、と、つ、て、食、べ、て、ゆ、く、こ、と、自、体、が、生、活、の、す、べ、て、で、あ、つ、た。前、者、に、と、つ、て、食、料、が、騰、貴、し、下、層、民、が、こ、ま、つ、て、い、る、と、い、つ、て、も、ど、の、程、度、に、こ、ま、つ、て、い、る、の、か、実、感、で、き、な、か、つ、た、の、で、あ、る。

著者によると、上流の人々が下層の人々の生活が理解できない原因は、食、費、と、収、入、と、の、割、合、が、上、流、は、ど、軽、く、下、層、は、ど、重、い、か、ら、だ、と、し、て、い、る。つぎに大正七年（一九一八）当時の、一般市民の生活の実状報告を一部紹介しておこう。

月給二十円の小学校教員のばあい。家族は五人、うち一人は親、子供は二人。

米代……………日に一升五合（二人、三合の計算）。一升二十四銭として、月に十二円二十五銭。

野菜、みそ、醤油、薪代……………月に三円。

（冬の）炭、石油代……………月に六円六十銭。

互助会費……………月に四十銭（天引き）。

新聞雑誌代……………月に三十銭。

茶話会費……………月に二十銭。

じっさい手に入る金は、十八円ちょっと。しかたがないから、米をすこしでも減らすために、麦を半分以上まぜ、日に一度は、かゆ、または雑炊を食べている。入浴も制限し、一杯の酒、一片の肉、一箇の焼イモを買う余裕もない。正月が来ても、もちもろくろく食えず、子供に晴衣一枚も着せることができない（『東京朝日新聞』大正7・2・17付）。

月給五十円の官吏のばあい。家族は六人、うち三人は学生、小児はひとり。

月々の出費の明細は明らかでないが、およそつぎのような経済状態である。

一、二年前まで、十円内外であった米代が、この七月には二十五円になったという。家賃、ガス、電気、副食物代を払ったら、手に残ったのは、わずかに一円二十五銭であった。魚を一切でも膳にのせたいが、のせたがさいご、一銭も残らなくなる。一箇十四銭のカボチャが三日分のおかずとなり、ときには昼食を、ジャガイモの塩ゆでですます。ふろしき包みをかかえて質屋ののれんをくぐるようになった（『国民新聞』大正7・8・15付）。

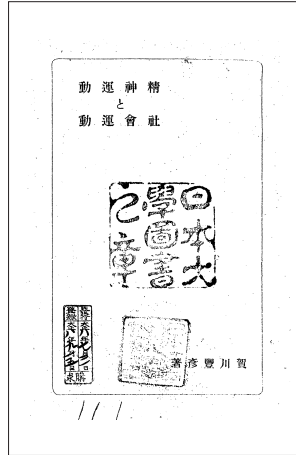
月給七十五円の軍人のばあい。家族は四人、うち二人は子供。

月給は名義上、七十五円であるが、いろいろ引かれるので、じっさいは六十五円。

米代……………月に十五円（三斗の計算）。



賀川著にある、イギリスの貧民窟を風刺的に描いた図。



賀川豊彦著
『精神運動と社会運動』。
〔日本大学文理学部附属図書館蔵〕

文筆を業とする人間は、月給取りとはちがい、収入は不定期である。米屋から掛け買いをして、月末に高価な支払いをせねばならない。かれらは日々不安な、一時しのぎの、“危い生活”をしているのである。

米^{その他}の食料の価の暴騰が今日の調子で^{なお}二、三箇月も続いたら、社会の優良分子である中流の貧民が、その体質と精神とを腐敗させずには置かず、最も悲^{これ}しむべき国民の墮落は、之から始まるだらうと思ひます（『東京朝日新聞』大正7・8・16付）。

賀川豊彦の『精神運動と社会運動』（大正8・6）は、子供の叫び、大人の怒号、病人のうめき声がきこえる、神戸の貧民窟のなかで生まれたものである。著者は「序」のなかで述べている。——貧民窟に入って、ちょうど満十年。その間に貧乏と、病苦と、繁忙と、社会悪と戦ってきた。

おかず代……………月に十八円。
子供の菓子代……………月に二円。
家賃……………月に十七円。
電気・ガス代……………月に二円五十銭。
銭湯代……………月に一円八十銭（隔日）。
新聞代……………月に五十銭。
電車賃……………月に三円七十銭。
学用品……………月に一円五十銭。
計六十一円

残るは、わずか三、四円。役人は昨年来、二、三割月給があがったが、軍人は十二、三年前とかわらない。この一家の場合、主人は好きな酒を飲まなくなつて、二、三月になる（『国民新聞』大正7・8・16付）。

収入不定の文学者のばあい。

わたしは固く信じている。わたしの最大傑作は、紙の上にあってはならない。(注・傍点は引用者による)。

同書の文章は、新たに書いた、二、三篇の論文をのぞくと、過去一年半のあいだに発表したものであるという。構成は「前編」「後編」の二部から成っている。内容の概略は——第一(前)編 精神運動篇 一 機械の人間圧迫史論 二 残酷の歴史 三 ファブレの生存競争の研究 四 死の進化 五 眼球の欠点より見たる宇宙体系 六 ベルグソン以後の進化論と目的論 七 デカダンス派の信仰 八 美の進化 九 埃及宗教推移の研究 十 希臘宗教推移の研究 十一 主観経済学の組織 十二 宗教の社会経済的価値

後編 社会運動篇 一 階級争闘史論 二 貧民恒数論 三 日本農村の社会問題 四 兵庫県内特殊部落の起原に就て 五 幼児死亡率の研究 六 日本貧民階級の住宅問題 七 日本に於ける防貧策としての労働組合運動 八 筑豊炭田の労働問題 九 英国労働党と社会改造 十 貧民窟殖民館事業に就て 十一 女子高等教育の人口増加率減退に及ぼす影響 十二 『ごろつき』の心理 十三 米国民の諧謔の研究 十四 米国大学生の心理 十五 暴動の心理——である。

農民の都市集中問題について、著者はこんなことをいっている。いなかの生活は安定がなく、苦しい。労働もきつい。農村の貧民は、いなかをあとにし、都会に出て職工となる。やがてかれらは都市の享楽生活に酔い、ふたたび農村の激烈な労働に復帰しようとはしない。かれらが都市に集中する最大の理由は、百姓しごとはもうからないからである。

著者は貧民窟に住む悪党ともつきあいがあった。かれによると、ごろつき (ならずもの、無頼漢) の需要を満たしてやっているのが、いまの社会であるという。さて、そのごろつき (略して ごろ という) だが、いろいろある。どこの学校や役所にも、「教員ごろ」「学生ごろ」「政治ごろ」「土木ごろ」「業者ごろ」が巢食っているし、当時は「博徒ごろ」「廓ごろ」「金筋」(奉賀帳ごろ) や「くすり押へ」(雇巡查役) までいた。大正のこの時代——ごろつきは何で食べていたかといえば、著者によると、貸金の回収、家賃の取り立て、土木の入札、労働者の取り締り、ストライキの破壊、職工の争奪、さらにはなほだしいのは、政治運動や警察行政の手先となって暗躍し、糊口の資をえていた。こういった手合いは、資本家や労働組合に雇い入れられることもあるから、餓死しないのである。

神戸、大阪あたりでは、土工が「帳場」(工場現場) で人を殺し、出獄してくると、いい顔となった。その者は仲間から尊敬せられ、かつ恐れられる。そういった人間は、一人前の帳場をもつことが可能である。つまり土建屋の親方ぐらいにはなれるのである。大きな土木工事になると、入札の競争がはげしく、受注をまくるむ側(建設業者)は、必死になって仕事を請け負うことに努める。そのためには担当金をバラまかねばな

らないし、発注者にはかならず口銭が入る。

いまでいう“談合”を仕切るのは、“ごろつき”（土木ごろ）であり、当時それを仲間の隠語で“団子取り^{だんごと}”といった。入札監督者のごろつきに払う“団子金”は、けっして少ない額ではない。当時の金額で、数千円から数万円という。平成のいまの時代にも、ときどき贈収賄事件として新聞の紙面をにぎわしている。

日本の各都市に博徒の一団があるが、これは“ごろつき”の養成所、ごろつきの結社であるという（六三六頁）。著者は死んでいないから、わたしは博徒のために一言弁明させてもらうが、地方には博徒ながら、りっぱな侠客もいた。賭場はたいいてい密室の中か温泉場であった。手入れがあるときは、事前にわかるようになっていた。……

尾崎士郎（一八九八～一九六四、昭和期の小説家、堺利彦らの売文社に出入りし、社会主義運動にかかわる）と茂木久平との共著『西洋社会運動者―評伝―』（大正八・六）は、近代の主だった社会運動家十一名（アウグスト・ベーベル・ラサール、トロツキー、マルクス、レーニンなど）を取りあげた評伝である。

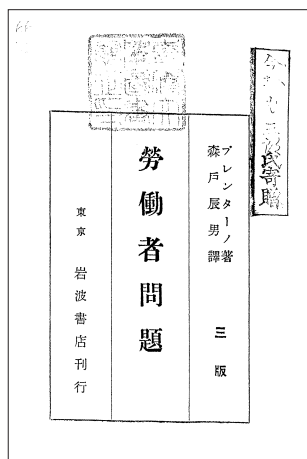
世間でおこなわれている人物評伝といえ、社会の真実を無視したもの、みこしかつぎ的な人間首押に捉われたものが多いのに、本書は時代を批判した人物伝、社会を観察した個人論であるという（高畠素之の「序文」）。

小著（一七七頁）ながら、これをまとめるのに要した努力は相当なものであったと思われるが、著者は原稿を書きながら、異常な興味と感激との洶湧^{きうよう}するを禁じえず、さらに外国の社会運動や労働運動の実情の理解に、かなりうるところがあったと語っている（七頁）。

河田嗣郎^{しろう}（一八八三～一九四三、明治から昭和期の経済学者。『国民新聞社』の記者をへて、のち京大教授。農政・家族・労働問題の実証的研究で知られた）の『社会問題^及社会運動』（大正八・六）は、ふだん折にふれて発表した社会問題についての論文と、執筆しても公にしなかったものをまとめて一冊にしたものである。著者によれば、社会問題は、ある程度経済が発展すると必ず現れる実生活上の問題であるという。

本書は、三部構成になっている。内容の概略は――第一編 第一論 現代の社会と経済 第二編 第二論 同盟罷工と和解^及仲裁制度 第三論 総同盟罷工論 第四論 職工組合論 第三編 第五論 社会主義略史 第六論 社会主義とは何ぞや 第七論 サンヂカリズム概論 附録――である。

この書の中でいちばん重要な部分は、第二編の労働者の自助運動を扱ったところ、第三編の社会改革に関して私見をのべたところであるという。



ブレンターノ著『労働者問題』。
〔専修大学附属図書館蔵〕



喜田貞吉編
『民族と歴史特殊部落研究』。
〔法政大学・大原社会問題研究所蔵〕

雑誌『民族と歴史』（特別号）に掲載された『特殊部落研究』（大正8・7）は、優に一冊の書物ほどの厚みがある。『民族と歴史』という雑誌は、喜田貞吉（一八七一一一九三九、明治から昭和期の歴史学者、京大教授）が創刊したもので、本人みずから主筆をつとめた。喜田は部落問題の研究にとりくんだ歴史学者として、そのパイオニア的役割をはたし、一躍名を知られるようになった。

明治四年（一八七二）穢多・非人の称は廃止されたが、かれらはその後も社会の偏見と差別のなかで暮らさねばならなかった。じっさいかれらが一般社会から区別されたのは、その人間性に問題があったのではなく、一般国民の因襲的な偏見によるところが大きかった。

この特別号の内容の概略は——講演 特殊部落の成立沿革を畧叙して其解放に及ぶ 研究 エタ源流考 エタ名義考 エタに対する圧迫の沿革 特殊部落の人口増殖 上代肉食考 説苑 穢多非人称号廃止の顛末を述べて其起源に及ぶ 部落の現状と改革とに関する施設概観 その他——である。

喜田がこの特別号を刊行した理由は、一般社会がかれらを疎外排斥し、蔑視するのを止めさせ、一般国民をして自覚反省させるためであった。そのため本誌は賤民の成立変遷の事蹟をつまびらかにし、同胞解放の資料を提供しようとしたという（四頁）。

森戸辰男訳『労働者問題』（大正8・10）は、ルヨ・ブレンターノ教授の論著『工業労働者問題』（*Die Gewerbliche Arbeiterfrage*, von Prof. Dr. Lujo Brentano, 1882）を反訳したものである。

訳者によると、大正四年（一九一五）の秋——まだ東京大学の院生のころ、専攻する労働問題についての標準的著作の翻訳を志したという。労働者問題は、朝野の視聴をあつめている現状にかんがみて、この問題に関する多少とも信頼できる邦訳を読書界に提供するためであった。

当時、日本の経済学はまだ翻訳時代を脱してはおらず、古典的なしっかりとした翻訳は、十指にもみたまなかったという。一時の流行や人気などを当て込んで作った、いわゆる際物的な訳本とか、翻案的な著述が、学界に出回っていた。森戸の考えによると、日本の経済学の



ベルドランド・ラッセル著『社会改造の原理』。
〔法政大学・大原社会問題研究所蔵〕

独自なる発展は、ヨーロッパの斯学の基礎の上に、「新なる一步を踏出すと言ふ順序を以て、行はるべきものである」。

ブレンターノによると、労働者問題を研究するものは、人類発展の目的について、一定の見解をもっていないと、この問題を研究する資格がない、という。人類発展の究極の目的とは何かといえ、各人のあらゆる天資をできるだけ発達させ、この発展に応じて各人が文化の成果を享受することである。

内容の概略は——第一章 批判の基準 第二章 労働者階級の発達 第三章 労働者問題

の危機と其の経済的基礎 第四章 労働者問題と社会政策的思潮 第五章 労働者問題の解決方法——である。

高橋五郎（一八五六—一九三五、明治・大正期の評論家・英語学者、のち駒沢大学教授）訳『社会改造の原理』（大8・11）は、バートランド・ラッセル（一八七二—一九七〇、イギリスの哲学者・数学者）の著述であるが、ふしぎなことに訳者の「序文」もなければ、いわんや解説も何もついていない。原書名も明らかでない。同書をひらくと、検閲にひかかった跡があり、ところどころに「注意あり抹消す」とある。消されたページ（たとえば四八頁〜五〇頁）は「白紙」になっている。おそらく、内容が芳しくない、と当局が判断し、削除を命じたものであろう。

内容の概略は——第一章 成長発育の原理 第二章 国家 第三章 戦争——「一種の制度として」 第四章 所有財産 第五章 教育 第六章 結婚及人口問題 第七章 宗教と教育 第八章 吾人の努力——である。

このうちから、ラッセルの国家観を紹介しておこう。ラッセルによれば、国家の権力は絶対的であるという。何物もこれを羈絆（きはん）（そくばく）できないのである。じつさい国家は、課税によって人々の財産を押収でき、結婚法や遺産相続法を決定できる。その厭（いと）う意見の発表を罰することができる。国を売る者を刑死させることもできる。戦争のときは、号令ひとつで壮丁（さうてい）（働きざかりの男）のしかばねを戦場にさらすこともできる。国家は、殺人者と兵役忌避者（きひき）をことごとく厳罰に処すことができる。わたしには国家とは、各人の自由を秩序や平和維持の名のもとに束縛し、支配し、統治している大きな権力をもった怪物におもえる。

岡悌治の『社会改造思想史』（大正8・11）は、「自序」によれば、民主主義、偉人・哲人政治、代議政治改善論、平和主義、社会主義各派の理想などの要点をかかげ、それを批判したものである。とくにいまの日本に、代議政治改善論、平和主義の各種理想および社会主義各派の理想など

を紹介したものが無いから、本書を刊行することにしたという。著者はみずから、「私は国家の文化^{およびその}及其民主化を前提とする国家社会主義者である」(「自序」)とのべている。

内容の概略は——第一章 大戦の誘致せる改造の趨勢 第二章 理想的国家の建設 第三章 事制政治及偉人政治の謳歌 第四章 民主主義の理想 第五章 代議政治改善論 第六章 平和主義の理想 第七章 戦争自滅論 第八章 社会主義の各派 第九章 国家及文化と社会主義 第十章 愛と改造の理想——である。

近代の社会主義とは何か。それは社会における有産階級と無産階級、資本家と賃金労働者とのあいだに存在するところの階級闘争である。両者の利害はまったく相反し、けっして融和することはない。資本家は労働者がつくりだした商品売ることによって富を蓄積し、一方労働者はいつまで経っても賃金^{ドレイ}のままである。

河田嗣郎^{しろう}の『家族制度研究』(大正8・11)は、それまで諸雑誌(『京都法学会雑誌』『国家学会雑誌』)などに発表したものを一冊にまとめたものである。家族制度は、社会組織の大本^{たいほん}(おおもと)をなすものだけに、講究をなす意義はまことに大きいという。

内容の概略は——第一編 婚姻制度論 第二編 氏族制度論 第三編 家族制度論 附録 家族の形態と経済の形態——である。

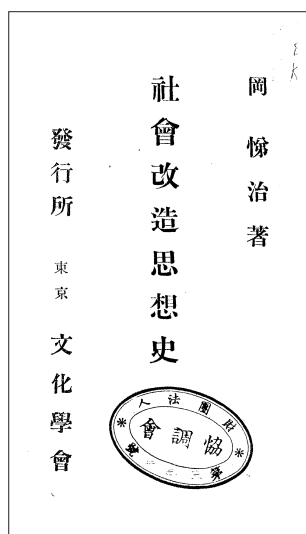
高畠素之の『マルクス学研究』(大正8・12)は、旧稿はあつめ一書としたものであるが、「文集^{ぶんしゅう}」ではなく、前後脈絡ある一篇の「長論文」としてみてほしいと「序」のなかでのべている。内容の概略は——第一章 マルクスの生涯及び其著述 第二章 マルクス説と私の立場 第三章

唯物論とカント哲学 第四章 唯物史観説の改造 第五章 労働価値及び剰余価値説

第六章 資本論第三巻まで 附録 マルクスの貧困増大説 富と価値 『労働経済講話』を読む 収奪者の収奪——である。

講話』を読む 収奪者の収奪——である。

このうち第二章において、著者はマルクス説を哲学・社会学(歴史観)および経済学の三方面から観察したといい、哲学と社会学ではマルクス説を採らず、経済学においてはマルクス説に心服した(本質をすべて受け入れた)とのべている。附録中の「収奪者の収奪」は、マルクス古典美の双壁と称せられるもので、忠実に逐語訳したと語っている。



岡梯治著『社会改造思想史』。
〔法政大学・大原社会問題研究所蔵〕

高島は、人物に惚れ込むことはあっても、我を忘れ、その人物のすべて、その人物に付属するすべてを無批判的に受け入れたわけではなかった。その人物の主義・主張・学説・思想の中味にたいしては、つねに批判的態度を守ってきたようだ。マルクスの学説にしても、よいところは取るし、悪いところは捨てて来たし、こういう態度はすべての人物に対しても変わることはなかった。

『現代の社会的進歩 全』（大正8・12）は、ウィスコンシン大学政治学教授フレデリック・オースチン・オッグの原著『現代ヨーロッパの社会的進歩』（*Social Progress of Contemporary Europe*, by Prof. Frederic Austin Ogg, 1912, 版元は不詳）を訳出したものである。訳筆をとったのは、柳田泉と宮沢末男である。

本書は五二二頁もある大著である。内容の概略は——第一章 著者の見地 第二章 十八世紀の背景 第三章 仏国の旧制度 第四章 仏国の大革命 第五章 ナポレオンと新制度 第六章 英国農業の変化 第七章 英国の産業革命 第八章 大陸に於ける経済的变化 第九章 一八三二年に至る英国の政治的改革 第十章 英国民主政治の発達、以下第二十二章までであるが省略する——である。

同書は、いかなる書物かといえば、十八世紀の後半以降いまにいたる百二十五年間の“社会的発展の経路”を撮要し（要点をまとめる）叙述したものである。世界改造の導火線となったフランス大革命に筆をおこし、あるいは民主主義の発達にふれ、民衆勢力の増大、資本主義の起原、労資分立の由来などについて叙述したものである（例言）。

訳者によれば、いまのわれわれに必要なものとは、過去の経験的な事実の與^{あた}ふる尊い教訓である。この書をよめば、こんにちの一般的社会問題にたいして、根拠ある理解がえられるという。

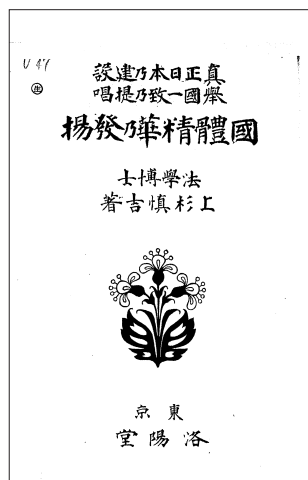
さらに訳者は、この書をよんでえた感想を二、三のべている。

現在の世界現象ちゅうで最も顕著なものの一つは、大正七年（一九一八）ロシアのロマノフ王朝が崩壊したことであった。フランス革命のときは、フランスの国家そのものは崩壊しなかったが、ロシアの場合は国家的存在の痕跡さえとどめていない。

いまは“個人的自由増加の時代”である。……普通選挙は歓迎すべきことにちがいないが、やはり多数による政治たる範囲は出ないであろう。少数を強圧して、多数の意見を通すのが民主的精神の自由活動の証拠にはならない。

民主的精神の自由活動を許さないかぎり、個人の自由はありえない。

最近の大問題は、労働問題である。この問題の解決が、一朝一夕のことでないということは、問題発生の経路をみてもわかる。労働問題が国家



上杉慎吉著『国体精華乃発場』。

的な大問題となったのは、十八世紀の中世以降、十九世紀前半におこった産業革命と資本主義発達の結果生じた、工場組織の興起と労資分離に端を発している。

上杉慎吉（一八七八～一九二九、明治・大正期の憲法学者）は、単に学者にとどまらず、社会運動（国家主義運動）にも関与し、天皇制絶対主義のたちばから、「新人会」「社会科学研究会」に対抗して、「興国同志会」「七生会」をつくったことで知られている。

上杉は弊害を排して、国体の精華を発揚し、真の日本を建設するために『国体精華乃発揚』（大正8・12）を著した。いわばこの本は、こんにちから見ると、国粹主義を提唱するための宣伝書であった。その要目とするところは、つぎの六つである。

- 一 思想を淘汰して挙国一心ならしむ。
- 二 挙国を総動員し、国威の宣揚を期す。
- 三 挙国皆兵を実現して、大いに軍国主義をおこなう。
- 四 資本と労働を統制して、挙国経済を一つにする。
- 五 民主（国民の生活）を整理し、国粹を保守して、挙国一民ならしむ。
- 六 大権中心の実をあげ、政府を革新し、挙国選挙の制を定む。

本書は三部構成になっている。内容の概略は——第一篇 国体の精華 第一章 国体 第二章 国体の精華 第三章 国史の成跡 第二篇 帝国の現状 第一章 帝国の地位 第二章 政権の争奪 第三章 人心の頹廃 第三篇 国体精華の発揚 第一章 思想の淘汰 第二章 国威の宣揚 第三章 挙国皆兵 第四章 経済の統一 第五章 民生の修固 第六章 政治の刷新——である。

“国体”の意味であるが、著者によれば、立国の体制、国家組織の根本、あるいは建国の精神、統治の洪範（手本）、皇道の惟神至聖（天皇）などをいう。

大日本帝国は、万世一系の天皇がこれを統治する。日本の国体というのは純粋なる君主国体であるという。日本臣民（国民）は、天皇に服従することをもって、その本分となし、臣民が

天皇に服従するのが国体でもある。

天皇の意思は、最高である。国内のすべての意思はこれに服従する。帝国憲法は三権をわかし、独立の官府を設けている。主権は天皇これを総攬統一して、あえて分割することはない。民選の代表者が、君主のうえに立ち、あるいは君主と相対等なる直接機関となすは、国体に反することである。

維新以降いまに至る五十年は、“洋化” “洋化主義” の五十年であった。学問とは、西洋の事物を知ることのように考えられ、一種異様の日本が生まれた。国民の生活を規律する法律にしても、西洋模倣の法典である。民権自由論にしても、西洋模倣の思想である。日本人はなおも西洋思想のあいだで浮遊している。日本人はすでに半ば西洋人である。

『社会主義論』（大正9・1）は、ウィスコンシン大学教授リチャード・セオドル・イリー（一八五四〜？）の『社会主義と社会改革』（*Socialism and Social Reform*, 1894）の反訳である。が、いったいだれが同書を訳したのか明らかでない。訳者の「序言」によると、こんにちの日本の思想界において、重要な位置をしめ、さかんに議論されているのは、社会主義であるという。欧米の一般社会にも、社会主義的思潮が漂っている。わが日本では最近その説を紹介したり、その言論を批判したり、極端なものになると、その実行を夢想しているものすらいる。

日本社会では、“社会主義” について正確な概念をもつものはすくなく、穩健なる多数者は、それがどんなものか理解していない。一方、それを蛇蝎（へび、サソリ）のごとく忌み嫌い、恐怖するものがあったり、社会主義を万民救済の福音として、これに心酔するものまでいる。

しかし、“社会主義” の真髓や眼目について平易に書いたものがなく、この欠陥をおぎなうために、経済学の泰斗イリー教授の論著の訳出をくわだてたという。

内容の概略は——第一編 社会主義の性質 第二編 社会主義の長所 第三編 社会主義の短所 第四編 中庸論——である。著者の考えの中心は、社会改良主義（社会政策主義）によって、いまの社会組織の弊害を正し、社会の円満なる進歩発展を期すにある。

著者によると、“社会主義” なる語がはじめて用いられたのは十九世紀である。が、いまではさまざまの意義を有するまでになったという。著者がいう社会主義とは、科学的社会主義のことであり、根本的な社会改造によって、産業社会を建設する意である。が、ドイツのフォン・シールは、社会主義のことを“貧民階級の経済哲学” と呼んだ。

高田保馬は、自著『現代社会の諸研究』（大正9・2）の「序」のなかで、「わたしの当面の仕事は、現代社会の向ひゆく諸傾向を考察するこ

と」であり、本書に収めたものは、この目的のために成ったものだと言っている。

内容の概略は——第一編 将来社会観の種々 一 ジムメルとスペンサアとの将来社会観 二 集産主義の社会学的考察 三 ギルドソシアリズムの社会学的考察 四 遊戯としての社会生活 第二編 富及び企業おとよの集中 五 所得のパレト線に就いて 六 収益の丘を論ず 第三編 戦争及び人種問題 七 戦争と文化 八 人種問題私見 第四編 日本の人口問題 九 日本に於ける出生率増加の原因 十 最近の出生率減少に就いて——である。

著者によると、第一編の諸論文は、各章少しく問題の中心を異にしているが、その間に連絡があるという。第二編に収めたものは、現代日本における「集中」の事実を統計資料にもとづいて詳論したもので、第三編に収めた論文は、眼前に展開した事実から刺激をうけて立論したものという。

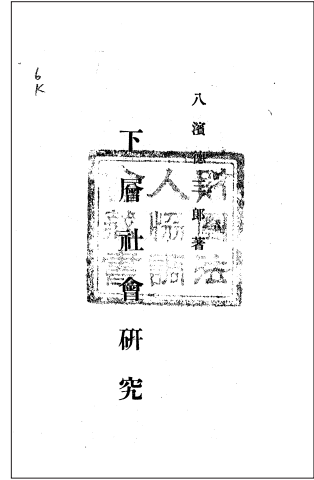
高島素之が編んだ『社会問題総覧』（大正9・2）は、社会問題の根本的解決のためというより、社会問題を研究するうえでの好個の資料を提供するのが目的であった。同書は六三三頁もある大著である。内容の概略は——社会問題の意義及由来 第一編 社会政策 第一章 社会政策の意義及由来 第二章 社会政策の国家的方面 第三章 都市的方面 第四章 社会政策の自助的方面 第五章 各国に於ける社会政策 第二篇 社会主義 第一章 結論 第二章 社会主義の意義及び由来 第三章 社会主義の理論 第四章 各国の社会党 第三篇 労働組合 第一章 労働組合の意義及由来 第二章 労働組合の組織及職能 第三章 英国労働組合 第四章 仏国労働組合 第五章 獨逸の労働組合 第六章 露西亞の労働組合 第七章 北米合衆国の労働組合 第八章 欧州諸国の労働組合

第四篇 婦人問題 第一章 両性の進化 第二章 日本現時の婦人問題 第三章 各国婦人選挙権——である。

編者の高島によると、「社会問題」というとき、広い意味と狭い意味の二つがあるという。広義の社会問題とは、「社会制度全体に関係する問題」に「婦人問題」を加えたものをいい、狭義の社会問題とは、産業制度における「労働問題」のことをいう。

近世における社会問題の中心は、農業というよりむしろ工業のほうにある。それが発生したのは、商品の家内製造より工場製造に進んだ時期にあり、労力を売る側の労働者とそれを買う資本家とのあいだで、賃金や労働条件をめぐる軋轢あつれきを生じたのに由来するという。

欧米の社会問題は、日本にも波及している。日本はおどろくべき勢いをもって農業国から工業国に移行してきた。日本の社会問題というとき、それは工業中心の労働問題を指し、どのように資本家と労働者のかっとうや闘争を処決しよけつするかが緊急の問題となっているという（八頁）。



八浜徳三郎著『下層社会研究』。
[法政大学・大原社会問題研究所蔵]

八浜徳三郎の『下層社会研究』（大正9・3）は、大正二年（一九一三）から同九年（一九二〇）にいたる六年間、新聞雑誌に発表したものを一冊にまとめたものである。「凡例」によると、著者は多年社会事業に従事し、また内務省細民調査の嘱託として、東京の下層社会を調査したときの体験とそのときあつめた資料にもとづき本書を叙したという。だから、学者が万巻の書を渉猟して、さらに詞藻を練磨して、著述したものとは異にしている。

内容の概略は——第一章 高利貸 第二章 質屋 第三章 公設質屋 第四章 桂庵

（口入れ屋） 第五章 公設桂庵 第六章 木賃宿 第七章 貧民窟 第八章 職工 第九章 淫売婦 第十章 不良少年——である。

生活の追いつめられた貧民が駆けこむ機関であるとか、かれらが多く集り住む地区や工場労働者とか、肉体をひさぐ女性とか、不良などについて具体的に報告している。

このうちわたしの興味を引いたのは、^{ばいん}売淫をもって生活している女性、とくに“^{ししょう}私娼”（官許可をえず、内密に売春をおこなう女性）である。その原因について、著者が東京浅草公園の私娼千二百名につき調査したところでは、生活難のためと称するものは五百六十人もいた。さらにその内訳はつぎのようであった。

一	淫売屋の主人と知りあい……………	二七〇名
二	他人の誘惑により……………	五七名
三	いろいろの原因……………	四六名
四	女中か子守かとおもって……………	四五名
五	淫売屋の主人と親戚関係にある……………	六一名
六	情夫（いろ男）のため、情夫にすてられ……………	二八名
七	親が金のために淫売屋に養女に……………	二四名
八	子供を扶養するために……………	一三名

- 九 不具病疾の夫を養うために……………一三名
- 十 保証人なく、堅気の奉公できず……………九名
- 十一 母とともに雇われ、母は淫売屋の飯たき……………四名
- 十二 子供とともに雇われ、子は淫売屋の子守り……………一名

このような女性が、淪落するに至った唯一の原因は、やはり貧困を第一にあげることができるが、その他家庭の不備や肉体的、精神的変質に生
活難といった経済的事情をくわえているようだ。

さらに彼女たちの従前の職業であるが、それをつぎに記すと、――

家業に従事……………	六二五名	女中……………	六八名
酌婦（場末の料理店などの）……………	六二名	芸娼妓……………	五名
看護婦見習……………	五名	裁縫職……………	九名

また学歴についていえば、尋常小学校に通ったもの五七一名、高等小学校を出たもの一五六名、小学校にも通わぬ無学のもの四〇九名であった。
彼女らの多くは、募集人の甘言にあざむかれ、希望を抱いて郷里をあとにしたものである。彼女らは仕事についてみると、万事に失望した。い
なかにも帰れないし、誘われまま諸所の工場を流浪するうちに、身体も精神もボロボロになり、あげくのはてに墮落し、ある者は酌婦に、またあ
る者は貧民窟の私娼となり、悲惨な最期をとげるにいたるのである。

佐野袈裟美（一八八六―一九四五、大正・昭和期の社会運動家、早稲田にまなぶ、『種時く人』『文芸戦前』の同人）は、社会問題にふかい興味
を感じるようになり、その研究に没頭した結果生まれたのが、『社会改造の諸問題』（大正9・3）である。

著者は本書の「序」のなかでのべている。

現代の文明及び社会に於ける最も重大なる根本的な問題に就いて、十分それを理解し、且つその解決の道を求めようと試みたのである、と。

内容の概略は——諸論 文明及び社会進歩の原理 第一章 戦争と文明の進歩 第二章 世界平和の基礎 第三章 デモクラシーの徹底 第四章 仕事の機械化し行く傾向 第五章 教育改造の根本問題 第六章 婦人の覚醒 第七章 貧富の懸隔^{けんかく} 第八章 現代社会に於ける奴隷状態 第九章 コンマーシャルイズムの世界 結論 社会改造の根本方針——である。

著者によると、いまの日本では、“社会の改造”ということが、一つの流行語になり、人々の口にのぼっているという。これまでの社会は、多くの民衆にとって堪へがたいものであった。そこには十分なる自由がなく、生活はいろいろな方面から圧迫をうけていた。

社会を改造するといっても、どのような方針のもとにおこなうのか。社会問題を解くカギとはなにか。著者は、それを“生命の解放”にあると考えた。社会主義者は、物質主義に陥り、物質的繁栄、物質的幸福を増進することを唯一の目的としている。すなわち物質的に欲望が満たされれば、人間は満足し、幸福になれると思っているが、それは大きなまちがいだという。

社会を改造する方針は、民衆を圧迫や束縛から解放し、かれらに本来のすがたを発揮せしめ、その赴くままに自由な発展をとげさせることだという。

小川郷太郎（一八七六—一九四五、大正・昭和期の政党政治家、京大教授のとき政界に入る。第二次近衛内閣の鉄道相、ビルマから帰国するとき阿波丸とともに没した）の『社会問題と財政』（大正9・3）は、『経済論叢』その他の雑誌に発表した論文をまとめ、一書としたものである。

著者は、本書において、財政的社会政策について論究し、財政が他の社会政策の条件であることを明らかにしたという。

著者は、「自序」のなかでのべている。「社会問題は、目下、我国に於ける重大問題である」と。社会問題がやかましくなるにつれて、社会主義が宣伝せられ、無政府主義が鼓吹せられ、ひいては革命思想の横溢となるのは自然の勢いであるという。わが国の現状は、まさにこれだという。

内容の概略は——第一編 総論 第一章 社会問題の解決と財政 第二章 戦後財政の社会化 第三章 社会政策と財政 第四章 社会政策より観たる我国の財政 第二編 官業の社会化 第一章 独占事業官営論 第二章 官業整理論を駁す^{はく}。

第三章 専売拡張論 第三編 租税の社会化 第一章 社会的租税政策の根本理論 第二章 社会政策より観たる我国の税制 第三章 国防充実の為に増税と税制整理 第四章 戦時利得税論 以下、省略する——である。

著者によると、第一次世界大戦が終結すると、それと入れ替りにおこったものがあるという。それは欧米では大戦前からあるもので、“社会戦”（社会階級の戦い）だという。いいかえると、資本家と労働者とのあいだの戦争である。

富者がますます肥えゆくのに反して、貧者の辛苦の度はあがり、ますます貧しくなっていく。貧富の差がはなはだしくなると、だれでもいまの社会制度に疑問をもつようになるのは当然である。貧しい労働者はその地位を自覚し、みずから進んでその運命を変えようとする。

労働者はしぜん団結する。労賃の引きあげ、労働時間の短縮、経営参加をもとめるようになる。そして、同盟罷業をおこなう。

平成のいまの社会にもその傾向が見られつつあるが、貧富懸隔がはなはだしくなると、社会は「不安」の気にみたされる。当然、社会問題が現われてくる。政府は、こういった社会現象を冷眼視できない。国の力をもって問題解決にあたらねばならない。

『社会政策』がおこる。それは貧富の差を調和するものである。それは「富の集中化」を制限し、貧しいものの利益を擁護し、その生活を安定せしめようとするものである。著者のみるところ、社会主義は資本主義を打破し、階級戦に訴えて「革命」を引き起すのを目的としている。

しかし、革命は必ずしも、人類に幸福をもたらさない。革命の目的の達せられたことはほとんどない。社会主義によって、社会問題を解決すべきでないという。

堺 利彦の『恐怖・闘争・歓喜』（大正9・4）は、大正八年ちゅうにおける思想界の急激な推移のなかで——目がまわるような忙しさの中で書いた、いろいろな文章をあつめて一冊にしたものである。

「大正八年は日本の思想界が最も急激な進歩を呈した年である」（「序」という。福田徳三（一八七四—一九三〇、明治・大正期の経済学者、民主主義の指導者、自由主義者として、多くの論著を発表した。東京高商（一橋大学）教授）の時代が去って、河上肇の時代が来たという。

堺によると、大正八年の前半は福田時代の全盛期であり、その後半は河上時代の興隆期であった。また時代の傾向は、デモクラシーから社会主義研究へと進み、さらに社会主義研究から労働運動に転じつつあった（四九頁）。

内容の概略は——恐怖・闘争・歓喜 政治運動、社会運動、労働運動 大正八年の社会的総勘定 社会主義思想の淵源及び其発達 マルクス主義の分化 唯物史観概要 唯物史観に対する諸批評 マルクス説とデアキン説 現代社会の最も恐るべき弊害

一石二鳥的の効果 福田時代から河上時代へ 唯物史観と理想主義 労働運動者の類別 カントと社会主義 政治化、労働化 真正面の本道を進む人 見た儘聞いた儘 社会主義は怠惰を奨励せざるか 誰が肥汲みをするか 友愛会大会傍聴の記 京阪講演旅行の記——である。

高橋潜淵（正熊）訳『国家社会主義の本質と其運用』（大9・4）は、タマス・ヒューズ（不詳）の著述を反訳したものである。唯物的見解に偏したマルクス一派の社会主義とは異なり、ユートピア（『新社会』）をして、経済的、道徳的方面の基礎を強固なものにしようとする考えを説い

たものである。

内容の概略は——緒言 第一章 新紀元と欧州戦 第二章 アフリカに於ける試み 第三章 植民地発展 第四章 土地所有に関する新制度
第五章 市の家屋制度 第六章 農場に適用せる家屋制度 第七章 新給金法 第八章 不動産及び動産の維持修理
以下、二十九章までであるが省略する——である。

中目尚義訳『過激派の本領』（大正9・4）は、ロシアでおこなわれたボルシェビ（原義は“多数派”、転じて“共産主義者”や“過激派”の意にも用いられる）の起原、目標、およびそれに関係ある人々の幾多の理想について叙述したものである。が、原書名について明らかでない。訳者によると、何でもイギリスの雑誌『ゼ・ラウンドテーブル』に連載された記事を反訳したものという。

本書は前編・後編の二部構成になっている。内容の概略は——前編 ボルシェヴィキの運動 緒言 一 ボルシェヴィキの起原 二 ボルシェヴィキの指導者 三 ボルシェヴィキの抱負 四 ボルシェヴィキの機関 五 ボルシェヴィキの宣伝 六 結論 後編 反ボルシェヴィキ運動 緒言 一 ボルシェヴィズムは衰滅しつつあるか 二 ボルシェヴィキ政府と講話 三 露西亞の反ボルシェヴィキ運動 四 シベリアに於ける運動 五 南露に於ける義勇軍 六 北露に於ける仮政府 七 結論 マルクス主義の戲画的發現……ジョン・スパーゴ——である。

第一次世界大戦前、ボルシェビズム（マルクスレーニン主義、過激主義）の運動は、単にロシア国内だけのものと観られていた。が、その後世界的な運動へと発展してゆくのである。無産階級は、非人間的な工場で、しいたげられた生活を送っていたが、ついにじぶんの力、自己の権利を自覚するにいたり、衆を頼んで革命をおこすのである。

ボルシェビの革命によって、ロシア国民ははたして幸福な生活を営んでいるのか。民衆は指導者らをどのように観ているのか。私有財産制度は、どこまで破壊されたのか。保守主義者も資本主義者も社会主義者もみな、ボルシェビの革命のなかに教訓を読みとらなくてはならないという。

納武津訳『社会哲学原論』（大正9・6）は、アイ・エス・マッケンジーの『社会哲学概説』（*Outlines of Social Philosophy*, 1918）を反訳したものである。社会哲学は広義に解したばあい、社会学の一面に属するものである。この学問は、その注意を人類の社会的統一体のうえにむけ、それについての人生の特種の方面の意義を解明しようとするものである。したがってその価値、目的、理想などを研究するものである。

原著者はのべている。本書は、プラトンの『理想国』の精神を、いまの社会状態に当てはめて推論したものである、と。内容の概略は——第一編 社会的秩序の基礎 第一章 人間性 第二章 共同生活体 第三章 アソシエーション 結合生活体の諸様式 第二編 国家的秩序 第一章 家族 第二章 教

育的制度 第三章 産業制度 第四章 国家 第五章 正義 第六章 社会的理想 第三編 世界的秩序 第一章 国際関係 第二章 宗教の地位 第三章 教化の地位 結論 一般的結果——である。

高橋正熊訳『社会主義大系』^{一名}社会主義の理論と実際』（大正9・6）は、アメリカ有数の社会主義研究家であるモリス・ヒルクイットの論著（原書名不詳）を反訳したものである。原著者は、本書において、現時の社会主義的施設と社会主義的問題にたいして、社会主義的哲理がいかなる関係を有するか、また全世界の社会主義運動の歴史や方法や成績を要説している。

訳者である高橋は、以前東京帝国大学の社会学の嘱託研究員であった人物だが、「訳者より諸君へ」のなかで、こんなことをのべている。

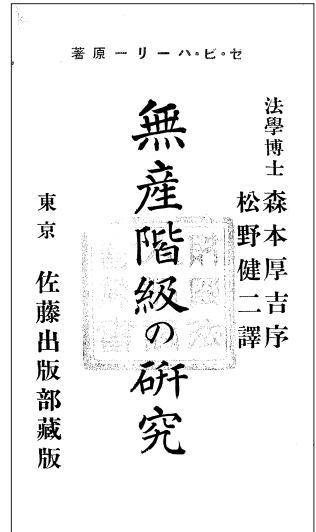
近時の最大暴風雨たりし今次の大戦（第一次世界大戦——引用者）は、端なく（思いがけず）幾多の社会の欠陥を暴露した。是に於て改革といひ、改造といふ言葉は、到る処に叫ばれるやうに成った。改造に関する書冊（書物）は、一時に（同時に）雨後の筈の如く簇出した（むらがり出た）。

ここに出てくる“改革”や“改造”は、いうまでもなく、社会を作り直す意である。“社会主義の大津波”がわが日本を襲ってから、改革や改造のことを盛んに耳にするようになった。そして社会主義的な書物がつぎつぎと刊行されている。

日本国民は社会主義の何たるかを、いまこそ勉強しておく必要がある。それを毛嫌いし、回避するときではないという。内容の概略は——第一編 社会主義の哲理（哲学上の理計——引用者）と運動 第一章 序説 第二章 社会主義と個人主義 第三章 社会主義と倫理 第四章 社会主義と法律 第五章 社会主義と国家 第六章 社会主義と政治 第二編 社会主義と改革 第一章 序説 第二章 産業改革運動 第三章 労働保険 第四章 政治改革運動 第五章 行政的改革 第六章 社会的改革 附録 社会主義運動史略——である。

小泉信三（一八八八―一九六六、昭和期の経済学者、のち慶応義塾大学塾長）は、リカード（一七七二―一八二三）などイギリス古典派経済学の研究者としても知られている。かれは近年発表した大小の社会問題を材とした論文をあつめ、刊行したのが『社会問題研究』（大正9・6）である。

内容の概略は——フェルチナンド・ラッサルと獨逸労働者運動 集産主義及びサンヂカリズムに対する批評としてのギルド・ソシヤリズム 再編 Guild Socialism 労働の苦痛 二種のユウトピア 学問芸術と社会主義 マルクスの価値論と価格論との関係 労働権の承認と国民工場の始末



ジェイミソン・B・ハリー著
『無産階級の研究』
〔法政大学・大原社会問題研究所蔵〕

トオマス・ホジスキンの労働果実 全収権主張 戦費の経済理論——である。
巻中の諸篇について若干説明すれば、ラサール（一八二五〜六四、ドイツの労働運動・社会主義運動の指導者）を論じたものは、ドイツの社会運動史を研究していたとき、得たところを訳したものという。ギルド社会主義（産業を国有化して、職種ごとのギルドが管理・運営する社会主義思想）の一篇は、イギリスの社会思想の最新潮流を紹介したものである。

う。要するに、本書に収録されている諸篇は、ほとんどヨーロッパの学者の紹介的記事が中心のようだ。

松野健二訳『無産階級の研究』（大正9・7）は、ジェイミソン・B・ハリー著『貧困とその悪循環』（Jamieson B. Hurry: *Poverty and its Vicious Circles*, London, 1917）を反訳したものである。

訳者によると、日本人の大半は貧しい人間である。貧困問題は、日本にとって目下の重大問題のひとつであるという。国家も積極的に救貧政策に手を染めたことのあるを多く聞かない。が、時勢はついに衆目を貧者や無産階級にむけせしめた。これらの生活困窮者の状態を研究考察することは、われわれ同胞の義務だという。

古来イギリスは、貧富の差はなほだしい国だけに貧困者——筋肉労働者に関する研究は盛んであり、世界にその類をみないのである。イギリスの労働者階級の状態と政策を研究して、他山の石とするのが、この書の翻訳上梓の目的だという。

内容の概略は——第一章 諸論 第二章 貧乏の因果 第三章 人為的因果 第四章 因果の成果 第五章 因果の破滅 第六章 結論——である。

本書は、斬新なる見地から、貧困問題を分析している。貧乏というのは社会的疾患であり、悪性の循環的な病気なのである。賃金が低いことと家族が多いことが貧困の原因である。多くの貧困者は、生涯のうち肝要な三期に貧乏の打撃をうけている。

第一期……幼少年時代——労働者の子供は貧困状態にある。十四、五歳になると、賃金をかせぐようになり、家計はやゝ良好となる。

第二期……壮年時代——二十五歳前後で結婚し、家を出て独立する。子供が二、三人生れるようになると、ふたたび貧困に陥る。じぶんの子供が十四、五歳になるまで貧乏との苦闘である。が、子供が賃金をかせぐようになり、いくぶん家計は楽になる。

第三期……老年時代——晩年をたのしむ時期であるが、貧しさは変わらない。すでに老年のために働くことができず、不遇のうちに死んでゆく。

貧困はこのように循環的なものであり、いろいろな複雑な原因が循環的に作用して、「貧乏」という悪い結果を生んでいる、と説いている。

宮地武夫訳『非共産主義』（大正9・8）は、ポール・ルロア・ボーリユーの非共産主義論として有名な『共産主義』^{コソクテイズム}を全訳したものという。著者はフランスの社会経済学の碩師^{せきし}であり、社会主義者である。

この訳書は、共産主義が危険思想であることを鼓吹する目的で刊行されたようで、訳者みずから、「願はくば、本書に依りて、共産主義の如何^{いか}に人類共通の大敵たる事を具に了解されん事を」（「自序」）と述べている。

訳者によると、こんにちの危険思想のなかで、最も脅威を感じるものは、「無政府共産主義」であるという。共産主義者は、これをもって社会の理想のごとくいうが、共産制度は現代社会に不適当であるばかりか、根本的に不合理なる、一種の「幻想」である。

内容の概略は——第一編 第一章 社会主義、共産主義及びコムニニズムの定義。第二章 資本と労働の関係 第三章 土地に於ける私有財産の起源 第四章 自然的正義と歴史的観察に基ける土地私有権に対する反対説 第五章 現時の土地共有制 第六章 土地は厳密なる意味にて共有財産に非ず^{あらず}

第二編 第一章 産業的共産主義 マルクスとラッサル 第二章 資本そのものは不生産的。「利益」^{すなわ}即ち「余剰価値」の定義 第三章 多様な「余剰価値」 賃金生活者の境遇改革 第四章 共産主義の実地応用 第五章 共産社会に於ける分配 第六章 共産組織における労力の経済 第三編 第一章 マルクス派学説に関するベルンスタインの批評 第二章 産業の集中 マルクスの論拠 第三章 フランスに於ける社会主義者 第四章 都市社会主義 結論——である。

宮地武夫訳『物価と生活問題』（大正9・9）は、フレデリック・シー・ホー（不詳）の著述を訳出したものである。訳者の「例言」によれば、ここ一、二年は世界的な大不況と世界的物価騰貴とが奇怪なる道づれとなって相対立しているという。このさいわれわれ日本人に、他山の石として、深刻なる反省と暗示をあたえてくれるのが、本書であるという。

原著者によると、第一次世界大戦は、物価の騰貴ばかりか、買占めや投機の機会までもたらした。生活費はずっと上りばなしであり、政府のほうで物価調整策を講じないと、これからも高騰をつづける、という。生活必需品が暴騰したのは、日本にかぎらず、世界共通の社会現象であったようだ。

波多野鼎訳『ロシア社会学』（大9・10）は、ジュリアス・エフ・ヘッカーの同じ表題タイトルの書を反訳したものである。同書は、ロシアの社会学的思想や社会学説を歴史的に研究したものである。

内容の概略は——第一部 ロシア社会学の発端 第一章 ロシア社会学の政治的社会的背景 第二章 スラヴ主義及びロシア主義社会学説 第三章 西欧主義社会学 第二部 主観主義社会学 第一章 ラヴロフの社会学 第二章 ミカロフスキーの社会学 第三章 ユーザコフの社会学 第四章 カレーエフの社会学

第三部 客観主義社会学及び其他の諸学派 第一章 正統マルクス主義 第二章 新マルクス主義 第三章 無政府主義及び革命主義社会学 第四章 法的社会学及び歴史發生的社会学 第五章 仏露社会学——である。

著者によると、第一部はあとの二部門の序説と見るべきものであり、第二部は主要なるロシア社会学派の解説であり、第三部はロシア社会学に入ってきた各種の学説を包含ほうがんするものという。

ロシア社会学の大部分は、ロシア国民の政治生活、社会生活に迫ってきた諸問題によって産みだされたものであるから、じつにロシア人そのものの表現であるという。したがって、これを理解するには、ロシアの政治的、社会的のさまざまな運動の歴史に照らして研究する必要があるという。

窪田文三は元外交官である。退官後、労働問題がしだいに勃興してゆくのを見て、この種の問題の研究に没頭するようになった。大正八年（一九一九）春、ヴェルサイユ条約の締結にあたり、政府側顧問として会議に参加し、外交問題と労働問題で日本の態度を表明した。のち新設の社会局長（東京市）の職についた。

『現代日本と社会問題』（大正9・10）は、窪田が新聞雑誌に発表したものの、あるいは演壇から語ったものを一冊にまとめたものである。著者によると、労働問題は、最近わが国において、きわめて重大な問題となってきたており、学者・政客せいかく（政治家）・実業家・労働者のあいだで激烈な論争がおこなわれているという。

欧米の新説の鼓吹につとめる過激論者と保守派は、たがいに論難しあい、調和することはない。

内容の概略は——第一編 新日本に於ける労働組合 第二編 国際労働問題と日本 第三編 社会事業の理論と実行 第四編 近代日本と外交
第五編 世界大勢の赴く処——である。

第一編に収録されている「同盟罷工論」における著者の考えは、つぎのようなものである。——雇主である会社または個人は、業務のつごうとかその他の理由で、じぶんが使っている労働者を勝手に首にすることができ、そのことは雇主の自由であるとされ、不法行為として認められたことはないのである。

そうであれば、労働者がじぶんのつごうとか、その他の理由で職場をはなれても何の不可もないはずである。それは労働者の自由である。同盟罷工は決して不法の行為ではなく、労働者の享有すべき権利なのである。

日本では同盟罷業（ストライキ）がおこるたびに、「暴行」とか「脅迫」が付きものようになっておこなわれる。欧米諸国では、ストライキは合法的行為として認められており、しかも法規上それは労働者の正当なる権利となっている。しかし、日本では労働組合の組織がないのに、罷業はたびたびおこっているという。

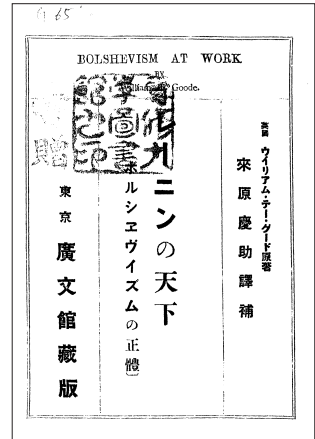
将来、罷業による階級闘争がますます激しくなり、ロシア革命のような恐るべき結果を見ぬとはかぎらない。このさいわが国もおくれたりとはいえ、調停機関を設け、同時に労働組合を公認し、同盟罷工を緩和する必要がある（六六―六七頁）。

中沢臨川（一八七八―一九二〇、明治・大正期の評論家）は、東京大学で電気工学を専攻し、のちに電気会社を経営した異色の評論家であり、新理想主義の立場で活躍した。

著者は、『新社会の基礎』（大正9・10）においてのべようとしたのは、人間社会でおこなわれている「連帯」の現象についてである。いま社会でやかましいのは「改造」の問題であり、逼迫した時事問題に解決の糸口をみいだすために本書を著したという。

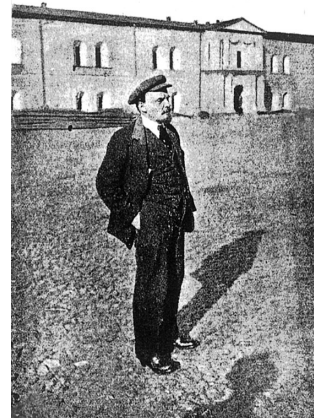
内容の概略は——新社会主義への道 全国教育者に寄す 労働問題の愛護 労働の危機 湘南養病録 田園工業 技術家の覚醒 ソシアル・デモクラシーの新精神 自滅を急ぎつゝある智識階級 智識階級よ団結せよ 思想の自由といふこと（森戸問題） チホン大主教のこと（ロシアに於ける宗教運動の復興） 電子説から観た世界——である。

来原慶助訳『レーニンの天下——ボルシェヴィズムの正体』（大正9・10）は、イギリスの『マンチェスター・ガーディアン』紙の記者ウィリ



ウィリアム・テー・グード原著
『レーニンの天下（ボルシェヴィズムの正体）』。

〔専修大学附属図書館蔵〕



ウリヤノフ・レーニン

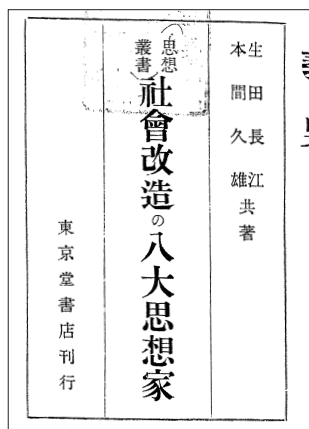
アム・ティ・グッドの『活動中のボルシェビズム（過激派）』（William T. Goode: *Bolshevism at work*, 刊行年不詳）を反訳したものである。

ロシア革命は、皇帝^{ツァー}の官僚政府・軍閥・貴族・資本家らの存在を根絶するのに力を貸したが、レーニンが率いる労農兵からなる過激派政府は、理想的国家の建設めがけて専制政治、独裁政治を執行しつつある。世界の伏魔殿とあなどられたロシアに入国し、じぶんの耳目はいうまでもなく、新聞雑誌の記事、報告書などから情報をえ、国民生活問題、社会・経済・労働・農民問題などを实地に考究し、共産主義社会の実相に迫り、真相を赤裸々に暴露したのが本書である。

内容の概略は——第一章 モスクワ^{モスクワ}に入るまで 第二章 モスクワの現状 第三章 レーニン氏との会見 第四章 ボルシェヴィツキ共和国の外交
第五章 ボルシェヴィツキ露西亞の産業 第六章 露国有名の大織物工場の参観 第七章 露国産業の将来 第八章 労農主義と土地問題 第九章 ボルシェヴィズムと労働問題

第十章 ソウエツト共和国の産業組合 第十一章 食料取締に関する労農制度 第十二章 運輸機関の現況 第十三章 興味に富めるボルシェヴィツキ共和国の教育制度 第十四章 ボルシェヴィツキ裁判制度 第十五章 公衆衛生上の努力 第十六章 ボルシェヴィツキ国家の統轄 第十七章 公吏的労働者養成所たる莫斯科訓練学校 第十八章 ボルシェヴィツキ共和の保養院 第十九章 結論 附録 露西亞魂の出現——である。

『社会問題の改造的解釈』（大正9・10）は、ミズリー大学社会学部教授チャールズ・A・エルウッドの“*The Social Problem-A Constructive Analysis, 1915*『社会問題——改造的分析』”とも訳せる）反訳である。原著者によると、第一次世界大戦の教訓として現われたものは、社会哲



生田長江・本間久雄共著
『社会改造の八大思想家』

学改造の必要であった。同書の目的というのは、一方に革命、他方に反動をさけるために、いかなる方向に社会的考慮を進めるべきかを示すにあるという。

内容の概略は——第一章 問題の提説 第二章 現代社会問題の歴史的要素 第三章 社会問題に於ける物質的及生物的要素 第四章 社会問題に於ける経済的要素 第五章 社会問題に於ける精神的及理想的要素 第六章 社会問題に於ける教育的要素 第七章 社会問題の解決——である。

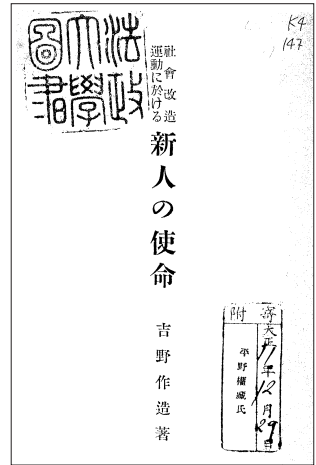
生田長江（一八八二—一九三六、明治から昭和期の評論家、小説家）と本間久雄（一八八六—一九八一、大正・昭和期の評論家、英文学者）の共著『思想叢書 社会改造の八大思想家』（大9・11）は、社会改造を目ざしたマルクス、クロボトキン、ラッセル、トルストイ、モリス、カーペンター、イブセン、ケイラ八大思想家の人と性格と思想を解説したものであり、本書はある意味で、社会改造思想のすべての分野の縮図とみることができるといふ。

とりわけ大正のこの時期、マルクス説（中心思想は、唯物史観と階級闘争説と剰余価値説^{じよよ}）は顕然^{けんぜん}として社会主義の經典となってきた。マルクスの社会主義を非難するものは、マルクス説を非難せねばならなかった。マルクス説を離れ、ぜったいに社会主義は理解できないという（四七頁）。

笠田愚禰の『家族と社会との関係』（大正9・11）の骨組は、東京帝国大学社会学部に提出した論文であるという。ただし、序文をすべて変更し、諸論、総論および第二編第五章の後半は、けずり去ったという（凡例）。

内容の概略は——総論及び緒論 第壹編 第壹章 人類家族の立成 第貳章 家族の機能 第參章 優生学上より見たる婚姻 第四章 離婚、夫、寡婦及び再三婚 第五章 男性と女性 第六章 家族と子女 第七章 奴隸と婢僕^{ひやく}（召使） 第八章 住宅 第貳編 第壹章 家、家族、国、国家、社会 第貳章 家族団体と国家団体 第參章 如何なる家族が国社会の基礎たるべき乎^か 第四章 世襲職業と家族精神 第五章 家族と財産 第六章 家族対国家、個人対国家 第七章 結論及び余論 附録——である。

ふだんわれわれは、何かのテーマに関して論文を執筆するとき、先行研究はないか、ひとわた



吉野作造著『社会改造運動に於ける新人の使命』。

〔法政大学附属図書館蔵〕

り内外の先覚の研究の有無を調べてみるが、じっさいじぶんが考えていたテーマや内容や結論と寸分たがわぬものと出会うことはまずない。ものを書いて発表するということは、よほど書き手のほうに、自信や発見があるからなのであろう。わたしなどは、つねに独創性のかけらもない研究は、活字にする価値はまったくくないものと思っているし、学問や芸術の世界では独創だけが命である。

が、じっさいよく目にするのは、さまざまの研究者や学者の成果を捜しだし、それらを手引として編集したような論文である。また偽学者や偽研究者は、格好をつけ、うわべを飾りたがるため、作品に満艦飾をほどこす。

かれらは偉そうなことを書くが、それは先覚の研究をもっともらしく論評し、じぶんの言葉で映写したものにすぎず、独創のかけらもないものである。

著者の笠田ほど実直な学究は、わたしは知らない。かれはじぶんの能力、筆力、じぶんが書くものの価値をじゅうぶんに知っていた珍しい人物である。著者は語っている。本書を著すために最善の努力はしたが、「天賦の鈍根は今尚学問の妙底堂奥（奥義―引用者）に達することを得ず」

〔「序」〕と。

著者はここで家族と社会の関係について論じてはいるが、すぐれた意見や奇抜な説をのべたものではないという。ここに記したものは、ふだん有識者の薫陶をうけ、さまざまの書をひもとき、社会文化の変遷を観、あるいは諸学者の研究成果を索引し、編纂したものにすぎない、と。

著者が考える家族と社会との関係とは、どのようなものか。まず家族であるが、その役割は「社会にたいして個人を生産する搖籃所（ゆりかご）」であるといい、一方、社会は個人を保護し、発達せしむる蓮台（蓮の花のかたちに造った仏像の台座）だという。

吉野作造の『社会改造運動に於ける新人の使命』（大正9・11）は、社会組織の改造問題について最近の考えと立場について論じたものである。

吉野によると、こんどの大戦によって覚醒をうながされた世界の人々の魂は、内外諸般の方面にわたり、「改造」の要求を熱叫しつつあるという。なぜ人々は改造を求めるかといえ、旧文明のつくった秩序と組織とのあらゆる欠陥に、耐えがたい苦悶を感じたからだという。

万人にとって、この世の中をもっと住み心地のよいものになりたい——弱い者にも、また強い者にも——といった目的に燃えて、新文明建設の大

きな運動となったのである。

内容の概略は——第一編 社会問題の帰趨 第一章 社会問題の大勢 第二章 社会改造論の分派 第二編 民衆的労働運動 第一章 我国に於ける労働問題 第二章 労働不安の世界的流行

第三編 労働運動の指導 第一章 労働運動の人道主義的指導 第二章 指導者の任務 第四編 社会問題を中心とする諸主張 第一章 民主主義・社会主義・過激主義 第二章 過激思想対応策 第三章 労働運動と政治否認説 附録 代表的資本家の労働問題観——である。

このうち、第一編第一章にある「社会問題の大勢」のなかで、「社会問題」について、こんなことをのべている。こんにち社会問題という語がひじょうに濫用らんようされているという。もしその影響が社会的なものを、すべて社会問題といたら、たいていの問題はみな、この中に入ってしまうという。

もし「社会問題」を専門的術語として使うときは、とくに原因が社会的なるもの、またはその解決が社会的でなければならぬものに限らねばならないという。世の社会問題の研究家は、貧困の原因を探索せねばならないとか、経済上の分配の不正を糾たさねばならないとか、人に最少限の生活を保障せねばならぬ、とかいろいろいうが、社会問題の対象は——貧困を根絶することに他ならない、というのが吉野の一貫した主張である。

浮田和民と宮島新三郎（一八九二—一九三四、大正・昭和期の英文学者、評論家、早大教授）の共訳『社会改造の理想と実際 全』（大正9・12）は、バートランド・ラッセル著『政治の理想』(Political Ideals, 1917) と『自由への道』(Roads to Freedom, 刊行年不詳) の二冊をいっしょにし、『社会改造の理想と実際 全』と命名したものである（「例言」）。

ぜい言を要するまでもなく、バートランド・ラッセルは、元哲学者であり、科学者でもあった。が、一九一六年に『社会改造の原理』を著して以来、社会問題や第一次大戦後の改造問題に快刀をふるうようになった。

『政治の理想』におけるラッセルの主張の眼目は、人間関係を調整して、各個人ができるだけ善を享有できるようにすること。暴力をもって社会改造の手段とせず、自由人としての精神が、社会制度と融合するところに、円満な社会や国家をつくるにあること。『自由への道』において説くところは、無政府主義や社会主義の理想とじっさいとを、批評検討したもので、そのよしあしを取捨選択し、よいところをイギリスのギルド社会主義に加工するのがよいと結論している。

三浦周行ひろゆき（一八七二—一九三一、明治から昭和期にかけての歴史学者、京都帝大教授）の『国史上の社会問題』（大正9・12）は、上代（奈良

時代) 以来の社会の組織・制度・状態やその欠陥から生じた社会問題、そしてそれにたいする政策や利害得失を批判しようと試みたものである(「はしがき」)。

著者によると、前年一月から大阪の懷徳屋で隔週一回、一時間ずつ、本年六月まで十六回講義したが、そのときの手控に、修正を加えたものが本書であるという。著者によると、第一次世界大戦の前後から、日本でも「社会問題」が論議されるようになったが、それを取りあつかう、多くの論客や学者は非歴史主義の人間だという。

問題の性質として、国民の歴史や国民性の考察を度外視して、適當の解決を望むことはおぼつかない、という。

三浦は語っている。

——現代の社会問題は、労働問題にとどめをさすようであるが、日本史上の社会問題は、そのように狭義のものではない。それは大地主とい小地主、資産階級と無産階級、特権階級と無力階級の関係——すなわち、階級間の関係であって、労働問題のようなものでなかった。上古の社会問題は、貧富問題であり、中古(平安時代)のそれは土地の国有と分配、墾田の必要と奨励、土地私有、浪人、窮民にかかわるもの。鎌倉時代になると、対御家人や貧民救済問題。室町時代になると、下剋上や家族制度の崩壊、土一揆(農民や地侍の武装蜂起)、江戸時代になると、階級間の差別的待遇、浪人や奉公人、無宿の取りしまり、米が生んだ一揆(百姓の自覚による暴発)などが社会問題となる。

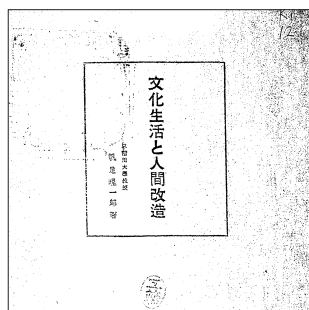
内容の概略——緒言 上古・中古の社会問題 鎌倉・室町・豊臣・江戸時代の社会問題 結語——である。

西宮藤朝の『思想問題大観』(大正9・12)は、社会問題の奥底を流れている哲学思想にふれることによって、社会問題をさらに深く理解し、それを高い見地から批判しようとしたものである。そのために著者は、哲学思想と社会思想との歴史的関係、論理的関係にくわを入れた。

内容の概略は——序論 第一章 哲学思想と社会思想 第二章 カント以後の哲学思想 第三章 新カント派の運動 第四章 ベルグソンの哲学 第五章 プラグマティズムと新实在論 第六章 近代社会思想の変遷 第七章 資本主義の思想的背景

第八章 マルクスの中心思想 第九章 唯物史観の諸要素 第十章 唯物史観と哲学問題 第十一章 マルクス以後の社会思想 第十二章 マルクス説とカント思想 第十三章 サンデイカリズムとベルグソン 第十四章 個人主義思潮 第十五章 デモクラシーの問題 第十六章 近代婦人問題——である。

これらの章節のうち、さいごの「婦人問題」についての著者の考えを紹介しておこう。婦人問題とは何か。一言でいえば、それは婦人をドレイ



帆足理一郎著
『文化生活と人間改造』。

的状态から解放し、救済することだという。従来女性は、政治的に活動することを許されず、経済的には男性の飼いのものようであり、家庭にあっても男性の権力に服従し、その性欲的ドレイであった。が、今後の婦人問題を研究するのは女性がいちばん適当し、みずからの個性と能力をじゅうぶん発揮し、文化や社会の向上発展に貢献することを目標とすべきという（四一七頁）。

帆足理一郎（一八八一—一九六三、大正・昭和期の哲学者、評論家。東京法学院を卒業後、南カリフォルニア大学、シカゴ大学でまなぶ。のち早大教授。帝国大学におけるドイツ流の哲学を専制政治に奉仕するものとして批判した）の『文化生活と人間改造』（大正10・1）は、社会改良主義の立場から執筆した好書である。同書の「序」は、生まれたばかりの子供へ贈ることばに取って代わられている。

我が新生の愛児よ！

願くば汝も亦父の意を継ぎ、

父の努力を諒とし（まことだとする——引用者）

汝の努力を百倍にして、

文化生活と人間の改造に努力せんことを！

内容の概略は——第一章 人生の芸術化 第二章 個人主義より社会奉仕主義へ 第三章 唯物史観と階級闘争観 第四章 マアックスの経済論

と其批判 第五章 ボルシェヴィズムの批判 第六章 社会主義と生産能力の減退 第七章 ギルドソシ

アリズム 第八章 無政府共産主義の批判 第九章 新時代が要求する理想の社会 第十章 社会正義と社会奉仕 以下二十五章までであるが省略する——である。

著者が考える「専制社会」とは、こうである。文化的に発達した社会であればあるほど、その社会に属する多くの人間は、共通の目的や共通の興味をもたなくてはならない。専制社会では、少数の権力者と多数の民衆とは、互いに反目し、共通の興味をもつことができない。権力者はじぶんの利益のために民衆を利用しようとする。利用されまいとしている民衆は、専制の威力を恐れて服従はするが、それは表面的、律法的な

ものである。

民衆はけっして心服していいない。内心から打ちとけて、権力者と共通の興味を感じることができない。資本主義社会では、大正のそのころも、そして平成のいまも、資本家の横暴は何んら変らず、一般企業に専制主義が深く根をはっている。

著者が考える理想の社会とは、どのようなものか。短的にいえば、それは民主的な、世界同胞的な、博愛の社会である。労働者の目的は、ただ賃金に——物質的欲望の満足にある。かれらは職場のしごとそのものに興味をもっていない。それはちょうど、資本家や企業家が己れの蓄財だけに興味をもち、従業員の幸福とか経営そのものにあまり関心がないのと同じである。

政治は政府のためにあるのではなくて、民衆のためにあるのである。

著者はまた公娼制度（鎌倉時代から昭和三十三年までつづいた）に反対の立場をとり、それを『社会の悪制度』と考えた。日本政府は、私娼を取りしまり、公娼を保護した。娼婦とか娼妓と呼ばれる売春を業とする女性の数は、つぎのようである。

〔東京附近〕	〔娼妓数〕	〔貸座敷〕
大正五年（一九一六）末 ^{すえ}	五、七二五人	三〇一
大正六年（一九一七）末	五、八三七	四四三
大正七年（一九一八）末	五、五五六	六九一

（警視庁管轄内の統計による）

また芸妓（酒興を添えるのを業とする女性、芸子）の数は左記のようであり、その数は増加の一途にある。

〔東京附近〕	〔芸妓人数〕	〔待合戸数〕	〔芸妓屋〕
大正五年（一九一六）末	五、五〇三人	一、三三八	二、一六七
大正六年（一九一七）末	六、三〇三人	一、三九三	二、三六三

大正七年（一九一八）末 七、八三四人 一、四九八 二、七七七

なお「待合」とは男女が密会したり、芸妓と客とに遊興のための席を貸す場所の意である。大正元年（一九一二）末におこなった調査によると、日本全国の遊女や芸者の数は、左記のようである。

娼妓……………五万人あまり
芸妓……………四万二〇〇〇人
酌婦……………三万四〇〇〇人

当時、日本全国の女学生の数が十万余であったことと考えると、これは相当な数である。

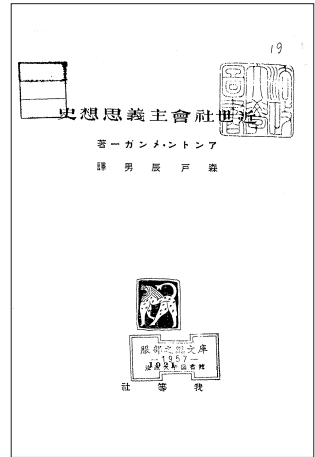
著者によれば、日本人は概ね、政治家も、実業家も、商人も、紳士も、学生も、この種の女性に近づくことを恥としないのである。そして日本の交際社会は、彼女たちの幹旋がないと成立しないのである。

納武津訳『社会と我——人間性と社会秩序』（大正10・1）は、ミシガン大学社会学部教授シー・エチ・クレーの『人間性と社会秩序』（*Human Nature and the Social Order*, 1904）の反訳である。「例言」によると、訳者が原題から離れて、このような表題をつけたのは、本書の主要部分の多くが、社会と我との関係如何に帰着するためであるとしている。

内容の概略は——第一章 社会と個人 第二章 暗示と選択 第三章 社会性と個人的観念 第四章 社会の一方面としての同情若くは親交
第五章 社会我（一）——我の意味 第六章 社会我（二）——我の諸方面 第七章 敵意 第八章 競争 第九章 指導たること或は人的優勢
第十章 良心の社会的方面 第十一章 人的墮落（或は良化） 第十二章 自由（若くは無拘束）——である。

著者は第一章の「社会と個人」のなかで、社会の成員としての個人とは何かを論究している。

各個人は、経験では知ることのできぬ一つの抽象であると同じように、各個人を離れた社会もまた抽象であるという。社会と個人は、別箇の現象を表わすのではなく、単に同一物の集合的および箇別的方面にすぎない。



アントン・メンガー著『近世社会主義思想史』。

〔法政大学附属図書館蔵〕

社会と個人の関係は、軍隊と兵卒、学級と生徒のばあいのように、全体として観たる集団と、それを組成している諸成員との関係のようなものである。

荒川賢訳『社会主義審判』（大正10・2）は、オイゲン・リヒター（一八三八―一九〇六、ドイツの政治家、自由主義左派の立場を代表）の著書の英訳“*Pictures of the Socialistic Future*”（初版一八九三年刊、第二版一八九四年刊、廉価版一九〇七年、一九一二年刊）を反訳したものという。ドイツ文の原書が手に入らなかったため、やむなく英訳本によったという。

本書は、社会主義革命がドイツに勃発したとしてできた仮想社会が、どのようなものかを描き、ついで社会主義の社会が、大きなしあわせや文化をもたらすものでないことを指摘し、さいごに民衆の不満とか自由にたいする抑圧が爆発して、反動革命がおこることにふれている。

本書は全三十五章から成っている。内容の概略は——第一章 祝典日 第二章 新しき法律 第三章 不満なる民衆 第四章 職業の選択 第五章 議会の開会 以下省略する——である。

森戸辰男訳『近世社会主義思想史』（大正10・2）は、アントン・メンガー（一八四一―一九〇六、オーストリアの法学者、法による社会主義の建設を目標とした。ウィーン大学教授）の著述『全労働収益権史論』を反訳したものである。

「訳者序」をよむと、森戸がメンガーを訳述するにいたった経緯がよくわかる。

大正八年（一九一九）東京帝国大学の和田恒教授が、経済学史の講義をよしたので、森戸はそのあとをひきつぐことになった。しかし、――

素養の少ない私にはとても一般経済学史の講義案を造るやうな資格がないことがよく解ってゐたので、私は權威ある而も簡潔な外国書の解説をするにとにきめた。

森戸はおそらく訳稿をつくりつつ、それを学生に解説して講義の代りとしたものであろう。しかし、森戸が、メンガーの著述の解説を思い立ったのは、他にも理由があったのである。

その当時、日本の経済学といえば、ほとんど「資本家の御用経済学」であったという。そして社会主義の学説といえば、すぐに「異端邪説」として一も二もなく排斥された。新理の闡明（あきらかにする）官立、私立の大学においても、ほとんど同じような偏見が支配していたという。つまり、社会主義的な論著は、すべて異端視されていたということであろう。

ついで森戸は、大正十年前後の東京大学を支配していた学問的、雰囲気について、つぎのような悲痛な証言をおこなっている。

少くとも私の学んだ東京大学に於ては、社会主義学説の研究は、全然閑却（すてて顧みない）されていたと言っても敢て過言ではない。私は此の如き学問的に不誠実な怯懦（おくびょう）な大学の空気が非常に嫌であった。それで私は、私に提供された第一の機会に於て、一面的ではあったが、とも角社会主義史を講述することにしたのである。

森戸によると、社会主義にたいする偏見や謬見は依然としてわが国の思想界に存在しているから、本書の公刊は意義なしとはしないとのべている。森戸は不幸にして筆禍をうけ、「訳者序」を書きおえた、大正九年（一九二〇）十月四日の朝、入獄するのである。……

原著者によると、本書の目的とするところは、社会主義の根本思想を、法学の見地より扱うことにあるという。内容の概略は――

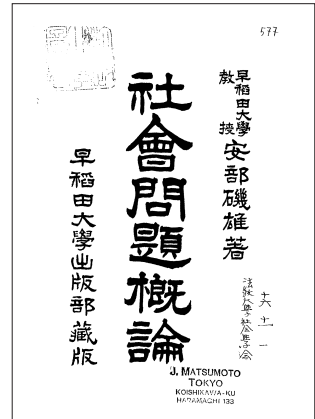
第一章 緒論 全労働収益権と生存権と労働権 第二章 ドイツの法理学 第三章 中リヤム・ゴドキン 第四章 チャールス・ホール 第五章 中リヤム・タムスン 第六章 サン・シモニスムス 第七章 プルドン 第八章 ロードベルツス

第九章 マルクス 第十章 ルイ・ブランとフェルディナンド・ラサール 第十一章 ドイツに於ける保守的社会主義 第十二章 イギリスに於ける土地国有 第十三章 全労働収益権と財産の形態 第十四章 結論――である。

メンガーによると、過去一世紀ほどの間に、労働者の意識はしだに発達し、二つの新しい権利概念が生まれたという。一つは全労働収益権と生存権である。また労働者階級が社会主義的な社会秩序を短期間で実現するには、国権をその掌中に奪取すればそれで足りるのである。

杉森孝次郎の『新社会の原則』（大正10・2）は、著者が人生や社会について省察した表現の総集である。著者によると、社会は人の創作であるという。国家はいま、社会の一部である。組合も社会も、意思の直接主体ではない。意思の直接主体は、人であるという。

内容の概略は――能力本位の教育 聡明なる女性美 女子教育と文化 ラッセルとその主張の批判的解剖 新人物と新現象 クロポトキンの哲



安部磯雄著『社会問題概論』。
〔法政大学附属図書館蔵〕

学、倫理 以下省略する——である。

安部磯雄は、著名なキリスト教社会主義者であるが、つねに深い関心を寄せたのは、社会問題の解決法であった。かれは貧乏・罪悪・不具・無智を社会の疾病しびとみなし、それらについて研究し、それらを治療するのが社会問題であると考えた。

その安部が著わした『社会問題概論』（大正10・3）は八三八頁もある大著である。この本はよく売れ、よく読まれたものようだ。わたしが手にとって目を通したものは、社会学者の松本潤一郎の旧蔵本（いま法政大学附属図書館所蔵）である。

内容の概略は——第一編 社会問題の意義及び研究範囲 第二編 貧乏及び犯罪の原因 第三編 救済事業 第四編 教育事業 第五編 国家及び資本家より見たる社会問題 第六編 労働者より見たる社会問題 第七編 都市社会問題と農村社会問題 第八編 人口問題と人種問題 第九編 社会主義——である。

本書の第一編の「第一章」は、「社会学、社会問題、社会政策、社会主義」について解説したものである。

著者によると、日本において「社会問題」や「労働問題」についての研究がさかんにおこなわれたのは、明治三十一年のころであったという。そして一部のひとびとによる「社会主義」の研究も、これらの運動とともににはじまった。明治三十四年（一九〇一）五月、社会民主党（わが国初の社会主義政党、軍備全廃、階級性廃止、財産の公平な分配を綱領とした）が創立されたが、直ちに政府により解散を命じられた。

その当時すでに「社会主義思想」は、広く国民のあいだに宣伝せられていた。社会主義運動がその絶頂に達したのは、明治三十七、八年の日露戦争のころであり、主義者が唱える非戦論は政府の怒りにふれ、その運動は嚴重なる圧迫をこうむるようになった。

明治四十三年（一九一〇）に大逆事件がおこるや、政府の弾圧はしゅん烈をきわめた。——社会主義についての集会は禁止されたばかりか、これに関する一切の書物の発売が禁止され、さらに公立図書館にある社会主義的な書物はすべて没収されることになった。極端な例として、「社会」といった文字をかぶせた書物は、その何たるかを問わず、すべて没収されるといった、こっけいすら演じられた。いわゆる日本版の「焚書」である。

大正のこの時代、世間では社会学と社会問題の意味を混同するもの、あるいは社会政策と社会主義の区別がつかない者がすくなくなかったとい

う。安部が考える“社会学”とは、社会全般にわたる事物を研究する科学である。“社会問題”とは、病気になった社会の病源と救済法を研究することである。また“社会政策や社会主義”は、社会の疾病を治療する手段や方法のことであった。

新明正道訳『財産とは何ぞや』（大正10・4）は、フランスの社会主義者ピエール・ジョゼフ・ブルードン（一八〇九—一八六五、半農半工の貧しい家に生まれる。植字工をしながら、苦学して社会主義思想をまなんだ）が著した同じ表題の名著を、タッカーの英訳本から重訳したものである。

ブルードンは、けっして“共有財産”主義者ではなかった。共有財産は、いわば“弱者による強者の支配”であり、また私有財産は、“強者による弱者の支配”であった。

本書を貫いている主張は、私有財産制にたいする批判である。ブルードンはいった。「財産とは窃盗である」と。

土田杏村（二八九—一九三四、大正・昭和期の思想家、東京高師をへて京都帝国大学哲学科にまなぶ。雑誌『文化』を創刊、晩年国家主義的になる）の『マルクス思想と現代文化』（大正10・4）は、ゲルハルト・フォン・シュルツェ・グヴェルニッツの小著『マルクスかカントか』（Dr. Gerhart von Schulze-Gäernitz: *Marx oder Kant?* 2 Aufl. 1909）を底本として、平易に解説したものである。

同書（わずか五十頁しかない、小論文。フライブルク大学で講演したもの）を反訳しなかったのは、原書は哲学の素養のないものにとって、かなり難解であると考えられたからだとしている。解説書といえは誤解を生むので、いい換えると、原書の“焼き直し”であるという。

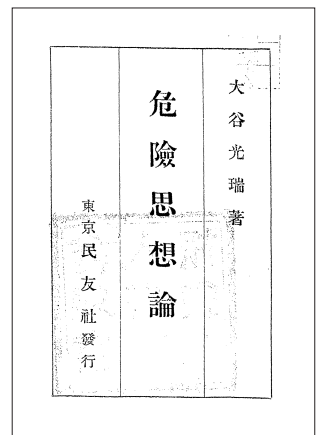
内容の概略は——前編 マルクス思想の文化学的批判 第一章 マルクス哲学とカント哲学との基礎 第二章 マルクス唯物論の概要 第三章 社会革命的虚無主義の批評 第四章 マルクス唯物史観の概要 第五章 唯物史観と新カント学派の史観 第六章 マルクス余剰価値論と労働の哲学 第七章 マルクス社会主義概要 第八章 社会主義と文化主義

後編 現代文化の文化学的批判 第一章 現代文化の基調としての象徴的精神 第二章 文化に於ける人生観の段階と均衡 第三章 政治の創造的論理とエラン・ヴィタル 第四章 政治に於ける批判哲学の功過（功績と過失） 第五章 現今三大闘争と我が国策の建設——である。

土田によると、一昨年ごろからマルクスの名が、わが思想界において重要になり、マルクスについて専門家の論議もやかましくなってきたという。しかし、マルクスの思想のほんとうの意義は、経済学者の批判だけでは十分とはいえず、むしろそれに文化哲学的批判を試みるのが重要なことと考えるという。土田はのべている。



大谷光端



大谷光端著『危険思想論』。

——世界はいまや改造されつつある。この世界改造の運動の渦巻のなかで、勇猛果敢に活動しているのが社会主義者である。社会主義運動に学的根拠をあたえ、新しい文化的世界の招来を予言し、その運動をいまのように有力ならしめた者はカール・マルクスであった。

マルクスは、実行的社会主義者の一典型として、その著書は神聖視され、その思想は正系のもものと認められ、その背信者は破門の宣告をうけた。

おおたにこうすい

大谷光端（一八七六―一九四八、明治後期の西本願寺宗主。学習院、共立学校にまなぶ。仏教を柱とした国家主義思想を奉じ、近衛・小磯両内閣の顧問に就任）は、生前、仏典研究にとどまらず、政治や経済論など、多くの著述をおこなった。

大谷が著した『危険思想論』（大正10・5）は、混沌とした当時の日本への警世の書であった。そこにみなぎっているのは、憂国の情である。著者が観るところ、最近国家としての威光がうしなわれつつあるという。日清戦争において日本は、微弱の国力をもって清国に一撃をくわえ、さらに日露戦争においては、国運を賭してロシアをくだいた。両役にさいして、国民は心をひとつにし、勇を鼓し、艱苦にたえながらりっぱな成果をあげた。

が、いまの日本国民はどうか。遊びなまけるもの、偶然のしあわせや放らつた生活を願うものがある。市井の商家は、物価の騰落を金もうけの用に供しており、これでは民衆はますます不安に駆られ、思想も動揺をきたす。また学を曲げ、世にこびるような説を唱えている連中は、名を講学（研究）に藉り、風がわりな、世の正道を乱すような説をとなえている。

いま憂うべきものが二つある。それは何かといえば、ぜいたくと放らつてある。自由を誤まると、放縦^{ほうじよう}に変じ、それは身をやぶる途である。またいわゆる「新思想」(社会主義)は、いちがいにはいえないが、すべて非真理、不自由の範囲を出てはいない。その説くところも尊^{たつと}ぶに価しない。

それは世のためならず、恍惚^{こうとう}無用の学である(一七頁)。

若山健二訳『無政府主義論』(大正10・5)は、エルツバッヘルの論著を反訳したものである。ゴドウィン、プルードン、スティルネル、バクーニン、クロポトキン、タッカー、トルストイら、七名の無政府主義者の根本思想、法律・国家・財産観やその学説の実現手段について論じている。

内容の概略は——緒論 第一章 問題 第二章 法律、国家、財産 第三章 ゴドウィンの学説 第四章 プルードンの学説 第五章 スティルネルの学説 第六章 バクーニンの学説 第七章 クロポトキンの学説 第八章 タッカーの学説 第九章 トルストイの学説 第十章 無政府主義学説 第十一章 無政府主義と其分派^{その} 結論——である。

恒藤^{つねとう} 恭^{きょう} (一八八八〜一九六七、大正・昭和期の法学者、京大滝川事件にさいして退官) 訳『マルクス主義の根本問題』(大正10・6)は、ロシアの革命家プレーハーノフ(一八五六〜一九一八)の著述のドイツ語訳『プレーハーノフのマルクス主義の根本問題』(M. Nachinson: Die Grundprobleme des Marxismus von G. Plechanov, Stuttgart, 1910)を重訳したものである。

恒藤によると、この翻訳を思い立ったのは、河上肇の勧めによるものという。内容の概略は——緒言 一 マルクス主義の哲学的基礎の研究について 二 フォイエルバッハの唯物論 三 近代の自然科学者の唯物論的傾向 四 フォイエルバッハの哲学とマルクス及びエンゲルスの唯物史観との思想的関連 五 ヘーゲルの唯物論的弁証法とマルクス及びエンゲルスの唯物論的弁証法との比較 以下、十六章までであるが省略する——である。

訳者によると、マルクスの全思想は、三つの理論体系から構成されていることがわかるという。すなわち、唯物史観^{ゆいぶつ}(社会の進化、歴史の展開の原動力を、物質的、とくに経済的生活関係のなかに求めようとする立場)——経済学の批判——社会主義的社会組織の理論などがそれである。原著者によると、マルクス主義は、一つの全世界観であると同時に、近代的唯物論(宇宙の本質は物質であり、精神は物質によって定められるといった説)でもあるという。マルクスに大きな影響をあたえたのは、ドイツの哲学者フォエルバハ(一八〇四〜七二)であり、マルクスの世界

観の哲学的基礎をつくったのは外ならぬフォエルバハの学説であった。

『社会主義の限界』（大正10・7）は、ペンシルヴェニア大学経済学教授ブーック（不詳）が著わした『社会主義の限界』^{ジョー・リミッツ・オブ・ソシヤリズム}を解説したものという。原文の概要だけをのべたものであり、解説者は高橋正熊である。

内容の概略は——第一篇 理論上の制限 第一章 問題の提唱 第二章 「カール・マルクス」及び各派経済学者 第三章 歴史の経済的解釈 第四章 歴史の経済的解釈（つづき） 第五章 公正 第二篇 実際上の制限 第六章 生産上の制限 第七章 分配上の制限 第八章 消費上の制限 第九章 統治上の制限 第十章 民権の主張——である。

高橋によると、わが国でも社会主義についての理論的な書物がたくさん出版されているが、いまは理論研究をやっておるような時代ではないという。なぜなら、われわれの目の前に幾多の大問題が横たわっているからである（「序」）。

原著者によれば、社会主義は単に理論のみのものでないという。社会主義は、社会の害悪を取りのぞこうとする一種の運動だという。それは理論と実行とを兼ねたもので、矯正の方法をも講ずるものである。

湯原元一の『思想問題の側面観』（大正10・7）は、著者がおりおりの時事に感じて起稿し、新聞などに発表した記事を一冊にまとめたものから成っているようである。

内容の概略は——思想問題の側面史 新思想の大流行 思想悪化の原因は何処にあるか 教育対文芸の争闘 青年文学の勃興 労働運動と普選運動 女子教育の根本義と人格教育 女子の貞操に現はれたる日本国民性 女子教育の社会化——である。

著者によると、最近朝野（政府と民間）のあいだで、日本国民の思想をどうすべきかについて一大問題になっているという。新思想はかならずしも悪思想でなく、旧思想もかならずしも善思想ではない。

思想の悪化は、うれえるべき事柄であるが、それよりも更に憂慮すべき点は、思想の悪化よりも、その悪用であるという。共産主義にしても、多少の真理をふくんでいる。が、わが日本の現状において、それを実行することの利害は一目瞭然である。

アメリカ建国の精神である民主主義を、わが国に採用することは、日本の国体と相容れない。ロシアのボルシェビズム（過激主義）の侵入を恐れているのはわが日本ばかりではなく、多くの文明諸国がそうである。

思想問題の最終的な解決には、国民が自主的におこなうしかない。思想の悪化よりも悪用、その善導よりも善用ということが、問題の焦点にな

らなければならぬという。

河上肇の『唯物史観研究』（大正10・8）は、著者がここ二年ほどの間に、主に『経済論叢』と『社会問題研究』などに発表したものの中から『唯物史観』に関係あるものを寄せあつめて作った書物であるという。

『唯物史観』というのは、ドイツ語の *materialistische Geschichtsauffassung* の訳である。マルクス自身はこのような名称を用いなかったが、仲間のエンゲルスがこの語を使うようになってから、世間に広まったようである。

このドイツ語を日本語に訳して『唯物史観』としたのは、福田徳三（一八七四～一九三〇、東京高商「一橋大学」教授）が最初であるという。しかし、京都帝国大学教授・藤井健治郎は、じぶんこそ『唯物史観』の訳語をつくった第一号であるといい、「先年中央公論紙上に余が此の語を用ゐし爾来、此の語は幸に同攻諸賢の承認を経たやうに思はれる」（『唯物史観の解剖其素成分』『日本社会学年報』所収、大正3・2・20）と述べている。

本書は「上篇 研究」と「下篇 翻訳」の二部構成となっている。

内容の概略は——第一章『経済学批判』の序文に見はれた唯物史観の公式 第二章 唯物史観公式中の一句について 第三章 唯物史観に所謂『生産』『生産力』『生産関係』の意義 第四章 唯物史観と必然論 第五章『共産宣言』に見はれた唯物史観の応用 第六章『資本』に見はれた唯物史観の断片 第七章 唯物史観の要領

下篇 翻訳

第一章 史的唯物論（唯物史観）略解（ボルハルト） 第二章 唯物史観と宿命論と個人の努力（ブーデイン） 第三章 唯物史観と因果律と精神生活（グンテル） 第四章 唯物史観と實際的理想主義（シュタウディンガー） 第五章 唯物史観と科学的社会主义（エンゲルス）——である。河上は「序」のなかで、こうのべている。本書の内容は、マルクスの史観の解説か又は之に関する他人の意見の紹介に止まり、その史観の『修正』は、勿論、之が非難も将た弁護も、私は本書に於て殆ど之を試むる所がなかった。と、いうことは、ヨーロッパ人の学説にもとづいて語った、いわば祖述ということか。

大杉栄の『正義を求める心』（大正10・8）は、過去に公刊した三つの論文集（『生の闘争』『絶版』『社会的個人主義』『絶版』『労働運動の哲学』『発禁本』）から抜いた記事やいままでに書きためたものを取捨選択して一書としたものである。

本書は一章から五章までと、附録（クロボトキンの「青年に訴ふ」〔翻訳〕）から成っている。内務省の役人による克明なる「検閲」による削除がじつに多い。

大杉は「社会の両極」ということに關して、「一切の社会には、必ず其の両極に、征服者の階級と被征服者の階級が控へている」（九頁）と述べている。

一条忠衛の『男女の性より觀たる社会問題』（大正10・9）は、社会問題を男女の性より考察した類のない書物である。いわゆる社会問題は、おもに経済上の問題をあつかうのがふつうである。人間の社会生活の主たる要素は、経済生活であると考えられるからである。

著者によると、経済生活は、男女が「性の社会」を維持するために生じるものであるから、そこに当然さまざまな問題がおこってくるという。

内容の概略は——第一章 男女の性の本質に關する問題 第二章 男女の性より觀たる人類の生存互助の問題 第三章 男女の性より觀たる代議政治の問題 第四章 男女の性より觀たる法律問題 第五章 男女の性より觀たる女子の労働及び職業の問題 第六章 男女の性より觀たる産児制限の問題 附録 古典に現はれたる男女道德觀——である。

地球上には無数の生物や植物が存在し、それぞれの環境のなかで「生」を営んでいる。人間は高等生物（動物）の一種であるが、「生命」というものをもっている。

以下、著者のことばを借りていえば、こういうことである。

——その生命の發展として、男女の「性」というものがある。個々の男女は、肉体的結合によって、「生命」をつくり出し、人類を生じている。そしてその生命の内容とは何かといえは、「生存」（生きて生命を維持すること）である。

人類は生存を競争すべきではなく、互いに生存を助け合わねばならない。人類の最大使命は、「生存互助」ということである。人類社会は、男女の集合によって組織され、男女の「性」によって創られた個人の団体である。

個人があつて、はじめて人類がある。男女があつて、はじめて人類がある。人類の生存互助は、男女の生存互助のあいだにおこなわれる。

じぶんひとりの福利を目的とし、他人の福利をひとりじめにする行為は、人生における最大の悪事であるという。じぶんの生命だけを發展させ、他人の生命の衰亡をよろこぶ行為は、じつにくむべき行為である。おのれひとりの飽食暖衣、しゃしぜいたくは不徳もはなはだしい。じぶんひとりが位たたく、天下をへいげいして、専横不遜なる者は、心のいやしい人間である。正義や人道をふみにじり、私利私欲をもって生存の原則と

おもっている者は、人面獣心の悪鬼である（六三頁）。

新居 格（一八八八―一九五一、大正・昭和期の評論家、社会時評・文芸評論などの筆をふるった）の『左傾思潮』（大正10・9）は、諸雑誌（『国家学会雑誌』『解放』『我等』『早稲田文学』『新潮』その他）に発表した論文または感想をまとめて一書としたものである。

本書はぜんぶで二十章から成っている。内容の概略は――第一 直接行動の考察 第二 分産か共産か 第三 コール産業民主思想の基調 第四 コスモポリタニズムの点描 第五 世紀末の貴族性 以下省略する――である。

“直接行動”という、ことばがある。これはフランス語の *action directe*（アクション・ディレクト）を訳したものであり、フランスで生まれたものという。そしてこの語をはじめて用いたのは、「労働取引所連合会」の書記長ペルーチェであった。

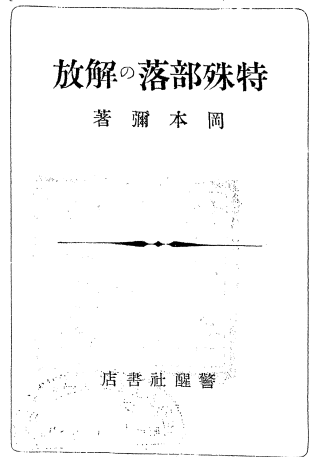
この“直接行動”は、新居によると、かならずしも暴力と結合しないのである。そうであるなら、この語はいったい何を意味するのであろうか。第一義は、“反議会主義”（政治的行動の反対）であるという。ある者は、直接行動というのは、利害関係とか恐怖によって、雇主をおどし、労働者の要求をもたらすすべての手段であるといっている。

またある者は、それを革命のための準備であるとみなしている。あるいはまた、直接行動とは、労働者階級が自由と自治の原理をみとめることを意味する、といった者までいる。

町野並樹の『社会思想の変革』（大正10・9）は、トーマス・カーカップの著述（原書名、不詳）を解説したものか。純然たる翻訳でもなさそうである。ぜんぶで十五章あるが、内容の概略は――第一章 序論 第二章 旧経済的変動 第三章 現制度の勃興 第四章 社会主義の起原 第五章 初期の社会主義 以下省略する――である。

著者によると、“社会主義”を口にするものは多いが、それをじっさい理解している者となると、ごくわずかではないかという。そして、この小著の目的は、社会主義の明確な、偏しない叙述を試みるにあるという。社会主義が解決せんと企てたものは、“人種の幸福の増進”であり、さらにその目的は、“一大経済的変動”をもたらすことであるという。

高畠素之訳『財産進化論』（大正10・9）は、ポール・ラファギュ（不詳）の同名・著書の反訳である。パリの『新評論』に連載した記事を、あとでまとめて単行本として刊行したところ好評を博し、たちまち各国語に翻訳された。高畠が用いた底本はゾンネシャイン社の英訳本とのことである。原著者が、本書において論じようとしたのは、財産が資本的形態を取るにいたる以前の、さまざまな財産形態についてであった。



岡本弥著『特殊部落の解放』。

ある。すなわち――、

- 一 個人の占有にかかわる財産——食物、衣類、ぜいたく品（指輪、宝石）、住居。
- 二 財産——労働器具——ナイフ、かんな、くわ、メス、顕微鏡。
- 三 財産——資本。

などである。

岡本弥の『特殊部落の解放』（大正10・10）は、わが国に“特殊部落”といった特殊階級^{わたくる}の存在をなくす趣旨により、編述したものである。

著者は「自序」のなかで、わたしは明治九年（一八七六）にいわゆる特殊部落に生まれたとのべている。幼いとき、社会の状態に感奮^{かんぶん}（心に感じて奮いたつ）するところがあり、その後同族の研究をおこない、本来部落民は賤民でないことを知ったという。

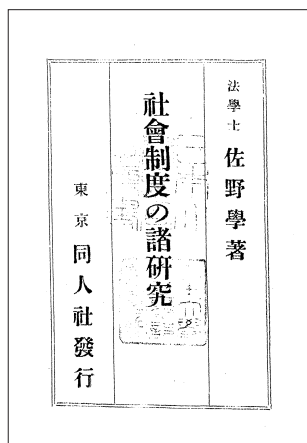
これまでさげすまれて来たことを不当とおもひ、世間の謬想^{びやうそう}（あやまった考え）を打破し、同族の向上発展、部落の解放を期して同書を上梓したという。

内容の概略は—— 一 特殊部落とは何んぞや 一 特殊部落撲滅の意義 一 特殊部落撲滅の必要 一 特殊部落撲滅の二方面 一 特殊部落撲滅の百案 外面的希望 現内閣 特別名撤廃^{てくべい} 内面的希望 先覚者に告ぐ 我徒の富豪 附録 志士の部落観——である。

内容の概略は——第一章 現存財産の諸形態 第二章 原始共产制 第三章 家族即ち血族集産制 第四章 封建的財産 第五章 ブルジョアの財産——である。

“資本”（ラテン的起原のことば）とは、利益を生むもののことであるが、資本ということばに相当する財産形態は、十二世紀以来ヨーロッパにおこったものという。この形態（かたち）は二つの部類に縮約できる。

その一つは、共有財産の諸形態——古代に生じた共有財産、共有地など。近世に生じた共有財産（造幣局、郵便局、公道、国立図書館、博物館）など。もう一つは、私有財産の諸形態で



佐野学著『社会制度の諸研究』。

明治四年（一八七二）八月、新政府は大政官布告をもって、その身分に関する制度を撤廃したのであるが、その後も世間は「部落民」として特殊の待遇をしたのである。著者は、「部落を作った下手人は世人で、部落の特性を醸成したものは世人の偏見である」（二二三頁）とのべている。何はともあれ、世間の理由なき蔑視や圧迫から同胞を救い、解放せねばならぬとしている。

野村兼太郎（一八九六～一九六〇、大正・昭和期の経済史学者、慶応義塾大学教授）の『社会生活と理想哲学』（大正10・10）は、純粹の学術論文ではなく、大正九年（一九二〇）七月以降——諸雑誌（『三田学会雑誌』『太陽』『中央公論』『解放』など）に発表した記事を収録したものである。

内容の概略は——第一篇 社会観 第二篇 社会と個人 第三篇 個人の意義 第四篇 生存権の樹立——である。

野村によると、社会を改造したり、社会を理想化するには、各人の生命が国家や社会によって保障されねばならぬという。すなわち、生存権の確立が必要であるということである。社会が発展してゆくには、段階を経る必要がある、一つの段階からつぎの段階にいたるには、飛躍しなければならぬという。そして著者は、「何はともあれ、社会の進化のために、勇氣ある冒険家の出現を希望する」、といったことばで本書を結んでいる。

佐野 学（一八九二～一九五三、大正・昭和期の社会運動家、日本共産党に入党するのちに転向。水平社の理論的指導者、早大教授）の『社会制度の諸研究』（大正10・11）は、大正八年（一九一九）来、諸雑誌（『解放』『我等』『先駆』など）に発表した論文をまとめて、一書としたものである。

内容の概略は——第一編 社会階級の諸研究 一 階級社会の発生的考察 二 社会戦の社会学 三 古代社会階級考 四 貴族階級の本質と心理と運命 五 軍人階級の社会史的考察 第二編 農民史^{およ}及農民問題の諸研究 一 社会主義と農民問題 二 農業の資本主義化と農民運動 三 中世末期の共産的農民運動 四 露西亜農民史梗概 第三編 社会制度の種々 第四編 社会思想その他——である。

佐野は「覚え書き」のなかで、本書には社会階級に関する論文が多い、とのべている。これまでの社会階級を根本的に分類すると——勝利する階級と敗北する階級にわけられるという。

人生は優勝劣敗であるが、社会の階層を構成しているのは、つぎのような人間である。

支配者と被支配者

搾取者と被搾取者

労働階級と非労働階級

貴族群と平民群

階級を分けているのは、職業でもなければ、財産の額でもない。それは力である。

著者によると、階級を発生させ、これを維持しているのは、武力・智力・財力であるという。職業の別は、結果にすぎない。雑多な中間階級は、この二大階級のいずれかに附属するという。

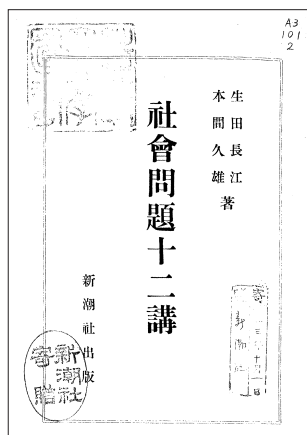
山川均^{やまかわ ひとし}（一八八〇～一九五八、明治から昭和期にかけての社会主義者。日本共産党の創立に参画するが、のち関係を断ち労農派の論客として活躍した。戦後、社会党左派の理論的指導者となった）訳『マルクス学説体系』（大正10・11）は、ルイス・ブディン（不詳）の論著（一九〇七年刊）を反訳したものである。

「はしがき」によると、本書の第一の特色は、マルクスの全学説を解説したところにあるという。日本においてマルクスの説を批評する者の多くは経済学者であり、かれらはマルクスの経済学説を批評する。ついでマルクスの唯物史観がときどき論議されるという。

本書の第二の特色は、マルクス説にたいする反対批評、さらにそれにたいするマルクス主義者の反駁をものせたことである。

内容の概略は——第一章 マルクスと近時の批評家 第二章 唯物史観と階級闘争 第三章 唯物史観と其批評家 第四章 価値及び剰餘価値 第五章 労働価値学説と其批評家 第六章 マルクス価値学説の『大矛盾』 第七章 経済上の矛盾と資本主義の消滅 第八章 資本の聚積^{しゅうせき}と中産階級の滅亡 第九章 無産階級と革命 第十一章 結論 附録——である。

白井新一郎（一八六二～一九三二、明治・大正期の志士・実業家）は、ジャーナリストの福本日南（一八五七～一九二二）とともに東邦協会を設立したり、台湾総督・後藤新平の属僚となって原住民を弾圧したり、同島の土木方面でも多岐にわたって活躍した。その白井が著したのが『社



生田長江・本間久雄著
『社会問題十二講』。

会極致論』(大正10・12)である。

本書は、社会全体の組織についての原則を説明したものである。上巻、中巻、下巻の三部構成となっている。内容の概略は——上巻 第一編 社会組織の発端 第一章 動物生存の実相 第二章 社会組織の資格 第三章 社会組織の事由 第二編 社会組織の内容 第三編 社会組織の目的 第四編 社会組織の基礎

中巻 第一編 社会組織の秩序 社会組織の経済 第三編 社会組織の風俗 第四編 社会組織の機関 下巻 第一編 宇宙活動の定則 第二編 道理徳法の区別 第三編 世界統一の経営——である。

著者によると、この広い人間社会にとどまる資格をうしなう者がいる。たとえば、じぶんの義務を尽さない者、他人の権利を侵す者、社会組織を破壊する者がそれである。

社会組織の破壊者は、小さな破壊であれば懲罰され、大きなものとなると誅殺(その罪を理由として殺すこと)される(七頁)。

生田長江(一八八二—一九三六、明治・大正期の評論家、大杉栄と親交があり、社会問題への関心をふかめた)と本間久雄の合著『社会問題十二講』(大正10・12)は、発行後五年にして五十一版もかさねた大ベストセラーであった。

「自序」には、いま人類の生活は一大転機にあるといい、世をあげて「改造の要求」に熱中している、とある。本書は、現下の社会問題について、何人にもわかりやすく説いたといい、社会問題の全般について説明を加えたものという。専門的な難解な理論をさけ、だれにでもわかる解説を心がけたというが、著者が目ざしたものは、みごと成功したといえる。それは同書が爆発的に売れたことから明らかである。

内容の概略は—— 第一講 人類解放運動としての仏蘭西革命 第二講 産業革命と労働階級の発生 第三講 資本主義の解剖 第四講 空想的社会主義と科学的社会主義 第五講 マルクス主義の概観

第六講 デモクラシイの研究 第七講 ギルド社会主義・サンチカリズム・ポリシエビズム 第八講 労働組合と総同盟罷工 第九講 選挙権拡張問題 第十講 性的道德の革命 第十一講 婦人参政権問題 第十二講 婦人と職業問題——である。

このうちから、いくつかの項目をひろい簡単にふれておく。まず「社会問題」のことである。

社会問題は、いずれの国、いずれの時代においても存在したはずである。が、著者によると、大正のこんにちほど、熱心に、さかんにそれが討究せられ、論議される時代はないという。社会問題は、社会生活のうえに生起してくる、いろいろな問題を指すのであるが、社会問題は、同時に人の問題でもあるという。

社会問題は、錯雑^{さくざつ}せる社会現象のようにこみいっているという。ふつう社会問題というと、労働問題がさきにくるが、それよりもっと重要なのは婦人問題である。けれど婦人というものは、これまであまり勘定に入れられることはなかった。

マルクスの名が出てくると、よく言及されるのが『唯物史観』である。これはどのような見方、歴史観をいうのであろうか。それは、われわれの五官が知覚する物質界こそが、唯一の、真実の世界だとする考え方である。精神は唯物界の反影にすぎない、と説く。いっさいのもの、いっさいの現象は、物質である。物質の運動である、といった史観である（一四七頁）。

民主主義について。

著者はいふ。直接民主主義は、いまおこなわれるべきではないが、アリストテレスがいう意味の民主主義は、いまも活きている。そして、民主主義でもっとも注意を要する点は、民主主義は形式ではなく、精神であるということ。この精神は、政治上ばかりか、社会上、産業上にも活きたかとなつて、これを貫くものでなければならぬ、という（二〇二頁）。

労働組合について。

労働組合の概念がわが国に外国から入って来たのは、維新後のことであろう。その起原については諸説があるが、ブレンターノ（一八四〇―一九三二、ドイツの経済学者）は、中世のギルド組織に起るものとしている。が、じっさいは産業革命の結果あらたに生まれたものである、といった説が有力である。

イギリスにおいては、すでに十八世紀に労働組合があらわれ、労働者階級は、みずからの生活防衛のために資本家階級と対峙した。ブレンターノの定義によれば、労働組合というのは、賃金労働者からなる利益団体なのである。――それは労働条件の維持ならびに改善を目的とする組織であり、失業したときには救済に乗りだす団体でもある。

労働組合は、ときにその組合員が団結し、ストライキをおこすが、闘争それ自体を目的としないのである。

『現代社会問題研究 第四巻』（大正10・12）は、おもに「現代都市の問題」を、同書の第五巻は「農村問題」をそれぞれ取りあげたものである。

『都市』とは、人口が多くあつまっている大きなまちのことである。同時にそこは政治・経済・文化の中心でもある。一方、『村落』は、農村や漁村など、都市にたいする集落（人家がむらがり、あつまっている所）を総称したものである。

著者によると、都市と村落とのあいだには、性質上の大きなちがいがあるという。都市の職能（はたらき）とは何か。人類の多くは、『物質』というものと離れることなく、経済行為をなして生きている。経済行為の第一段階は、生産行為（農業、林業、水産業、採掘業、工業など）である。その第二段階は、商業行為（運輸、売買、金融、企業など）である、と。

生産や商業行為は、すべて人口の多い都市部とその周辺においておこなわれるのがふつうである。

村落（ことに農村）とは、農家があつまっている村のことである。農村の定義、その組織、その特徴、それがかかえている問題は一樣ではない。また農村を民衆の側からみた場合と、国家レベルでみた場合とは、見解がことなってくるという。

国家よりみたる場合、農村の職能とは何かといえは、そこは単に食料の供給地としての役割をはたしているだけではない。農村は『国防』にとつてひじょうに重要な地帯なのである。なぜなら、農村は『兵の産地』であるからである。国防こそ国家運営のかなめと考えた場合、農村は国家の基礎なのである。

『国体より見たる 社会問題と現代思想』（大正10・12）は、健全なる国民思想を確立せんがために編んだものという。第一次世界大戦後、現代思想は異常な動揺をきたしたという。そして日本人は立憲国民として、世界の大勢や時勢に通じる必要があるという。

本書を刊行した目的というのは、新時代の青年や一般公民の思想を善導し、国民行為の基調とするためであるという。内容の概略は——緒論

第一編 デモクラシー 第二編 労働問題 第三編 婦人問題 第四編 民族問題 第五編 社会主義と社会政策 第六編 過激派 第七編 時

代思想 結論——である。

国体とデモクラシーとの関係について、編者はつぎのような考えをのべている。

——わが大日本帝国は、大和民族が占拠する国である。その人種は、単一であり、他の民族と交わったことがない。したがって、征服者も被征服者もなく、優等族も劣等族もないのである。国民はことごとく皇室を祖宗と仰ぎ、天孫の後えいであることを自覚している大和民族である。建国の体制は、いわゆる一君万民の制であり、上に君主がいる。

君主（天皇）は、万民をわが赤子（あかこ）のようにみている。下に隷属（れいぞく）せる万民がいるが、かれらは君主を父母のように仰いでいる。君民のあいだには、なんらの異民族や異階級もなく、上下相融（あひま）和して、皇室を中心として、平等の社会を形成している。

わが国体は、一君万民の平等思想をもって建国の体制となし、政治の目的は、人民の幸福を増進することである。さらにわが国体は、多数者に諮詢（しじゆ）（意見をもとめる）し、民衆とともに政治をおこなうことを最良の方法としている。このことは期せずして、デモクラシーの理想と一致するものである。わが皇室が偉大であるのはこの点にある。（皇室は）征服者として、権力により、人民を強制的に畏服させてはいない。皇室は、人民の総宗家、人民の父母として、人民の総意志を集約し、表現代表したものである。

だから天皇の意志は、人民の意志であり、人民の意志は天皇の意志である。天皇の意志と人民の意志とが同一であるとする、人民のための天皇の政治は、“人民のための人民の政治”とおなじであって、その相違は単に法律上の形式にすぎないのである（第一編 デモクラシー「四 デモクラシーと我が国体」）。

このような思想は、天皇を君主として仰ぐ、天皇制絶対主義の統治体制を是認するものであり、あたかも天皇制の理念は民主主義の精神に合致するものであるかのごとく説いている。

日本の労働問題について。

日本の労資の関係は、むかしから主従関係、親方と徒弟の関係であったという。だから“労働問題”はおこらなかった。労働問題は、産業革命の落子（おとしこ）なのである。

産業の発達とともに、わが国の労働者は勢力を増進させてきた。ヨーロッパの思想（社会主義、共産主義）や労働運動の刺激をうけて、さまざまの運動をおこすようになった。産業は急激に発達したが、労働者の生活はそれにともなわず、かえって困窮するようになった。

日本の物価は、明治三十三年（一九〇〇）から大正七年（一九一八）までの間に、二十五割四分高騰した。しかし、賃金のはうはこの間に八割六分ほど上っただけである。労働者は生活苦に堪えていたが、第一次大戦の刺激をうけて、ついに爆発した。

怒りの爆発は、大正七、八年（一九一八、一九）以来の労資の衝突とストライキとなって表れたが、まだそれは跡をたたないのである。

注

- (1) 『国語大辞典』（小学館、昭和五十六年十二月）
- (2) 「最近政変史論」（『太陽』第十九卷第四号所収）
- (3) 吉野作造「憲政の本義を説いて其有終の美を済する途を論ず」（『中央公論——新年号』第三十一年第一号所収）
- (4) 三角寛『日本勃興秘史』（二元社、昭和十年六月）の八四〇八五頁を参照。また『警視庁史 大正論』の六〇六〇六二五頁にも、シーメンス事件の記事がある。のち収賄者は海軍法廷において、それぞれつぎのような判決をうけた。待命海軍中将・藤井光五郎は懲役一年、追徴金二万一千五百円、待命海軍中将・松本和は懲役三年、追徴金四十万九千八百円。
- (5) 小沢栄一・小田泰正『研究 日本史』（清水書院、昭和三十一年九月）、四二一頁。
- (6) 『コンサイス世界年表』（昭和五十一年一月）、四四一頁。
- (7) 饒平名智太郎「水平社大会特派記」（『改造』大正12・4）を参照。
- (8) 『水平運動』創刊号（大正13・10・1発行）にもこの綱領がのっているし、『復刻版初期水平運動資料集 全五巻 別冊1』（不二出版、平成元年十月）にも、この記事がある。
- (9) 亀戸警察署の位置は、『警視庁史 大正編』によると、「南葛飾郡亀戸町大字亀戸二九六二番地」（同書、一一三頁）とある。そこは「亀戸事件犠牲者之碑」がある浄心寺にも近く、いま「三菱東京UFJ」（銀行）がある角地のあたりである。
- (10) 検束された者が署内でさわいだ、といったエピソードは、『東京震災録』（東京市役所、昭和2・3）にも記事があり、それには「署内の留置場に於て喧騒を極め、鎮撫の軍隊に反抗して刺殺せられたるあり」とある（第十七節 亀戸警察署 一三九頁）。
- (11) 鈴木文治「亀戸事件の真相」（『改造』大正12・11・1）
- (12) 『大正編年史』、二六七頁。
- (13) 田中時彦「虎ノ門事件——皇太子を狙撃した難波大助」（『日本政治裁判史録 大正』（第一法規出版株式会社、昭和四十四年八月）、四四九頁。
- (14) 大塚有章「難波大助の家族たち」（『文藝春秋』昭和四十二年六月特別号所収）によると、この銃は伊藤博文が初代の朝鮮統監として京城でくらししていたとき、つねに身辺においていたものという。伊藤はこの杖銃を実家である林家の当主・林文太郎に譲った。林家と難波家とは親戚関係にあったから、その縁故から難波家に渡ったようである。
- (15) 今村力三郎『法廷五十年』（専修大学出版局、平成五年三月）、八三頁。
- (16) 松華堂編輯部編『治安警察教本』（松華堂、昭和十一年四月）、三二〇～三二二頁。



山口孤剣の墓。(下関市西神田の市営墓地の入口ちかくにある)。〔筆者撮影〕

- (17) 『日本勃興史』、八三頁。
- (18) 『日本文化史大系 第12巻』(誠文堂新光社、昭和十七年十月)、一四〇頁。
- (19) 『画報 近代百年史第十集』(国際文化情報社、昭和二十七年四月)、七五〇頁。
- (20) 矢作栄蔵「米価騰貴の原因と政策の施設」(『太陽』第二十四卷第十二号所収)
- (21) 魯庵生「案頭三尺」(『太陽』第二十四卷第十一号所収)
- (22) 『図説 日本文化の歴史』^⑫ 大正・昭和(小学館、昭和五十六年五月)、一九四頁。
- (23) 安藤達郎『大学人の日本史』(研文書院、昭和四十七年九月)、三八七頁。
- (24) 注(22)の四八頁。
- (25) 「日本に於ける労働不安」(『太陽』第二十六卷第七号所収)
- (26) 『図説 日本庶民生活史 第八巻 大正・昭和』(河出書房新社、昭和三十七年八月)、一六四頁。
- (27) 『図説 日本文化史大系 12 大正・昭和時代』(小学館、昭和三十二年九月)、五二頁。
- (28) 馬場恒吾「治安維持法の危険性」(『我観』春季特輯号、大正14・4・1)
- (29) 芳賀栄造『明治大正筆禍史』(文行社、大正十三年十一月)、一七七頁。
- (30) 『日本政治裁判史録 大正』(第一法規出版株式会社、昭和四十四年八月)、二五一頁。
- (31) 「新聞紙法違反被告事件 第一審公判始末書及同判決書」(大原社会問題研究所蔵の写真複写史料)を参照。

〔補注〕

山口県下関市が生んだ最大にして、最初の社会主義者・山口孤剣(旧姓福田、本名・義三、一八八三―一九二〇)の墓の写真。孤剣は明治十六年(一八八三)四月十九日に下関豊前田町で呉服商の三男に生まれ、大正九年(一九二〇)九月二日四国宇和島で病死した。享年三十八歳。合掌。……